

大正六年九月作。

大正六年十月。新富座初演。

初演當時の主なる役割——頼豪（市川左團次）月若（市川松蔭）大江匡房（市川壽美藏）佐次兵衛（市川小團次）叡山の僧支快（市川猿之助）三井寺の僧勇達（中村鶴藏）など。

登場人物——三井寺の僧頼豪。三井寺の兒月若、春若。大江匡房卿。漁師佐次兵衛。匡房の家來式部。叡山の惡僧立快。全秀、雲哲。兒犬稚、年丸。三井寺の惡僧勇達、良俊。花見の武士、女房、ほかに男女大勢。

(一)

近江國、三井寺の門前。正面より上の方にかけて、すこしく斜めに山門をみる。山門は去年焼亡して新に建てられたるなり。下のかたの奥は長等の山つゞきの心にて、櫻の花は一面に咲きみだれたり。承保二年の春三月、陰りたる日の午後。

（みやこの風俗の男女大勢、思ひ／＼のすがたにて花をみながらたゝすむ。鑿田の浦の漁師佐次兵衛、五十餘歳、藁菴に入れたる泥龜を持ちて出づ。）

佐次兵衛。おゝ、毎年のごとながら花見の人達がようあつまつて來ることぢやなう。

（花見の群のうちより武士一人出づ。）

頼豪阿闍梨

武士。これ、これ、そちはこのあたりの者か。

佐次兵衛。はい、はい。この堅田の浦に住む漁師でござりまする。

武士。この三井寺の山門は去年の夏のはじめに焼亡したやうに聞いて居つたが、みごとに再建が出来たものぢやな。

佐次兵衛。なんでもこの長等の山櫻がみんな青葉になつてしまつた四月のはじめ頃でござりました。

あの叡山の悪僧僧がおよそ二三百人も不意に押寄せてまゐりまして、いやもうお話にもならぬ亂暴狼藉をはたらいた擧句の果に、そこにもこゝにも火をつけて、この山門から坊へかけて三分一ほども焼き拂つてしまひました。

(この中に花見の人々は佐次兵衛のそばにあつまる。花見の女房一人すゝみ出づ。)

女房。今にはじめぬ山法師の亂暴、おそろしいこととござりましたな。

武士。勿論、こちらでも手をつかねて、かれらの亂暴を眺めても居るまい。定めて手痛く防いだであらうが……。

佐次兵衛。こちらのお寺からも大勢が打つて出て、兩方入りみだれて大騒ぎ。なにをいふにも不意討のことで、こちらには思ふやうな働きも出来ず、叡山方は思ふがまゝの亂暴を仕盡して、勝

開をあけて引揚げました。

女房。口惜いこととござりましたな。それにしても一年と経たぬうちに、斯うした山門が再び立

派に出来あがるとは……。

武士。さすがは三井寺ぢや。威勢のほども思ひ遣らるゝなう。

(門内より月若、美しき兒姿にて出づ。)

佐次兵衛。おゝ、月若か。

月若。おやぢ様。毎日御苦勞でござりまする。

(花見の女達はさゝやき合ひて月若を見る。)

武士。いや、これはいつまでも邪魔をいたした。

佐次兵衛。失禮御免くださりませ。

(武士は去る。他の人々も月若を見かへりながら思ひくゝに立去る。)

月若。いつもの品はお持ちなされて下さりましたか。

佐次兵衛。おゝ、この通りに持つて来た。(薬苞をみせる。)琵琶のみづうみで捕つたばかりの泥龜三匹、數も違へずになんちんと持つて来た。したが、月若。おれには何うも判らぬことがあるぞ。

月若。それは何事でござります。

佐次兵衛。ほかでもない、この泥龜ぢや。そなたの頼みでこの月初めから、毎日かうして三匹づつの泥龜を持つて来るが、一體これを何にするのぢや。そなたの御師匠様はこの寺でも名の高い頼豪阿闍梨、道徳堅固のお方といふことは世間でもみんな知つてゐる。その御師匠様がこのやうな生物を毎日毎日取りあつめて、なんになさる思召か、おれにはどうも呑込めぬ。

月若。さあ。(返事に困る。)

佐次兵衛。何かこれには仔細があらう。あけくれお傍に仕へてゐるそなたがそれを知らぬ筈はあるまい。これ、どうぢや。

月若。さあ。それはどうも云はれませぬ。

佐次兵衛。親子の仲でも云はれぬか。いや、それで判つた。頼豪様はこのごろ持佛堂にお籠りなされて、おそろしい祈禱とか調伏とかをしてゐらるゝといふ噂ぢや。この泥龜も大方その生贖に供へるのであらう。さあ、正直に教へてくれ。

月若。え。

佐次兵衛。おれは漁師渡世こそしてゐるが、呪ひの調伏のとそんなおそろしいことの種に違ふなら、

月若。(この泥龜は渡されぬ。おれはこのまゝ持つて歸るぞ。(行きかゝる。))

月若。(追ひ纏る。))あ、もし、待つてくだされ。それを持つて行かれては……。

佐次兵衛。そんなら正直に譯をいふか。

月若。(困る。))それはあの……。

佐次兵衛。おゝ。

月若。お師匠さまが召上るのでござりまする。

佐次兵衛。えゝ、この親を馬鹿にするな。(月若を突き倒す。))頼豪阿闍梨とも云はるゝお人が耐や泥龜を食ふか食はぬか、積つてみても知れたことぢや。もうよい。おれは正直者ぢやに因つて、けふまでは何の氣もつかずにうか／＼持つて來てゐるが、もうこの後は誰がなんと云はうとも、雜魚一匹でも持つて來ることぢやないから然う思へ。いかに尊い阿闍梨様でも、呪ひの調伏のと、聞いてもぞつとすることぢや。

月若。いえ、呪詛の調伏のと、それは跡方もないことでござりまする。兎もかくも今日だけは……。(巻を取らうとする。))

佐次兵衛。(突き退ける。))えゝ、ならぬ、ならぬ。

月若。でも、それがござりませいでば……。

(ふたりは争ふ。大江匡房卿、二十五六歳、家來式部を連れて出で、この争ひを窺ひぬたりしが、やがて二人のあひだに割つて入る。)

匡房。兩人、鎮まれ。

佐次兵衛。はい、はい。

月若。お、こなたは匡房の卿。御参詣でござりましたか。

匡房。唯今あれにて承はれば、頼豪阿闍梨がその泥龜を御所望とな。

佐次兵衛。はい、はい。左様でござりまする。この月若はわたくしの悴で、七つの春からこのお寺に

おねがひ申して、實相坊の頼豪阿闍梨様のおそばに御奉公して居りますが、先月の末わたくしのところへ尋ねてまゐりました、阿闍梨様が御所望ぢやに因つて、あすから泥龜を三匹づつ持つて来てくれいと申します。なにかの放生會にでもお遣ひなされることと思つて素直に承知いたしました、そんな様子も一向なく、噂にきけば阿闍梨様は持佛堂にお籠りなされて、何かおそろしい祈りごとをしてゐらるゝとやら。

匡房。これ、これ。滅多なことを申すまいぞ。最前も月若が申した通り、阿闍梨には身の養生の

藥として、その泥龜を三度の膳に供へらるゝのであらう。

佐次兵衛。え。

匡房。はて、なにをおどろく。むかしこの三井寺に住みたる教待上人は、常に琵琶湖の魚を食ひ、百餘歳の長壽を保ちて、蓮華往生を遂げたるは、あまねく人の知るところ。かゝる例のあるからは、頼豪阿闍梨のみを怪むは愚かぢや。凡夫のあさき心を以て高德の聖をうたがふな。

佐次兵衛。はい。

匡房。どうぢや、合點がまるつたか。

佐次兵衛。はい。

月若。今も聞かれた通りぢや。御師匠様が泥龜を召上られたとて不思議はござるまい。さあ、その苞を渡してくだされ。

(月若は寄つて薬苞を受取りうとする。佐次兵衛は渡すまいとして、匡房の顔をみて少し猶豫ひ、澁々ながら月若にわたす。)

月若。ありがとうございました。

頼豪阿闍梨

佐次兵衛、時に月若。わしもだんくんに年を取つたせるか、些との道のあるいて來ても、足や腰が痛んでならぬ、そなたの部屋で少し休ませて貰ふわけには行くまいかな。

月若、え。(すこし迷惑する。)

佐次兵衛、行つては悪いか。

月若、いえ、悪いことはござりませぬ。

匡房、老人が疲れたとあれば、寺内にて暫時休息させたがよからう。匡房はたびくの參詣ぢやあらためて案内には及ばぬぞ。

月若、はあ。では、おやぢ様。

佐次兵衛。(匡房に。)お先へ御免くださりませ。

(月若は佐次兵衛を案内して門内に入る。)

式部、殿、教待上人のためしは兎もあれ、頼豪阿闍梨が殺生戒を破つて、泥龜を朝夕の膳に上す

などとは、あるまじき儀ではござりませぬか。

匡房が若かりし時より師匠ともたのみし頼豪阿闍梨が、戒壇の争ひより叡山に恨みをふくみ、三七日の調伏を行ふといふ風説、都までもかくれなければ、ひそかに様子を窺ひにま

式部。

はあ。ありし處、法師の身として魚類を求むるは、まさしく調伏の生贄に相違あるまい。年ごろの師弟の好み、これより阿闍梨に面會して、御意見申さねば相成らぬ。式部。まるれ。

(匡房と式部は門内に入る。叡山の惡僧相模坊を快、播磨坊全秀、尾張坊雲哲の三人は長巻を持って出づ、つゞいて兒犬稚、年丸の二人は弓矢を持ち出て出づ。)

立快、三井寺の御僧達に物申す。われ等はたづぬる仔細あつて、實相坊の頼豪阿闍梨が許へまかり越した。

全秀、御案内なくば是非におよばず。

雲哲、山門をふみ破つて打通る。

一同、御案内下され、御案内ください。

(高聲に呼はる。門内より三井寺の惡僧但馬坊の勇達、現住坊の良俊、兒春若の三人出づ。)

勇達、いかなる御用か存せぬが、日ごろ確執の仲なる叡山の御僧達、この門内へは一足も踏み込むこと御無用でござる。

良俊、但しよんどころなき御用とあらば、これにて遠慮なく申聞けられい。

頼豪阿闍梨

春若。われく代つてうけたまはり申さう。

立快。頼豪阿闍梨にはこのごろ山門調伏の祈りを試み、わが立つ柚の佛法をほろぼさんと念ずる趣、うけたまはつて捨置かれず。

全秀。阿闍梨を引立て、まるれとある、山門一同の評議によつて、われく一同下山いたした。

雲哲。唯今も申す通り、飽までも案内を拒むに於ては、われく力づくでも踏み破つて通る。

犬稚。去年の禍に懲りもせず、

年丸。強て敵對せらるゝか。

立快。御返答いかゞござる。

勇達。たとひ何と申されても、ひとりも通すこと相成らぬ。まして頼豪阿闍梨を引立て、まるる

立快。などとは以ての外のこと。あらためて返答までもない。疾くく門前より退散めされい。

え、面倒な。それ。

式部。方々待たれい。又しても由なき鬨諍の沙汰。お控へめされ、お鎮まりめされ。

立快。誰かは知らねどおあつかひ無用。われ等も法師の意地、あくまでもこの門を押破つて罷り

通る。

五人。お止めなさるな、お止めなさるな。

(五人は又押して通らんとするを、式部、勇達等はさへへる。門内より大江匡房出づ。)

匡房。騒がしや、方々。江の帥匡房がおあつかひ申す。お控へめされ。

(匡房の名を聞きて立快等五人も顔のみあはせる。)

匡房。山門と三井寺の確執、今にはじめぬことながら、武家は弓矢を以てあらそひ、出家は法を

以て争ふが、今もむかしも變らぬ道理。萬が一にも頼豪阿闍梨、山門調伏の祈誓を凝らす

とあらば、御僧達も法力を以てなせその調伏を鎮められぬぞ。

五人。やあ。

匡房。法師が法を以て争ひがたく、弓矢を以て争ふは、たしかに法力の足らざる證據。お身たち

ばかりの恥辱でない、王城鎮護と世にほこる叡山延曆寺の恥辱でないか。

五人。やあ。

匡房。方々にはこれよりすぐに歸山して、匡房が斯う申したと傳へられい。

(立快等五人は再び顔のみあはせる。)

頼豪阿闍梨

立快。全秀。雲哲。立快。

む。ほかならぬ匡房の卿のお扱ひに免じて、今日はこのまゝ引取るといたさ。しからば一應歸山して、大衆ともかさねて評議の上、又あらためて御掛合にまゐるか。但しは調伏を鎮むるために、われも降魔の秘法を凝らすか。兎もかくもこれにてお暇申す。

(五人は匡房に會釋して、下の方へ行きかゝりしが、女快は全秀に何かさゝやく。全秀うなづきて、四人は向ふへ去る。女快一人は上のかたに去る。)

男達。良俊。花若。

今にはじめぬ山法師が亂暴狼藉。幸に事なく納まりしは、ひとへに匡房の卿のお扱ひ。かたじけなう存じまする。

(三人は禮をいふ。)

匡房。男達。三人。

この後もあること。たとひ山法師が押寄せて、かさねて理不盡を働かうとも、努めて禮便に濟まされい。心得申した。御めんくだされ。

式部。

(三人は會釋して門内に入る。)
日ごろから犬と猿の叡山と三井寺、幸ひに今日は事なく濟みましたが、よもこのまゝでは納まりますまい。

匡房。

(嘆息する。)
叡山と三井寺が多年の確執、いよく結んで解けざる時は、佛法の亂れ、王法のみだれ、果は天下の亂れとならうぞ。

(雨の音きこゆ。)

式部。

(空を見る。)
お、雨が降つてまゐりました。あれ、あれ、花見の群が小袖を濡らして戻りまするわ。(下の方を指す。)

匡房。

花の雨に小袖をぬらして歸るのは、都の人の風流であらうよ。その風流に我を忘れ世をわすれて、春を樂む人々は……。羨ましいなう。

(雨の音。匡房は扇をかざして立つ。花見の人々は濡れながら出て来り、思ひくりに急ぎゆく。)

おなじく三井寺の内。實相坊の持佛堂。二重屋體にて、前面には簾を垂れたり。庭の上のかたには櫻の大樹あり。そのそばに寛あり。下の方には低き垣を結びて枝折戸あり。おなじ日の夕刻。薄く雨の音。簾のなかに鐸の音きこゆ。

頼豪。(下のかたより佐次兵衛はぬき足して出て来り、庭口に忍び入りて鐸の音に耳をかたむける。)

頼豪。(簾の中にて。)

頼豪。誰ぢや。名乗れ、名乗れ。え、おのれ、まつすぐに名乗らぬと掴み殺すぞよ。

佐次兵衛。は、はい。
頼豪。え、誰ぢやと云ふに……。われ心願の仔細あつて三七日の祈誓を凝らす間、兒一人のほかはこゝへ近付くこと無用と、かねて申渡してあるに、おのれ何者、來りて修法の邪魔するぞ。(叱る。)

佐次兵衛。はい、はい、恐れ入りました。ござりまする。
(上のかたより月若は藁藁を入れたる間伽補をさけて出づ。)

月若。お、おやぢ様ではござらぬか。

頼豪。む、さては月若、そちの父か。

佐次兵衛。(恐る恐る)はい。その佐次兵衛でござりまする。

月若。わたくしが堅く止めて置きましたに、御修法の場所へうかくと……。なんとも申上様もない無調法、わたくしも共々におわび申上げますれば、なにとぞおゆるし下さりませ。

佐次兵衛。眞平御めん下さりませ。

頼豪。けふは満願の日といふに、由なき奴に邪魔されたわ。早く行け、ゆけ。

(頼豪は簾をおろして姿をかくす。月若はほつとして父のそばへ寄りて囁く。)

月若。さあ、御機嫌の直つたを幸ひに、この間に早う歸つてくだされ。うかくと長居したら、

またどのやうな御叱りを受けるかも知れぬ。さあ、早う、早う。

佐次兵衛。いや、歸るまい。おれ一人では歸るまい。月若、そなたも一緒に來やれ。

月若。え。

佐次兵衛。今の阿闍梨様の御様子では、いよゝおそろしい調伏にきはまつた。どのやうな仔細があらうとも、御出家の身で呪ひの調伏のと、考へてもぞつとする。おれは親代々の漁師渡世、

殺生の罪がおそろしさに、多くもない子供の一人をこのお寺へおねがひ申して、ゆくゆくはありがたい出家にする心で、その行末を喜んでゐたに、そのお師匠様が罪のふかい呪ひや調伏、そんなお人にわが子をたのんで置いたら、どのやうなおそろしい罪を作らうも知れぬ。佛たのんで地獄へ墮つるとはこの事ぢや。もうくこんなところには、そなたを一時も置かれぬ。さあ、来や。(月若の手を把りて引立てる。)

月若。

はて、そのやうな無理なことを……。

佐次兵衛。

なにが無理ぢや。阿闍梨様はお心柄で地獄へでも何でも墮ちられたがよい。可愛い我子にその道連れはさせられぬ。さあ、来や。え、一緒に来や。あれ、あの物すごい鐸の音……。遠い地獄の底から微かに響いてくるやうな。

月若。

お、あの鐸の音……。満願の時刻が迫つたせるか、いつもよりも凄まじくきこえるやうな。

頼豪。

(ふたりは思はず鐸の音に耳をかたむける。うすく雨の音。庭先または天井よりあまたの鼠あらはれ出で、縁より簾のうちに走り入る。ふたりはそれを見てぞつとする。)

(簾の中にて。)三井寺二百八十坊に巢を組む鼠の眷族、一度にあつまりて我が指圖をきけ。

佐次兵衛。

(小聲に。)おそろしいことぢや。(顔へながら地に坐す。)

(月若は猶も鐸の音に耳をかたむけてゐる。叡山の悪僧玄快、床の下より這ひ出で、太刀をぬきて縁へ駆け上らんとす。月若おどろきて駆け寄り、無言にて彼をひき戻さんとす。玄快はふり返す。佐次兵衛もわが子に加勢して玄快にくみ付く。玄快爆つて月若を蹴倒し、佐次兵衛を一刀に切り倒して縁に飛びあがり、簾をつかんで引き落す。堂のうちには壇を築きて、頼豪うしろ向きになりて祈りゐる。)

玄快。

山門調伏の悪僧頼豪、日吉権現のおん使として、相模坊の玄快が退治にまゐつた。覺悟せい。

(玄快は太刀をふりかざして切つて蒐らんとすれば、あまたの鼠あらはれて玄快の顔や手足に飛びつく。玄快は苦み悶えて縁より轉げ落つ。月若は起きあがりて父を介抱する。下の方より大江匡房は式部を連れて出づ。)

匡房。

それ。

頼豪阿闍梨

(式部を見かへりて手負を見とどけよといふ。式部は立寄りて佐次兵衛をかへ起し、その疵口をあらためて最早療治はとどかぬと云ふ。月若は泣き伏す。)

匡房。さりとは哀れな最期ぢや。兎も角もその亡骸をあれへ運んでおけ。

式部。はあ。

(式部は月若と共に佐次兵衛の死骸を昇きて下のかたへ運びゆく。)

匡房。阿闍梨、頼豪の御坊。

(頼豪答へす。)

匡房。(再び呼ぶ。頼豪阿闍梨。匡房まるつて候ぞ。)

頼豪。(うしろ向のまゝにて。修法の邪魔ぢや。立去られい。)

匡房。その御修法の御邪魔にまるつた。御免ください。

(匡房は縁にあがりて坐す。頼豪は珠数を手にして向き直る。)

頼豪。なんの仔細あつて匡房には、頼豪が修法の邪魔にまるられた。

匡房。その仔細は申すまでもござらぬ。先づ阿闍梨の御心に問はせたまへ。

頼豪。む。さては此の頼豪に調伏の祈りを止めいと云ふか。さりとは愚かのことよ。(冷笑ふ。)

頼豪。

頼豪阿闍梨

二〇五

匡房。

年ごろ日ごろ師弟のちぎり淺からぬ匡房、おん身にむかつて何をか包まう。頼豪が先づ觀山の惡僧ばらを呪ひ、あはせて都の公家ばらを傾けんとすること、琵琶の湖よりも深き仔細あり。一昨年の夏のはじめより秋の末に亘りて、都にはおそろしき疫病おこなはれ、その病に仆るもの幾萬人。つゞいて鴨川の水溢れ、洛中幾千の人家ことごとく魚の糞家となる。その砌り、都にはわれを召され、法の奇特に因つて、その禍を攘ひ申せ、恩賞はのぞみに任かすべしとある。頼豪うけたまはつて立歸り、晝夜肝膽をくだきて祈りし甲斐あつて、一月ならずして疫病おとろへ、洪水收り、萬民蘇生の思ひをなす。さてその恩賞として、三井寺に戒壇建立のことを願ひしところ、關白大臣左右の大將、いづれも觀山の威勢を恐れて、頼豪が一生一度の大願をたゞ一言に斥けられた。

その御無念いくへにもお察し申せど、疫病をしづめ、洪水を治むるも、所詮は天下の太平を祈るが爲にこそ。その恩賞として、もし三井寺に戒壇を許さば、觀山の衆徒憤りて公家に恨みをふくみ、あはせて三井寺にうらみを含むは必定。かくては天下の亂れをまねく基と、關白大臣評議の上、阿闍梨が望みを斥けられしも無理ならぬ儀かと存じられます。まだそればかりでない。頼豪が戒壇建立をねがひしを洩れ聞きて、去年の三月、觀山の惡

僧ばら徒黨を組んで、不意にこの三井寺に押寄せ、あらんかぎりの亂暴狼藉をはたらきし時、都にてはなんとせられた。唯そのまゝに捨置かれて、けふまで何の御咎めもないは、これぞ世にいふ片最眞、依怙の沙汰ではあるまいか。傍若無人の山法師がそれほどに怖ろしいか。所詮頼豪の大願成就せざるは、叡山といふ佛敵あればこそぢや。もう此上は柔和忍辱の法衣をぬいで、破邪顯正の法をおこなふより外はなしと、頼豪いよく一心をかため、先づ叡山の佛法をほろぼさんと、去んぬる朔日より三七日のあひだ、軍荼利夜不動明王をこゝに招じまつりて、怨敵調伏の秘法をおこなふ。けふは満願廿一日のゆふべぞ、見よ、見よ、頼豪の一念は鼠となつて、大小もろくの眷族をしたがへ、叡山の經權經文を片端より食ひやぶり、盡未來まで彼等が佛法をほろぼして呉れうぞ。さりとは浅ましきことを承はる。(涙をぬぐふ) 碩學高德の聖として世にも人にも敬まれ、雲の上までもきこえたる、頼豪阿闍梨ともあるべき御身が、瞋恚のほに身を焦され、世におそろしき呪詛調伏、還着於本人の教へを知られぬか。執着の一念鼠となつて、われから畜生道に墮つるとは、大俗凡夫にもあるまじき迷ひの上の迷ひにこそ。なにとぞ御心をひるがへされ、妄執の雲霧を晴させたまへ。匡房ひとへにお願い申す。

匡房。

(匡房は手をつきて泣く) 諫める。頼豪は頭をふる。

それほどの道理をわきまへぬ頼豪と思ふか。繫念五百生、一念無量劫と御佛も説かせられた。人間のおもひの火は幾萬年の後までも、燃えて、燃えて、もえ盡さぬものぢや。近きためしは菅原の道真卿、たぐひなき學者とも賢人とも世に讃へられながら、最期の一念は雷となつて、かたきを蹴殺さうとせられたわ。頼豪もその通り、修羅道、餓鬼道、畜生道、地獄の底まで落ちなば落ちよ、一旦かうと思ひ立つたからは、やはか仕途けいで置くべきか。頼豪は先づ鼠となつて叡山の佛法をほろぼし、更に藤原家の一門に崇りて、榮華に誇る彼等の一族もやがては武家の足下に踏みにじられ、あるか無きかの浅ましき姿となり下らせて見せうぞ。

(壇上の爐の火ややく衰ふ。頼豪屹と見かへる。)

頼豪。おゝ、爐の火が次第に衰へしは……。(向ふを睨む) さては頼豪の調伏を鎮むるために、叡山にても降魔の祈りをおこなふと覺ゆるぞ。叡山が勝つか、頼豪が勝つか。たがひに秘法の手を碎いて、祈りくらべをして見せうよ。月若、月若。(忙はしく呼ぶ。)

(庭口より月若走り出す。)

月若 召しましたか。

月若

けふの生贄とすべき泥龜はいづこにある。早う持て。

月若

苞のまゝにてその閑枷桶に入れて置きました。

月若

(月若は縁に上りて閑枷桶より泥龜の苞をとり出す。頼豪はあわたゞしくその苞を引きめくりて、

齧めく泥龜三匹をつかみ出し、爐の火に投げ入れる。白き火焰はうづ巻きてあがる。)

頼豪

生贄はまだ足らぬ。裏は……口繩は……。

月若

はあ。

月若

(月若は堂の隅より二つの壺をかゝへ出す。頼豪はひとつの壺より裏蛙をつかみ出して火に投げ込

む。今度は青き火焰たちのぼる。頼豪つゞいて他の壺より青き蛇をつかみ出して、おなじく火に投

込まんとす。)

匡房

くどくも申すやうなれど、あまりと申せば淺ましきおん有様……。いかに御心狂へばとて

畜生道はまだなこと、生きながら魔道に墮ちさせたまふか。おそろしいとも、悲しいとも

世に譬ふべきやうもござらぬ。しばらく、しばらく……。

(匡房立寄つて法衣の袖にとりつくを、頼豪は振放して持つたる蛇を爐になげ込む。青き火焰再び

あがる。)

匡房

かうと知らば一日も早くまり合せて、禍を未前に防がうものを……。さるにても、し

ばらく待たせたまへ。匡房すぐに都へ引返して、戒壇建立の議を今一度、關白大臣に訴へ

申さん、先づそれまでは、しばらく、しばらく……。それがし折入つておねがひ申す。

頼豪

え、今となつては遅い、おそい。たとひ釋迦阿彌陀がこゝにあらはれて、頼豪が行く手

をさへぎり給ふとも、三七日満願の今日となつて、この大願を思ひとゞまらうや。くどい、

くどい。退け、退け。但しは匡房も生公家ばらと同じやうに叡山の威勢に怖ぢ恐れ、頼豪

が修法の邪魔するか。

匡房

匡房が遮つておとゞめ申すは、叡山の威勢を恐るゝが爲ならず。おん身を最愛しう思へば

こそ。

頼豪

え、すされ、すされ。

(頼豪は珠數にて匡房を打つ。匡房は珠數に纏りて叫ぶ。)

匡房

年ごろ師の御坊と仰ぎし阿闍梨が、一生に一度の御折檻。それにて御心晴るゝならば、匡

房を當のかたきと思召して、肉の破るゝまで打たせたまへ、骨の碎くるまでも踏ませたま

頼豪阿闍梨

へ、些ともお恨みとは存じ申さぬ。その代りには今度の調伏を、なにとぞお止まりくださりませ。年ごろ讀誦したまひし千部萬部の經文も、魔道に手向けて何かせん。提婆は八萬藏を誦じながら遂に地獄に墮ちたる例を、よもお忘れはござるまい。

頼豪。え、まだ申すか。あくまでも我に逆らふ憎い奴。今をかぎりに師弟の縁を切るぞ。

匡房。え。

月若。その御立腹はさることながら、これが餘人ともあらばこそ。年ごろ師弟の親しみ厚き匡房の卿を御勘當とは、あまりにむごい御成敗。この儀は御勘辨下さるやうに、わたくし純つておねがひ申します。

頼豪。お、また火のいきほひが鈍うなつたわ。(蛇をつかんで爐になげ込む)え、頼豪が満願の日に、さまざまの悪魔外道がよせ來つて、障礙をなすこそ心得ね。いつまで云うても同じこと。匡房は歸れ。え、すぐにこゝを立去り居らう。

月若。歸る歸らぬは兎もかくも、師弟の縁を切ることは……。

頼豪。くだい、くだい。どれもこれも邪魔な奴。月若、おのれも出てゆけ。

月若。え。

頼豪。一人もこゝに置くことならぬ。行け、ゆけ。え、出て行かぬか。

匡房。これほどに御意見申しても……。

頼豪。え、行け、ゆけ。

月若。あの、わたくしまでも……。

頼豪。ならぬ。ならぬ。

(頼豪は縁より降りて、ふたりを庭の外へつき出して枝折戸をしめ、笥の水を飲まんとして上の方によるめき行く。)

月若。もし、お師匠様、お師匠様。

(月若は枝折戸を押して入らんとするを、匡房は制す。)

匡房。阿闍梨は深き執着につながれて、生きながら魔道に墮ちられた。あまりに悼はしうは思へども、われ、凡夫の力では、所詮救ふこと思ひも寄らぬ。

月若。さるにても、満願の際までは、決しておそばを離れぬ約束……。お師匠様、お願いひで……。

頼豪。阿闍梨。お師匠様……。お師匠様……。

(月若はなみだながらに枝折戸をたたく。暮六つの鐘きこゆ。)

匡房 およ、あの鐘は……。

月若 たしかに暮六つ。

頼豪 およ。(よろめきながら櫻の木にすがる。鐘の聲つゞけてきこゆ。頼豪は耳をすまして聞く。)

およ、今ぞ満願……。

(頼豪は打笑みながら縁にのぼらんとする時、櫻の木かげに倒れぬたる女快は、再び起き上りて頼豪に切つてかゝれば、あまたの鼠又もやあらはれ出で、女快に飛びつく。頼豪も鼠のやうなる凄じき形相となりて聞ひ、遂に玄快の腕をつかんで引き寄せ、その喉を咬みて殺す。雨の音はげしくきこゆ。)

頼豪 (鼠にむかひて。)われにつゞいて皆ゆけ。叡山へ、叡山へ……。頼豪が路しるべをする。一匹もはぐるよな。

(頼豪はそこにある經卷をことごとく引裂きて爐になげ込めば、烟一面に舞ひあがる。頼豪は生血の滴る口に最後の一卷をくはへて走りゆかんとして、庭先によろめき出づ。月若は枝折戸を押破りて轉び入り、頼豪にすがる。)

月若。

お師匠様。

(頼豪は突退けて行かんとするを、匡房も走り入りてさへぎる。雨の音。)

(III)

もとの三井寺門前。くらき夜。

(門内より頼豪は經卷をくはへて長く曳きながらよろめき出づ。あまたの鼠もむらがり出づ。頼豪は、一旦倒れてまた跳ね起き、二足三足走りしが、力つきてばつたり倒れる。あとより勇達は頭巾の上に笠をかぶりて足駄をはき、片手に長巻を持ち、片手に松明を持ち出で、倒れし頼豪をすかして見ておどろく。匡房と月若もつゞいて走り出づ。三人は顔みあはせて詞なく、勇達は松明の火をかざして頼豪の死顔を照せば、匡房と月若とはひざまづきて合掌す。雨の音にまじりて鉦の聲遠くきこゆ。)

幕

清
正
の
娘

大正六年十月作。

大正六年十一月、歌舞伎座初演。

初演當時の主なる役割——加藤忠廣（片岡市藏）光江（中村歌右衛門）照代（中村福助）庄林隼人（市川八百藏）井上大八郎（市川猿之助）斑鳩小平次（市村羽左衛門）安藤大學（市川左團次）など。

登場人物——加藤肥後守忠廣、忠廣の妹光江、照代。加藤の家老庄林隼人。加藤の家臣井上大八郎。中村九郎兵衛。斑鳩小平次。美濃部金藏。紀州の家臣安藤大學。加藤の家來。腰元。紀州の家來など。

(1)

肥後の國、熊本の城内、平舞臺には薄縁を敷きつめて、正面には上段の間を設け、左右には繪襖あり。
（元和六年十月下旬の夕刻。幕あくと、正面の奥より小姓ひとりば燭臺を持ち來りて、平舞臺の上下におく。）

小姓、
家來甲。

紀州のお使者にはまだ御歸城には相成りませぬか。
本妙寺御參詣相すみて唯今御歸城。

清正の娘

家來乙。

やがてこれへ見える筈でござる。

小姓。

さらばその趣を殿にも申上ぐるでござらう。

二人。

よろしくお願ひ申す。

(小姓は奥へ、家來二人は上のかたへ引返して去る。やがて下のかたの襖をあけて、紀州家の使者安藤大學、三十七八歳。加藤家の家老庄林隼人に案内されて出づ。隼人は五十餘歳の老人なり。あとより加藤家の家來六人附添ひて出づ。)

隼人。

安藤どのには先づあれへ。

大學。

御めん下され。

(大學は上段の間に通る。家來等はあとに下りて平舞臺の左右に居ならぶ。)

隼人。

城外の本妙寺まで御逗留中に度々の御参詣。主人肥後守は申すに及ばず、われ〜一同あつく御禮申上げます。

大學。

その御挨拶では痛み入る。武名は日本國中にかくれなき清正公、もし御在世に候はば、われ等はその鎧の草摺をも押頂くべき筈。このたびの下向を幸ひに、せめては御靈前に参拜つかまつるが、武士たる者の務でござる。ことに明日はいよく發足と決定したれば、お暇乞ひかた〜に参拜いたしてまゐつた。

隼人。

重々の御芳志、かたじけなう存じ申す。

(奥の襖をあけて、加藤肥後守忠廣、三十歳位。小姓ふたりを連れて出づ。)

忠廣。

大學には今日も本妙寺へまるつて、父上靈前に御参拜下されしとやら、忠廣もお禮申すぞ。今あらためて申すまでもなけれど、紀州殿と妹光江と縁組のこと相整ひ、その迎ひの使者としてお手前わざ〜下向のところ、當方の支度萬端もと〜こほりなく片附きたれば、いよく明日發足と相成つた。なにぶんにも不束の妹、萬事よろしくおたのみ申すぞ。

大學。

勿體なくも大御所様おん媒酌にて、清正公御在世の砌りよりかねて許嫁のおん仲、御息女十八歳、主人頼宣十九歳の當年を以て、めでたく御興入りと定まりしは、加藤紀伊兩家の吉事、そのお迎ひの使者として選み出だされしはそれがしの面目、道中の警固油斷なく仕つれば、は〜かりながら御安心ください。

隼人。

肥後の侍は、そろひも揃ひし無骨者ばかりで、御逗留中はなんの風情もなく、失禮に失禮をかさねし段々、平に御容赦くださいされて、御主君の御前よろしく御取りなしをお願ひ申す。委細心得申した。ついでには御當家より主人頼宣へ婿引出として長烏帽子のおん兜を贈りつ

大學。

清正の娘

かはさるゝ趣、これは申すまでもなく清正公のおん形見、その御武勇にあやかたしと主人もかねく懇望の品でござれば、それがし守護して持ち歸らば、その満足はいかばかりか、今より思ひやられまする。明日いよく發足と定まりし上は、一應は念のため、それがしに内見をお許しくださるまいか。

忠廣。使者として道理の口上、内見をゆるすに仔細はない。隼人、長鳥帽子のおん兜をこれへ運ばせい。

隼人。はあ。彼のおん兜は當家の寶物として、奥庭の社に納めてござれば、唯今取り出させて御覽に入れ申す。大學どの、しばらくお待ち下され。(起ちかゝる。)

大學。はなはだ勝手がましいおねだりでござれども、其のおついでに清正公が片鎌のおん槍を併せて拜見は願へまいか。

忠廣。おゝ、槍は忠廣が居間に飾つてある。予が直々に持つて来てみせう。
(忠廣は衝と起つて奥に入る。その軽々しき振舞に、隼人と大學は顔を見あはせる。)

大學。(取りなし顔に。)二代の肥後守も父上に似させられて、諸事無雜作でお氣輕のことぢや。それが加藤家の御家風でござらう。

隼人。加藤家の家風……。 (苦笑ひする。) いかにも二代目の御家風でござるよ。御めん下され。
(隼人は下の方の襖をあけて去る。)

大學。(家來にむかひて。) あの家來どのはお幾歳でござるな。
五十七歳とかうけたまはりました。

大學。おゝ、五十七歳……。 お健かなことぢやな。さすがは先殿のおん供して、朝鮮大明の大軍を蹴散したる古兵者でござるよなう。

(上の方の襖をあけて、忠廣の妹光江、十八歳。妹照代、十六歳。打連れて出づ。家來どもは頭を下げる。)

大學。おゝ、姫上。これへお越しでござるか。(席を起たうとする。)

光江。いや、紀州のお使、そのまゝ上座に……。
唯今清正公のおん兜内見をおねがひ申し、あはせて片鎌のおん槍拜見をおねだり申せし處。かたぐ上座は恐れあり。姫上達にはまづこれへ。

(大學は上段の間を降り、光江姉妹と入れ違ひて平舞臺の上のかたに坐る。光江と照代とは上段の間に通り、下の方に坐る。)

光江。大學には迎ひの役目大儀でござつた。わらはが興入の出發もいよく明日と決りしからは、道中の世話を頼みまするぞ。

大學。はあ。

照代。いまだお目にはかゝらねど、紀州殿へも宜しく御つたへ下され。

大學。はあ。大學たしかに承はりました。

(忠廣は奥より片鎌の槍を持ち出て出づ。)

忠廣。大學、加藤の家に傳はる片鎌の槍と申すはこれぢや。苦しうない、手に取つて見やれ。ありがたい仕合せ。然らば御免ください。

(大學は槍を押しいたゞきて見る。)

大學。なにさま名譽の御槍。これを鍛へし作人は平安城長吉とか承はりましたが……。

忠廣。さうぢや、その長吉ぢや。忠廣も一度はその槍を把つて、父清正に劣らぬ功名をあらはし

たいと念じて居るが、かやうに天下泰平と相成つては、それも無用の物となつてしまつた。無用の物と御意あれど、ぬかぬ太刀の功名と申す譬もござる。たとひ戰場のお役に立つ時節がござらすとも、これは加藤のお家の飾り、ゆめく御疎略に遊ばすな。ありがたく拜

見つかまつりました。

(大學はつゝしんで槍を戻せば、忠廣は小姓を見かへりて、その槍を立て、おけと頭で知らすれば、

小姓は槍を把りて床のまへに立てかける。)

忠廣。兜はまだ持参せぬか。遅いことぢや。奥庭の社に祭り籠めて、大切に守護してあれば、取出してまるるにも暇がかゝりませう。

光江。しばらくお待ちなされませ。

(下の方より庄林、隼人は先に立ち、井上大八郎は銀の長烏帽子の兜をさゝげて出づ。)

隼人。おん兜持参。仕つてござりまする。それ、大八郎。お使者の前へ……。

大八郎。はあ。(大學の前に兜を直して。)おん兜。御覽下さりませう。

大學。はあ。(兜の前に一禮して、近寄つて見る。)かやうに間近く拜見するは今が初めて。眼のあたり

大八郎。仰せの通り、これほどの兜をかぶる者は、日本中に二人とあらう筈がござらぬ。身のほい

を知らぬへろく武者が、かやうな重い兜を頭にのせたら、眼が眩うて動かれますまい。(當付らしく云ふ。)

隼人。

大八郎、控へい。紀州家のお使者の手前、いらぬことは申さぬものぢや。

大八郎。

(溢々ながら)はあ。もはや拜見は相済みましたかな。(催促するやうに云ふ)

大學。

たしかに拜見つかまつりました。なにを申すも大切の御品、明朝までは元の御社に納めて、嚴重に御守護ください。

大八郎。

その御指圖にはおよび申さぬ。加藤の一家中には、このおん兜を疎略に存するもの一人もござらぬ。

(大八郎は主人の前に一禮し、兜をさへげて下のかたに去る。)

隼人。

(氣の毒さうに)くどくも申す通り、肥後の侍は揃ひも揃ひし無骨者、かならずお氣にさへて下さるな。

大學。

これも物に依はぬ御家風、却つて頼もしう存じまする。

光江。

お使者がお立振舞の用意もすでに整うてる筈。兜の御内見相済みたる上は、隼人はあ。

光江。

お使者を奥へ御案内申せ。

隼人。

心得ました。しからば安藤どの。

大學。

毎度御雜作に相成りまする。

忠廣。

今宵がわかれぢや。ゆるくと杯をかさねい。忠廣もあとから相手にまゐるぞ。(家來どもに)みなも行け。

家來。

はあ。

隼人。

いざ、かうまゐられい。

(隼人は先に立ちて、大學を案内してゆく。家來等も附添ひてゆく。)

忠廣。

大學もなか／＼に酒量の強い奴ぢや。予でなうては相手になるものもあるまい。殊に今宵は立振舞とあれば、かれにも十分に飲ませ、予もこゝろよく酔はう。はゝゝゝ。(起ちかゝる。)

光江。

兄上。しばらくお待ち下さりませ。

忠廣。

なんぢや。(坐る。)

光江。

これから御酒宴が始まりましたは、定めて夜も更けることでござりませう。御酒を深く召上らぬうちに、すこしく申上げたい儀がござりまする。

忠廣。

忠廣が酔はぬうちに云ひたいことゝは……。なにか知らぬが遠慮なく申せ。

清正の娘

照代。 光江。

では、わたくしは……。

いや、そなたは血をかけた姉妹、遠慮にはおよばぬ。こゝにゐて一緒に聞いてくりやれ。さて、兄上。父上御在世の砌より紀州家と縁談の約束と、のひ、いよくこのたび興入れと相成りまして、紀州の迎ひ安藤大學に連れられ、明朝辰の刻を以て出發いたす筈、長の年月すみ馴れたる熊本城をはなれ、父上の御墓に遠ざかり、兄上に別れ、妹にわかれ、見も知らぬ紀の路の空へ遠く送られてまゐること、なんほう悲しうはござりますれど、これも女子の習、是非がござりませぬ。つきましては父上がおん形見の二品のうちより、長烏帽子のおん兜はわたくしが頂戴いたしてまゐります。

忠廣。

長烏帽子のおん兜を紀州家へ渡すについて、家來どもの中には兎かう申す者もあるとか聞いてゐるが、これは父上御在世の時から約束ぢや。今更變換へもならぬと存じて、婿引出として紀州家へ送りつかはすことに致した。

光江。

長烏帽子のおん兜と片鎌のおん槍とは、父上清正公が常におん身を放させたまはず、大小數十度の戦場に比類なき武功をあらはして、敵味方千萬人の眼をおどろかし、日本中はいふも愚、朝鮮大明の異國にまで轟き渡りたる名譽の品々、申さば日本國の寶でござります

る。唯今その品々を二つにわけて、兄上は片鎌のおん槍、又わたくしは長烏帽子のおん兜を守護すること、なみくの心配ひではござりませぬ。この槍とこの兜とに疵がつかば、加藤の家の瑕瑾ばかりでなく、わが日本國の武名をも傷くる道理、差出た御意見ではござりませぬ、わらはがお傍を去りました後も、かならず必ず御油断なく、片鎌の槍を父上の魂とも、日本武士のたましひとも思召して、加藤の家名を墮さぬやう返すくもおねがひ申します。

忠廣。

お、判つた、判つた。忠廣はそれほどのうつけ者でない。片鎌の槍は大切に守護して、

照代。

あつばれ二代の加藤よと世にも人にも褒めさせて見せうわ。姉上のお心配ひはさらく御無理ではござりませぬが、兄上も武勇は人にすぐれ給ひ、流石は加藤の子ほどあると、世上でも噂して居るとやら。

光江。

その武勇に誇るばかりでは、あつばれの名將とは申されませぬ。近い例が甲州の武田勝頼、武勇は父信玄に劣らぬとは申しながら、一國の主たるべき器量なければ、遂に滅亡の禍をまねく。

忠廣。

(すこしく氣色を變へる。) こりや、光、兄に對して詞が過ぐるぞ。唯今も申す通り、忠廣は

清正の娘

加藤の家名をおとすほどの不覺者でない。萬が一にも運つたなうして、加藤の家のかたむく時には、片鎌の槍は父上の御恥辱とならぬやう……（扇にて幾たびか打つ眞似をして見せる。）かやうに打ち折つて、かならず人手には渡すまい。いらぬ心配無用にいたせ。

その槍を折る時節のないやうに……。

え、そちも日蓮宗の坊主共にかぶれたか。いつまでもくどくどと説法いたすな。

（忠廣は衝と起ちて奥に入る。光江はあとを見送りて嘆息す。）

照代。

姉上様。

（光江は答へず。照代は差寄つてその袂をひく。）

照代。

もし、姉上様。（光江は振向く。）まだ御出發の御用意もござりませう。奥へまるつて御支度を……。

光江。

先づその前に奥庭のお社に一度參拜して、父上御尊靈においとま乞ひ、乳母や腰元どもが尋ねたら、わらはは庭にゐると傳へたもれ。

照代。

かしこまりました。併し暗い夜でござりますれば、腰元どもに燈火の用意を……。

光江。

勝手の知れたる庭の内ぢや。あかしを照らすには及びませぬ。

（光江は起ち上る。）

(11)

同じく熊本城内の奥庭。すこしく上の方によせて清正の社あり。社には低き石段あり。左右には銀杏その他の立木あり。暗き夜。木兎の聲きこゆ。

（斑鳩小平次、二十五六歳の武士、覆面して忍び出で、社の扉をあけて忍び入る。下の方の木立のあひだより庄林隼人忍び出で、これも社の内をうかゞふ時、小平次は銀の長烏帽子の兜を小脇にかかへて出づ。隼人は透して見て、無言にて彼を捕へんとす。小平次も無言にて突きのけて行かんとし、くらがりにて互に争ひ、隼人は先づ兜をうばひ返して小脇にかへ、片手にて小平次を引き据ゑんとす。小平次は又その兜を奪ひ返してゆかんとするを、隼人は又ひき戻し、兜を石段の上にな置き、兩手にて小平次と揉み合ひて、遂に小平次を組み伏せ、その覆面をかなぐり捨てる。）

隼人。

（透し視て。）おのれ何者ぢや、名乗れ、名乗れ。

（小平次は黙して答へず。）

清正の娘

隼人。(急いで)え、名乗らぬとてそのまゝに濟まさうか。おのれ、家中の若侍に相違あるまい。隼人を相手にこれほどの働きをする奴は……。(かんがへる)斑鳩小平次か、井上大八郎か、中村九郎兵衛、美濃部金藏、いづれ其内の一人であらうが……。どうぢや、まつすぐに名乗らぬか。

(小平次はやはり黙してゐる。)

隼人。まだ云はぬか。おのれ、よく／＼剛情な奴。この上は引立てまるつて詮議をいたす。まるれ。

光江。(隼人は下緒を解きて小平次を引つく／＼り、引起して連れゆかんとする時、上のかたより光江出づ)そこに居るは隼人か。

隼人。はあ。

光江。しばらく待ちや。くらがりにて面はみえねど、その曲者は社のうちへ忍び入つて、長烏帽子のおん兜を奪ひ取らうと致したのぢやな。

隼人。おん兜を紀州家へ渡すについて、家中の若侍ども兎かくに故障を申立て、朝鮮大明まできこえ渡りたる加藤家の寶を、むざ／＼他家へ渡しやるは、お家の恥辱とか、肥後侍の面

にかゝはるとか、さま／＼の理窟を捏ねて、なにか穩かならぬ噂も洩れ聞えますれば、紀州家のお使者も明日いよく出發といふ今夜に迫りて、萬一のあやまちあつては大事と、竊かに見廻りにまわりしところ、案に違はぬこの始末。

光江。して、おん兜は如何しました。たしかに奪ひ返してござりまする。

(隼人は下緒の端を立木につなぎ、探りながらに石段の上の兜を取りて、光江のそばに置く。)

光江。それは重疊もとの通りに唐櫃にをさめて置きやれ。

隼人。はあ。

(隼人は兜をかゝへて社の内に入る。)

光江。異國までもきこえたる清正公のおん兜を、他家へわたすは家の恥辱、肥後侍の意地が立たぬと、若氣の一途に思ひつめ、夜にまぎれてこのお社に忍び入り、おん兜をぬすみ出して立退く所存は、一應無理ならぬことなれど、父上御在世の砌りより約束已に定まりしものを、今更紛失せしと申して、加藤の家の義理が立たうか。紀州の使者がおめ／＼承知して歸らうか。さりとは餘りに淺薄なことぢや。

小平次。

ではござれども……。

(云ひかけるを光江は遮る。)

光江。

いや、なんにも申すな。こゝはこの通りの暗がりぢや。聲さへ立てねば誰やらわからぬ。清正公のお社へ忍び入つて、寶物のおん兜を奪ひ出さうとした曲者。もしその本人が知れたらば、云ふまでもない縛り首ぢやぞ。

小平次。

む。

光江。

命を捨つるは覺悟であらうが、加藤の家來が盗みをはたらき、縛り首を打たれしと、世の口の端にかゝる時は、その身の恥辱、家の恥辱。何者の子か知らねども、あたら若者を犬死させて、なんで妾も嬉しからうぞ。今宵の間を幸ひに、顔も見するな、聲も立つるな。唯このまゝに黙つて歸りや。

(社の内より隼人出づ。)

隼人。

唯今あれにて承はれば、世にありがたき姫君のおん情。おのれは家中の何者か、もう大方は知れてあれど、姫君のお詞に免じて、唯そのまゝに赦してやる。心のうちにてお禮を申して、早くこゝを立去り居らうぞ。

(隼人は探り寄りて小平次のいましめを解く。小平次は黙して手をつきあたるが、やがて小刀をぬきて我が腹に突き立てんとす。その光をみて隼人はあわて、押さへる。)

隼人。

え、おのれ、顔もあらためず、名も問はず、唯そのまゝに赦されたを有難いとも思はずに、なにが不足で何の切腹。御恩を仇とはおのれがことぢやぞ。

光江。

まことに隼人が申す通り、なにが不足で命を捨つるぞ。かぶとを他家に渡すのをそちは飽までも不得心で、わらはへ面當の切腹か。

小平次。

や。

光江。

さりとはよく／＼思ひ詰めた。(ほろりとする。) 肥後侍の意地とはいへ、主家を大事に思はずば、それほど覺悟はならぬ筈。人のなさけを仇にして、却つて妾を恨むとは、憎いやうでも又可愛い。今までは妾ひとりの胸に秘めて、誰にも云ふまいと思つてゐたれど、命にかけてもおん兜を、他家へ渡すまいと思ひつめた、その心根がいぢらしさに、誰やら知らねど云うて聞かす。隼人も一緒に聞いてくりやれ。

(光江は石段に腰をかける。隼人も小平次もうつむきて聞く。)

光江。

過ぎし慶長十六年に父上御他界の後は、肥後の國五十四萬石を嫡子の兄上に相違なくゆづ

り渡され、徳川家一門の列に加へられて、家の榮えは昔にかはらねど、大阪すでに没落して、世は徳川家の天下となつたる曉に、豊臣家と由縁のふかき加藤の家は無事であらうか。よい手本は藝州の福島殿、瑣細のことを云ひ立て、四十九萬石の家を取潰された。さあ、その次は誰の番……。それを思へば油断はならぬ。はかりながら兄上にはそこにお心が付かせたまはず、加藤の家は萬代不易と心を許して居らるゝ御様子。おほつかなくは思へども、わらはは甲斐なき女子の身、いかに燥つても狂うても家をさへる柱にはならぬ。ましてこの城に住むも今夜かぎり、あしたは他國へゆかねばならぬ。その立際にこのやうな不吉を申すではなけれども、加藤の家も五年か十年、所詮長うは保つまい。

二人。

光江。

隼人。

それを知りつゝ妾ひとり、家を見すて、行く悲しさを、ふたりともに推量しや。仰せの通り、去年福島家が断絶の砌り、それがしも胸を冷し申した。加藤福島の兩家は大阪にゆかりの深き家柄、けふは人の身、あすは我が身、思へば危いことごとさる。(嘆息する。)

光江。

その行末を思ふにつけ、加藤の家に萬一のことある時、父上が形見の二品は誰が守護して

くるゝやら。せめてその一品は人手に渡さず、妾がいつまでも守護する心で、彼の長烏帽子のおん兜は、わが身と共に紀州まで持つてゆく。女子は夫につくが世の習。一旦他家へ嫁入りすれば、あとに心は残さぬ筈なれど、そこが未練で忘れぬ。風にゆらめく燈火よりも危い加藤の運命を、あとに見捨てゝ出るからは、亡き父上のたましひを半分かゝへて行きたさに、兜はわらはが頂戴する、他家へ渡すと思ふなよ。肥後侍の意地を捨て、わらはに孝行させてたもれ。

(光江は涙をぬぐふ。隼人も小平次も思はず落涙す。)

隼人。

だん／＼のおん詞、うけたまはつて此の隼人も、覺えず涙にくれ申した。(小平次に。)やい、おのれ。唯今の御述懐をなんと聞いたぞ。御當家の家來に斑鳩平次と申す勇士があつて、隼人と丁度同年であつたが、三年以前にこの世を去つた。

(小平次は顔をあげる。)

隼人。

その平次が世にあつたら、まさかの時には相談相手にもならうものを……。姫君が御賢察の通り、所詮長うは繫がれぬ加藤がお家の行末。それをおもへば七年以前に世を去つた飯田覺兵衛や、彼の平次めが羨ましい。若侍の無分別、我命さへ捨て、かゝれば、何事も

清正の娘

無事にすむと思ふな。家來の罪は主の罪、かへすくも心して、お家の壽命を縮むるな。

(小平次はおそれ入つて平伏す。)

二人ともによう聞いてたもつた。妾はこれよりお社に参拜してまゐる間、そこ達は勝手に行きやれ。

準人。

はあ。

(光江は起ち上がらうとする時、上の方の木立のあひだより安藤大學出づ。)

光江。

(すかし視る。誰やらこゝへ……)

大學。

お騒ぎあるな。安藤大學でござる。

準人。

なに。大學どのが……。(驚く。)

大學。

立振舞の御酒をたべ過して、すこしく酔を醒まさんと、お庭さきを徘徊してゐる中に、闇に迷うてついうか〜と奥庭まで……。失禮御免くださりませ。(わざと酒に酔ひたる體にて云ふ。)

光江。

生憎にこの暗がり。準人。もとの座敷へ御案内申せ。

(皆々思ひ〜に氣味合の思入。藁を引付けると風の音にてつなぎ、道具の出來次第に引返す。)

END

筑後の國、矢部河原。正面には低き堤ありて、堤のうへには紅葉せる榎を栽みつられてあり。上下にもおなじく榎の立木あり。堤のうしろには河原遠くみゆ。

(前幕のあくる日の夕刻。堤の上より井上大八郎、美濃部金藏、中村九郎兵衛の三人は笠をかぶり、あとより覆面したる若侍大勢出づ。)

大八郎。

紀州の行列はまだ見えぬかな。(あとを見返る。)

金藏。

われ〜より半响ほどおくれたの出城、もう肥後境を越えた筈ぢやが……。

九郎兵衛。

見送りの人々と暇をひやら何やかやで、おのづと暇取ることであらうよ。

大八郎。

いかに婚引出とは申しながら、餘の品ならば兎もかくも、お家の重寶長鳥帽子のおん兜をむざ〜紀州家へ渡し遣るは、われ〜堪忍のならぬこと。かねて申しあはせたる通り、紀州の行列が國境を越ゆるを待ち受けて、奪ひ返すよりはかはござらぬ。

金藏。

勿論のことぢや。たとひ徳川家の一門とはいへ、あの紀州家の小倅めが清正公のおん兜を

清正の娘

所望などは、あまりに身のほどを知らぬ奴。

九郎兵衛。

たとひ殿様が御承知なされても、家來一同が不承知ぢや。肥後侍の面に泥をぬられて、唯
おめく控へてゐられうか。

大八郎。

安藤大學は紀州でもきこえし奴、油断して不覺を取らるゝな。先づそれまでは木かけに忍
んで、かれのまるるを相待ち申さう。

一同。

心得申した。

(大八郎は先に立ちて、一同は上下の櫛の木かけにかくれる。堤の上より紀州家の行列は槍を先に
立て、安藤大學は旅装束、長烏帽子の兜を入れたる唐櫃を家來ふたりに昇かせ、つゞいて光江をの
せたる乗物出づ。乗物のあとには腰元一人が薙刀を持ちてつゞく。又その後には紀州の家來大勢出
づ。舞臺のまん中に乗物を立てさせれば、少しくおくれ照代も道中妾にて、家來二人、腰元ふたり
を引連れて出づ。)

光江。

(乗物の戸をあけさせる。照代どの。)

照代。

はい。(乗物のそばへ来る。)

光江。

肥後の國境を打越して、もう一里あまりも参つたかと思はれますれば、いつまでもお見送

照代。

りは無用。最早これにて別れませうぞ。

光江。

おなごり惜しう存じまする。

照代。

それはいつまで云うても盡きぬこと。やがて日も暮るゝであらうに、もうよいほどにして
お歸りなされ。

光江。

年ごろ可愛がつてくださった姉上様に、かうしてお別れ申したら、いつ又お目にかゝれる

光江。

やら。(涙をぬぐふ。)

それは妾も同じこと。一緒に連れて行きたけれど、さうもならぬが世の掟。これから後は
兄上を杖とも柱ともお頼り申して、行末めでたく暮してたも。と云うてこの姉は、決して
そなたを忘れはせぬ、この末いかなる大事出来するとも、かならず嘆くな慌つるな。家の
不祥を願うでなければ、あすをも知れぬは人の身の上。おそろしい事、辛いこと、悲しい
ことが重なつて、身の置所にも迷うた時は、かならず妾をたづねて来や。百里二百里を隔
てゝも、姉は紀州にあると思ひ、こゝろを強う持つてゐやれ。(しみじみ云ひ聞かせる。)

照代。

ありがたい御教訓、身にしてみても覺えてをります。これから紀州までは遠い道中、どうぞ
おん身を御大切に……。紀州のお使にも姉上の御介抱、くれぐれもお願ひ申しまする。

清正の娘

大學。

仰せなくともそれがしの役目、光姫どのと引出物のおん兜とは、命にかへても守護してまゐる。かならずお案じ遊ばすな。

照代。

では、もうこれでお暇を……。

光江。

そなたも氣をつけて戻るがよいぞ。

(照代は名残惜げに會釋して行かうとする時、堤の上より斑鳩小平次、身輕にいであちて走り出づ。)

小平次。

おゝ、方々にはこれにお越しでござりましたか。

大學。

(進み出づ。)お身は何者、なにしにこれへまゐられた。

小平次。

加藤の家來斑鳩小平次、紀州家行列のおあとを慕うてまゐつた。

大學。

(油断せず。)して、加藤の御家來がわれ／＼に何の御用。

小平次。

その仔細は……。(少しく躊躇する。)

大學。

その仔細はあらためて承はるに及ばぬ。長烏帽子の兜を請取りにまゐられたか。

小平次。

實はその儀に就きまして……。

大學。

加藤の家中の若侍が、兜を渡すに故障をとなへ、隙もあらば奪ひ返さんと巧むこと、この大學もよく存じて罷りある。紀州表出發の砌りより斯る事もやあらんかとは豫ての覺悟。

欠

欠

照代。
大學。

御機嫌よろしう。
おわかれ申すぞ。

(小平次と照代とは無言にて大學に會釋する。時の鐘つゞいてきこゆ。大學は先に立ち、光江は徒歩にて、腰元家來ども附添ひ、花道へゆきかゝる。上のかたの木かげより大八郎つかくしと出るを、光代は見かへりて薙刀を持直すに、大八郎思はずあとへ退る。照代は下の方へゆかうとするを、小平次は隔てる。水の音。光江、大學等の一行はしづかに向うへあゆみ去る。)

—幕—

戦
の
後

大正八年十一月作。

大正九年一月、帝國劇場初演。

初演當時の主なる役割——黒田源左衛門（松本幸四郎）黒田源八郎（澤村宗十郎）
山崎番作（澤村長十郎）行光（尾上梅幸）覺善（守田勘彌）おそよ（澤村宗之助）
市兵衛（松助）など。

登場人物——黒田源左衛門。黒田源八郎。山崎番作。狂へる公卿行光。僧覺善。烏帽子
折おそよ。おなじく長六、勘八。茶道具屋市兵衛。下男七藏。盲目の老人、その孫娘町
人與次郎、佐助、五郎藏。ほかに飢ゑたる男、女、小兒など。

上の巻

(一)

舞臺はうす明るく、正面は黒幕、左右もすべて黒幕にて掩はる。陣鉦太鼓の音すさまじく、
（上のかたと下の方より武者大勢あらはれ出づ。鎧をつけたる武士あり、雜兵あり。長巻を持ちた
るあり、槍を持ちたるあり、太刀を持ちたるあり。敵と味方とが入り亂れて闘ひながら出て來り、
舞臺の上にもごつちやになりて闘ふ。陣鉦太鼓の音は絶えずきこゆ。この混戦ひとしきりあつて、

戦の 後

敵も味方もおもひくりに闘ひながら、再び上下にみだれ入る。
 黒田源八郎、廿歳ぐらゐの若武者、大わらはの鎧姿にて太刀をぬき持ち、三四人の敵とたゝかひながら出て来り、しばらく奮闘して敵を左右に追ひちらし、自分も右の足に傷つきて倒れる。上のかたより源八郎の兄源左衛門、四十餘歳の武者、鎧兜にて槍をかひ込みて出て、倒れたる弟を見つけて走り寄り、源八郎を扶けおこす。源八郎は起たんとして又倒れる。源左衛門は鎧の上帯をときて弟の傷をまき、自分の槍を杖にして弟を肩に引つけ、上の方へ運びゆく。陣鉦太鼓の音はげしく、舞臺は眞暗になる。

(11)

舞臺再び明るくなれば、上のかたに少し寄せて、古びて類かゝりたる鐘撞堂あり。堂にのぼるべき石段ありて、石垣もところ／＼焼けくづれたり。堂の下、舞臺のまん中に梅の立木ありて、花は白く咲きみだれたり。正面は京の町家の悼ましく焼類れたるが續いてみえ、左右にも類れたる家の壁などみゆ。舞臺の上にも焼けたる柱や壁や瓦や石などが一面に散亂して、殆ど足の踏みどころもなき亂雑のありさまなり。應仁の亂の終りたる年、十二月下旬の午後。空は陰りて雪を能せり。

(飢ゑたる男女、小兒など五六人、下の方がより出て来りて向うをみる。)

男一。 やあ、来た、来た。
 女一。 あれは京でも指折りの茶道具屋ぢや。
 男二。 この頃はよほど工面がよいと聞いてゐる。
 男一。 押取りまいて、貰へ、貰へ。
 大勢。 貰へ、貰へ。(口々に叫ぶ。)

(向うより茶道具屋市兵衛、五十餘歳。下男七藏に茶の湯の道具を持たせて出づ。あとより飢ゑたる男女や小兒の群がぞろ／＼と追つて出づ。なかには盲目の老人にて、孫の小娘に手を曳かれたるあり。)

七藏。 はて、うるさい。退け、退け。
 男甲。 いや、退きませぬ。一日に二度の粥すらも満足には啜られぬ身の上でござります。
 女甲。 どうぞ不便のものぢやと思召して、たとひ十文でも二十文でも……。
 大勢。 お恵みください。
 市兵衛。 え、執拗い奴等ぢや。あんなものに構うてはゐられぬ。七藏、来い、来い。

(市兵衛は先にたち、七藏もつゞいて舞臺に來たれば、先刻より待設けたる大勢が上の方にまはりてその行手を塞ぐ。)

男一。

旦那様、きのふも今日もひもじい腹を抱へてゐる者でござります。

女一。

どうぞお慈悲にいかほどもお恵みなされて下さりませ。

男二。

お慈悲でござる。

大勢。

おなさけでござります。

市兵衛。

え、前から後からも煩さい奴。この町にもかしこの辻にも、ぞろくと繋がつてあるく貧乏人どもに、一々施しをしてゐたら、おれの身代を逆さに振つてもまだ足るまい。さあ、邪魔をせずに、通せ、通せ。

七藏。

さあ、さあ、退いた、退いた。

(前後の大勢が口々に叫ぶ。)

大勢。

旦那様、旦那様、お慈悲でござります。

市兵衛。

(持餘す)はて、幾度云うてもおなじことぢや。おれは急ぎの用がある。もう堪忍して通してくれ。

老人。

(盲目の老人はさぐり寄り寄りて、市兵衛の袂にすがる。)

堪忍を願ふのはこちらのこと。どうぞ御堪忍あそばして、思召次第のお恵みを……。御覽の逆りの不具者、ひとりの棒はながれ矢に命を取られ、あとに生き残つた祖父と孫とが路頭に迷うてをります。

(市兵衛は顔をしかめて無言にて突きはなせば、老人は倒れる。娘は泣く。これを見て大勢はまた叫ぶ。)

男一。

や、不具の年寄をあやうなむごい目に逢はせた。

男甲。

なんで無慈悲なことをさつしやる。

大勢。

こりや料簡がなるまいぞ。

(大勢わやくと詰めよるを、七藏は支へる。)

七藏。

まあ、待て、待て。こりや飛んでもない云ひがかりぢや。(市兵衛に)もし、旦那様。(早く幾らかやれと眼でしらせる。)

市兵衛。

(誰々ながらうなづく)この頃はうかくと表もあるかれぬ。表へ出ればすぐにこれぢや。(市兵衛は財布を取出して小銭をかぞへてゐる。上の方より狂へる公卿行光、三十歳位、やつれ果

てたる姿にてふらりと迷ひ出で、矢庭に市兵衛の腕をつかむ。

市兵衛。(おどろく。)え、誰ぢや。お、お前さまは……。

行光。行光を忘れはせまい。さあ、連れてゆきや。案内してたもれ。

市兵衛。して、どこへ……。

行光。わしも今までは精一ばい堪へてゐるたが、住む家は焼かれる、食ふ糧はない。花の都とは名

ばかりで、こんな憂い辛い、苦しいおそろしい、地獄のやうな所にはもう一日も辛抱はな

らぬ。わしはこれから都を落ちて、中國へゆく。西國へゆく。唐天竺へもゆく。さあ、市

兵衛。案内しやれ。

市兵衛。え、途方もないことを……。なんでわたくしにそんな御案内が……。

行光。ならぬか。ならぬか。どうでも忌か。(市兵衛の胸ぐらを捉る。)

(七藏も大勢もあきれて眺めてゐる。)

市兵衛。お前様。それは御無體でござりまする。その御案内はどうぞ餘人に仰せ付けられてくださ

りませ。これ、七藏。どうかしてくれ、どうかしてくれ。

(七藏は進み寄りて、やうくに行光をひき分ける。)

七藏。

もし、殿様。わたくしの主人は唯今いそぎの用を抱へてをりますれば、今日のところは何うぞ御勘辨くださりませ。いづれ改めて御屋敷へまかり出まして、なんなりとも御川をうけたまはるでござりませう。

行光。いや、そりや嘘ぢや。わしをだますのぢや。市兵衛が行かすば、そちが代りに案内せい。

(七藏の腕をつかむ。)

市兵衛。(小聲に。)氣ちがひぢや。氣ちがひぢや。そのつもりで相手になれ。

七藏。はい、はい。(行光に。)そりやもう中國でも西國でも、唐天竺の果までもお供いたすでござ

りませうが、くどくも申す通り、なにぶんにも唯今は急ぎの用をかへて居りますれば……

(市兵衛は突き放してしまへと眼で知らせる。七藏うなづく。)

七藏。今日のところは……。眞平御めんくださりませ。

(矢庭に行光をつき放し、市兵衛と共に上の方へ逃げて行かうとすれば、上の方にむらがりたる大勢がその行季に立塞がる。)

男一。そのお公卿様は兎もかくも……。

女一。わたし等にはどうぞお恵みを……。

戦の 後

大勢。お願ひでござります、おねがひでござります。

市兵衛。(いよく持餘す) え、氣ちがひやら、乞食やら、とんだものに取巻かれてしまった。よし、よし、おれが今恵んで遣るから、みんなそつちへ廻れ、そつちへ廻れ。

大勢。はい、はい。ありがたうござります。

(上方の一群は下の方へ廻つてゆく。下の方の一群も口々に叫ぶ。)

大勢。わたくし共にもお願ひでござります。

市兵衛。いや、どうも煩さいことぢや、待て、待て。(財布から小銭を取り出す) あ、投げるぞ。勝手に拾へ。

(小銭を十四五枚ばらばらと投げ出せば、大勢はあわて、拾ふ。その隙をみて、市兵衛と七藏は上方へ逃げて行かうとする。行光はまた駆け寄つて市兵衛を捉へる。)

行光。これ、わしを置きにして何處へゆくのぢや。

市兵衛。さあ、鳥渡そこまで……。

(市兵衛と七藏は行光を突き倒して、早々に上方へ逃げ去る。大勢は錢を拾ひをばりて、不平らしく叫ぶ。)

男甲。え、なんのことぢや。これでは一人が三文にもならぬわ。

男一。金持の癖に情をしらぬ奴ぢや。

女甲。こんなことでは料簡がなるまい。

女二。追掛けてもう少し強請らにやならぬ。

大勢。さうぢや、さうぢや。逃すな、逃すな。

(みな口々に罵りながら、上方へわやわやと追つてゆく。行光一人があとに残り、そこらに倒れたる柱に腰をかけて、笑ひながら大勢のあとを見送る。)

行光。は、は、は、は。面白、面白。市兵衛めが一生懸命に逃ぐるわ。逃ぐるわ。あれ、あれ、石につまづいて轉け居つたわ。家來の奴めもついでに轉ぶわ。こりや堪らぬ。は、は、は、は。

は、(腹をかへて笑ふ)あまりの面白さに、わしもどうやら浮かれて来た。(扇にて拍子を取りながら諷ふ)それ生を享くるもの其身の威勢をあらそふこと人間以てこれに同じ、かならず龍虎に限るべからず。されば金龍雲を穿ち、猛虎深山に風をおこす。は、は、は、は、は、は。いや、あまりに笑うたので、空腹うなつて来た。なんぞそこらに食ふものはあるまいか。(きよろしく見まはす)無い、無い。どれ、そこらへ行つて米なと餅なと掠め取つて来よう

かい。

(行光はよろめきながら下の方に迷ひゆく。向ふより烏帽子折おそよ、十七八歳、男のすがたにて烏帽子折の荷をかつぎ、おなじく烏帽子折の男長六と勘八とに引立てられて出づ。)

おそよ。これ、これ、お前方はわたしをどうするのぢや。

六。え、なんでもよいから、歩め、歩め。

勘八。ぐづく云ふと、痛い目みせるぞ。

(ふたりは無理におそよを引立て、来る。)

長六。これ、よう聞きやれ。このごろは悪いことが流行り出して、女が男の繩張内を暴らしてあ

勘八。公卿家や武家家が頭にいたく烏帽子までも、女が折るとは何のことぢや。

おそよ。なんのことぢやとて是非がござらぬ。何年もつゝいた軍の騒ぎで、家は焼かれる、町はさびれる。その日のたつきにも差支へて、他國へ立退くものもあり。人夫に狩出されて軍の手傳ひをする者もある。わたし等とても同じことで、なにがなして毎日立働かねば生きてゐられぬ世のなかぢや。男の職の女の職のと、むづかしい繩張をきめてゐられうか。人間

に出来ることならば、なんでもするより外はあるまい。

長六。それ、それが悪いと云ふのぢや。男の職は男がするもの、女の職は女がするものと、むか

しから自然にきまつてゐるのぢや。

勘八。女が男の領分へふみ込んで、男の商賣を横取りするとは、あまりの無遠慮ではあるまいか、むかしは昔、今は今ぢや、かういふ世のなかになつた以上、烏帽子折でも、魚賣でも働き

次第、かせぎ次第。誰に遠慮がいるものぞ。

長六。そんな理窟はさて置いて、同商賣が一人でも多くなれば、見すくこつちの損になる。

勘八。女に領分をあらされては、商賣の邪魔になるほどに、その烏帽子折の商賣を今日かぎりに

止めてくれ。どうぢやな。

おそよ。お氣の毒ぢやが、その返事はむづかしい。

長六。むづかしいとは不承知か。

おそよ。止めうと止めまいとわたしの心ひとつ、お前方の指圖は受けまい。

長六。ではどうでも……。

二人。不承知か。(詰め寄る。)

戦の 後

おそよ。(あざ笑ふ)そりや云はいでも知れたことぢや。

長六。よい、よい。もうかうなつたら腕づくぢや。

勘六。以後の懲しめに痛めてくるゝぞ。

(ふたりはおそよの腕を捉へる。)

おそよ。お前方は男のやうにもない。ひとりならず、二人がかりで、かよい女を手籠めにするのか。

長六。男の商賣の邪魔するからは、女とて容赦はならぬ。

勘八。男女の差別はない。同商賣は忌敵ぢや。

おそよ。え、無體なことを……。

(おそよは振放して行かうとするを、長六と勘八はひき戻して打揃ふやうとする。おそよは逃げ、はりながら、そこに有合ふ木の片や土塊などを投げつける。この争ひのうちに、下の方より僧善、二十五六歳、旅姿にて笠をかぶり、杖を持ち出て、三人のあひだへ割つて入る。)

これ、これ。待たつしやれ。女子を捉へてどうしたものぢや。

長六。このころは兎かくに女が出しやばつて、男の仕事の邪魔をするばかりか。

勘八。

高慢な面をして理窟をいふので、懲してやらうと思ひました。

覺善。

(うなづく)それは判つた。わかりました。實はさつきからこゝへ來かゝつて、めいゝの云分を聞きました。どちらにも一通りの理窟があるだけに、誰がよいやら悪いやら、わしにも早速の捌きは出來ぬが、ともかくにも眼の前で、かうして争うてるものを、唯おめゝと見物してはゐられぬ。今日のところはわしに免じて、このまゝ穩かに別れてくだされ。

わたしは元より賣られた喧嘩、相手に云分さへござらねば……。

長六。その云分は……。

(遮る)いや、あるにもせよ、無いにもせよ。兎にも角にも今日のところは。

勘八。(長六と顔を見あはせる)こつちに云分は澤山あれど、御出家が折角のお扱ひぢや。

長六。けふはこのまゝで免して遣らうか。

おそよ。免して貰ふ科はないに……。

覺善。はて、そこがおたがひに堪忍ぢや。

長六。(荷をかつぐ)では、御出家様。

覺善。

おわかれ申す。

勘八。

これ、女。けふは堪忍して遣るが、あすも強情に商賣に出るが最期、見あたり次第に踏みにじつて、筋骨をひしぐから覺悟せい。

長六。

そのときに泣いても喚いてももう遅いぞ。え、小面の憎い女めぢや。

(二人は荷をかつぎて上の方に去る。)

おそよ。

何のおのれ等に云ひ籠められてるようぞ。こつちにも云分は数々ある。

(おそよは二人のあとを追はんとするを、覺善は遮る。鐘撞堂のうしろより黒田源左衛門、小袴、一本指、浪人のすがたにて出で、おなじくおそよを遮る。)

源左。

はて、おそよ女も相變らず氣の強いことぢや。喧嘩の相手はもう行つてしまつた。一の谷の熊谷のやうに、呼びかへして勝負するにも及ぶまい。もう堪忍せい。堪忍せい。は、は、は、は。

(おそよはやう／＼に静まりて、みだれたる衣紋など繕ふ。)

覺善。

(笠を脱る。)

源左。

お、覺善どのか。これは久しい。して、都へはいつ戻られた。

覺善。

たつた今、立戻りました。

(二人はそこらに散つてゐる柱や石に腰をかける。)

おそよ。

御出家さまは前方から源左衛門様を御存じでござりますか。

覺善。

知つてゐる段か。わしはこの寺にゐたものぢや。源左衛門殿も聞いてくだされ。こなたの御主人の細川殿と山名殿との確執から、幾年も引きつゞく大いさに、花のみやこも修羅の巷で、神も佛もあらばこそ、われ等が住んでゐた此寺も、いくさの火に焼かれて斯くの始末ぢや。

源左。

こなたがこゝを立退かれたは、たしか四年前ぢやと覺えてゐるが、いくさはそれからが絶頂でござつたよ。今あらためて云ふまでもなけれど、わが主人の細川勝元、又その相手方の山名宗全、これが都の東西に陣を張ると、近國諸國の大小名がおもひ／＼に黨を組んで、細川に附くもあり、山名に味方するもあり、軍のはじまりは應仁元年、その三年目に年號があらたまつて、今年は文明五年。かぞふれば足かけ七年の間、敵も味方も根かぎり精かぎり、よくもよくも戦つたものぢやと、われながら呆るゝばかりでござるよ。その長い怖ろしい軍のあひだに、あたり命を捨てたものは幾千と云はうか、幾萬と申さうか。

戦の 後

おそよ。

それも戦場に出てゐる侍衆ばかりでなく、商人職人百姓のうちにも無理無體に人夫に狩り出されて、ゆくへの知れぬものもあり。みやこは勿論、近郷近在でも、馬の蹄にふみ殺された者、氣が狂うて身をなけた者、飢死したもの、焼死んだもの、かぞへても數へ盡されずまい。

源左。

論より證據ぢや。あれをみられい。

(源左衛門は先にたちて鐘撞堂の石段をあげる。覺善もつゞいて登る。)

源左。

(正面より下の方を指さす。こなたがこゝを立退かれたときには、京の町々もまだこれほどに荒れてはるまい。上京下京の神社佛閣、公卿町、武家屋敷、町家まで、わづかに残るは三分の一で、大方は一面の焼野原。こゝらに住み馴れてゐる我々ですらも、西やら東やら方角が立たぬくらゐぢや。)

覺善。

おそろしいこととござる喃。(珠數を繰る。手前もこれへ來る途すがら、案のほか荒れま

さつたる都のさまを見聞きして、あまりの淺ましさに落涙いたしました。)

おそよ。

(二人は鐘撞堂の柱に縋りてあたりを見おろしてゐる。おそよは石段の下より呼ぶ。)

源左。

なんぢぢや。

おそよ。

源八郎様はお宿でござりますか。

源左。

(微笑む)おゝ、弟は家にゐる。お前がいつも來る時刻ぢやで、爐に柴をくべて待つてゐるうぞ。

おそよ。

(恥しげに)では、これからおたづね申します。御出家様、御免くださりませ。

源左。

(覺善は黙禮す。おそよは荷をかつぎて、上の方の奥に入る。)

覺善。

(石段を降りながら)して、師の御坊は如何めされた。まだ御健かとござるかな。

(おなじく石段を降りながら)御存じないは御道理。四年前に寺を焼かれ、師の御坊のおん供して都を立退き、北國を遍歴するうちに、老の病を防ぎがたく、師の御坊には越前の奥の山家にて御入寂。

源左。

おゝ。(石段をすべり降りる)師の御坊にはお果てなされたか。樹下石上を宿とするが、教の習とは申しながら、みやこに遠き山家にて御入寂とはお悼はしや。(嘆息する)さりながら生死の定めは是非もござらぬ。師の御坊ばかりでなく、源左衛門が主君とたのむ細川殿も今年の五月、疔疽といふ病にてこの世を去られた。

覺善

(覺善は石段に腰をかけ、源左衛門はありあふ柱に腰をおろす。)

それは他國にて聞き申した。一方の敵たる山名殿は、すぎし三月に世を去られ、ついで五月には細川殿が不思議の病にて失せたまふ。東西の兩大將、殆ど時をおなじうして侍るゝからは、應仁以來の大戦もはじめて鎮まり、世は再び太平のむかしに復りしことゝ、よろこび勇んで立歸れば……いや、なんの、なんの。(嘆息する。)

源左

兩大將が一度に仆れて、軍は一先づ終りを告げたれど、こゝや彼處でその殘黨の小ぜり合はまだ歇まず。かて、加へて、飢饉はつゞく、疫病は流行る、商ひは寂れる。それに連れて、盗人や氣ちがひや乞食は殖える。淺ましいとも、おそろしいとも、酷たらしいとも、いやもう、この世の中はさんぐでござる。手前も黒田源左衛門、槍把つては然る者と知られてゐたれど、この世からなる地獄のありさま、戦ひと云ふものゝ怖ろしさが身にしみ、彼の薬師寺が詠歌ならねど、捨つべきものは弓矢なりけりと、思ひ知つたる折も折、主人細川殿は世を去つて、今は仕ふる君もなければ、朋輩の止むるをふり切つて、その日かぎりには武士を捨て……。

覺善

むゝ。武士を捨て……では、浪人の身となられたか。

源左

思ひ切つて弓矢をすて申したわ。(立ち上りて堂のうしろを指さす。申すまでもなく、この寺はわれゝの菩提所、黒田家代々の墓もあれにござれば、差當つて先祖の墓守。もう一つには鐘撞役。)

(覺善も起つて、今更のやうに鐘撞堂を見あげる。)

覺善

本堂經藏はいふに及ばず、庫裏までことごとく焼け落ちたれど、鐘撞堂ばかりは不思議に燃え残りしは、みだれたる世にも時をたがへず、暗きに迷ふ人々の上に、法のひびきを傳へよといふ、尊き御佛の思召か。

源左

手前も左様に存じたれば、この兩腕に一身の力をこめて、衆生濟度の法のひびきを世に傳ふるが日々の勤めと心得、一度も怠つたことはござらぬ。

(覺善は頷るゝことごとくにとどうと坐し、土に兩手をつく。)

覺善

かたじけなし、源左衛門殿。われ等修業の淺ければ、鬨諍の難をさけて他國に奔り、衆生濟度のつとめを怠りしは、御佛の咎めも思ひやられて、未來のほども怖ろしい。幸ひにおん身のごとき奇特の御仁のあらはれて、一旦絶えたる鐘のひびきを、再びこの世に傳へたまふは、ありがたし。忝なしと思ふにつけても、手前よく面目がござらぬ。恐れ入つ

源左。

てござる。あやまつてござる。

いや、いや、手前は凡夫ぢや。經文の讀方も知らねば、法を説く術も存せぬ。たゞ怠らずにこの鐘を撞くだけのことぢやが、年こそ若けれ、こなたは天晴れの善知識と云ふこと、手前もかねて存じてをる。人を救ふは出家の役ぢや。みだれたる闇の世の中に、すさみ果てたる人の心を明るき方に導くが、法の奇特ではあるまいか。恐れ入つてゐるには及ばぬ、あやまつてゐる時節でない。御僧たちが奮ひ起つて、世をすくふべき時はこの時、骨が舍利に碎くるまでも教のために盡されい。

覺善。

(感激の涙をぬぐふ。) はあ、それは仰せまでもござらぬ。こゝへまゐる途々も穩かならぬ世のありさまを見て、手前もかたく決心いたしました。

源左。

たゝかひは鎖まつても、世はなかく鎖まらぬ。今が大事の時てござるぞ。

(上の方の奥より黒田源八郎、右の足を傷つけたる跛足の體、やはり浪人の姿にて杖にすがりて出づ。)

源八郎。

覺善どの。お久しうござつた。

覺善。

おゝ、源八郎どのか。(云ひつゝ、源八郎の足に眼をつける。) どうやら足もとが御不自由な。

源八郎。

(さびしく笑ふ。) 御覽の通りの不具者でござる。(その石に腰をかける。) 去年のたゝかひに足を傷け、行歩も不自由の身と相成り申した。

覺善。

それはお氣の毒な。御不自由お察し申す。

源左。

起居が自由にならぬせるか、弟めは兎角にこのごろは苛々して、癪が高ぶつてなりませぬ。

源八郎。

(あざ笑ふ。) 源八郎が苛々するは身の不自由のためばかりではござらぬ。この頃の世のありさま、あまりに面白くないからでござるわ。覺善御坊もよく聞かれない。細川山名の兩大將があとや先に世を去つて、應仁以來の大亂も一旦治まりしには似たれども、これがまことの太平でござらうか。町は焼かれ、商ひは廢れ、米や薪の價は貴くして、萬氏は飢に苦しむ、寒さに凍ゆる。いくさを修羅道にたとふるならば、これは餓鬼道、畜生道ぢや。

覺善。

餓鬼道、畜生道は云ふもおろか、魔道に墜ちたる者すらも、御佛の教によつて救はれませうぞ。

源八郎。

(いよく冷笑ふ。) はゝ、救はるゝならば救つておみやれ。今とむかしとは、世もちがへば人の心も違ひまするぞ。遠い未來よりも現世が大事ぢや。念佛題目の六字七字、朝から晩

まで喉の張裂けるほどに喚いたとて、一本の薪一粒の米もおのづと湧き出してはまるるまいぞ。

源左。

(宥めるやうに。)源八郎。又してもそれを云ふか。そちのやうな暴びた心を持つものが多ければこそ、戦ひは鎮まつても世は鎮まらぬ。人の心もだんくに險しくなるばかりぢや。わしは武士の果、佛の教をなんにも知らねば、そちに説教するのでないが、武士にも町人にも人の道といふものがある。その一筋の道を踏みたがへぬやうに、誰も彼もおとなしく心がけてゐたら、それで自然に世は治まる。

源八郎。

(かしらを掉る。)兄上の御講釋はいつもそれぢやが、そんな生温い理窟はわれくには呑込まれぬ。それがしの見るところでは、所詮この儘ではまことの太平が来ようとは思はれぬ。生きながら餓鬼道に墜ちたるものは、人間にして鬼の心となる。生きながら畜生道に墜ちたるものは、人間にして獸の牙をとぐ。この世はいよく亂る、ばかりぢや。

覺善。

おそろしいことを申さるゝ。お身はこの世を呪うてござるのか。

源八郎。

(上の方より市兵衛は下男七藏を連れて出づ。)

市兵衛。

おゝ、源左衛門どの。それにござつたか。

源左。

市兵衛殿も、はや年末と相成つて、なにかとお忙しいこととござらうな。

市兵衛。

いや、もう、眼のまはるほどの忙しさ、お察しくださいませ。就てはこれからあなたのお宿を鳥渡おたづね申さうと存じてをりました。

源左。

(苦笑ひする。)御催促かな。

市兵衛。

勿論その事ぢや。今もこなたの口から、もはや年末と相成つたと云はれたが、その年末といふことを御存じなら、なう、源左衛門どの。去年の暮から丁度一年の貸金が、元利積つて十五兩と二貫文、この暮には間違ひなく御返済をたのみますぞ。

源左。

去年の冬の戦ひに、弟源八郎が足を傷つけ、その金創の治療のために、たしかに借用したる金十兩、それに利分がたゞまつて十五兩と二貫文とやら。もとより返済を怠る心ではござらぬが、なにを申すも浪人の身の上なれば……。

市兵衛。

いや、その浪人のゑに此方ではなほく御催促をせねばならぬ。きつと間違ひはござるまいな。

源八郎。

(むつとして。)市兵衛どの、又してもおなじ催促か。兄は浪人、それがしは不具者、いかに

市兵衛。

焦つても狂うても、十五兩と二貫文、差當つては工面も才覺もなり申さぬ。源八郎兄弟はこの春頃のたゝかひに討死して、世に亡いものとお諦めください。さりとは無法なことを云はるゝぞ。まことに討死したものならば兎も角も、兄弟が現在鼻をそろへて、わしの眼の前にござるではないか。むゝ。では、こなた。そのやうな不法を云ひ募つて、十五兩と二貫文をふみ倒す下心ぢやな。

源八郎。

(怒鳴る。)茶道具屋市兵衛が不義の財、十兩や二十兩ふみ倒しても仔細はないのぢや。(持つたる杖を地に投げ付ける。)

源左。

はて、騒ぐな、さわぐな。市兵衛どの。大晦日にはまだ五六日のあひだがある。もう二三日待つてくだされ。

市兵衛。

さあ。(考へてゐる。)

七藏。

(市兵衛の袂をひく。)あゝしておとなしく頼んで居りますれば、もう二三日御猶豫を……。

市兵衛。

むゝ。では、源左衛門どの。間違ひはござるまいな。

源左。

承知いたしました。

七藏。

さあ、まゐりませう。口がくれると、途中が不用心でござりますぞ。

市兵衛。

ほんに此頃は、京のまん中でも油断はならぬ。どんな斬取り強盗が出ようも知れまい。では、おわかれ申しますぞ。

(源左衛門は黙禮する。源八郎は素知らぬ顔をしてゐる。市兵衛と七藏は早々に向うへゆく。雪ちらちらと降り来る。上の方の奥よりおそよ出づ。)

おそよ。

もし、雪がちらちらと降つて来ました。

(みなく空を仰ぐ。)

覺善。

おゝ、降つて来た。

源左。

けふは朝から底びえがすると思つてゐたら、たうとう今夜の雪になつたか。都には住む家のないものも澤山ある。新しく出来た家とても、大方は木小屋同様の假普請ぢや。

おそよ。

この上に雪が積つたら、大勢の難儀が思ひやられます。

源八郎。

飢死ばかりか凍死も、澤山出来ることであらうよ。おゝ、降るわ、降るわ。空までが無慈悲ぢやなう。さう云ふ私もさつきから冷えたせるか、足の古疵が痛んで来た。

おそよ。

おゝ、それは悪うござんすな。

戦の 後

おそよ。 (おそよは落ちたる杖を拾ひて源八郎にわたせば、源八郎は杖にすがりて起ち上る。)

わたしの手が曳いてあけますほどに、ちつと待つてゐてくださりませ。

源八郎。 (おそよは梅の木の下にゆきて、花の咲きみだれたる一枝を折つて来る。)

梅を手折つて来てなんとする。

源左。 御佛前の花筒に生けてあるお花が、もう大方は散つてしまひました。

それで生け換へてくるよと云ふのか。よう気がついてくれた。かたじけない。散らさぬやうに持つて行つてくりやれ。

おそよ。 あい、あい。

源八郎。 では、覺善御坊。それがしはお先へまゐりますぞ。

覺善。 痛み所を大切になされい。

源八郎。 御めん下され。

(源八郎はおそよに扶けられて奥に入る。雪ますく降る。)

源左。 お、降らいてものことに、雪はいよく烈しくなつて来た。日はくれかゝる、雪は降る。

狭苦しくとも今夜は手前の家へ来て、一夜の寒さを凌がれい。

覺善。 それは千萬かたじけない。では、御厄介に相成りませうか。

源左。 なんの設けもござらねど、焚火のそばでこの頃の都の話でもいたさうか。

覺善。 このごろの都の話……。なにかの心得のために、それを委しくうけたまはりた。

源左。 さあ、おいでなされ。

(源左衛門は先に立ちて行かうとする時、奥よりおそよ再び出づ。)

おそよ。 源左衛門殿。もう鐘を撞く刻限でござりますぞ。

源左。 もう暮六つか。話にまぎれて忘れてゐた。どれ、どれ。

(源左衛門は鐘撞堂の石段をあがりて、鐘を撞く。おそよは鐘撞堂を見あげる。覺善は合掌する。)

鐘の聲。雪ふる。)

幕

下の巻

黒田源左衛門の家。家のなかの大部分は土間にて、正面に荒むしるを垂れたる出入口あり。家は假

小屋のこゝろにて、出入口の左右には壁なく、すべて板羽目と知るべし。上のかたには棚を吊りて佛像を安置し、油皿に燈明をそなへ、竹の花筒に梅の枝をさしたり。この板羽目につゞいて、上のかたには前づらに張り出したる屋體ありて、その正面と上のかたには矢張り荒筵をたれ、下の方だけは破れ障子を閉めたり。正面の出入口の下のかたには藁と笠とをかけ、前の方に折曲げて竹窓あり。窓のそとは往來にて、焼け類れたる京の町に雪一面にふり積れるが見ゆ。家のなかの土間には爐を設けて、焼木杭を焚く。爐のそばには古き土瓶などあり。

(前の幕より三日目の午後。黒田源八郎は切株に腰をかけて、爐の火に手をかざしてゐる。表には雪少しくふる。向ふよりおそよは竹笠をかぶり、烏帽子折の荷をかつがすに出で、竹窓より内をうかゞひて、正面の出入口より入り来る。)

おそよ。ひどい雪でござりましたな。

源八郎。おそよか。をとゝひの夕暮から二日と三晩、よくも降りつゞけたことであつたよ。今日もまだすつかりとは歌みさうもないなう。

おそよ。(着物の雪を拂ひて爐のまへに来る。)まさかこんなに大雪にならうとは思ひませなんだ。今もこゝへ来る途中で、路傍に凍え死んでゐる男が二人、女がひとり。広い都の果から果ま

でさがして歩いたら、幾人倒れてゐることやら。

源八郎。さうであらう。思へば惨めな酷たらしいことぢや。これも時世と諦めてばかりはゐられまい。

おそよ。して、おまへ様の痛み所は、この寒さでどうでござります。心にかゝつてはゐながらも、なにをいふにもこの大雪で、表へは一足もふみ出されず、小歌みになるのを待兼ねて、御見舞ながら出て来ました。

源八郎。見舞うてくれるは嬉しいが、この雪の中をうかく出あるいて風邪でも引いたら猶大事ぢや。わしの古疵には寒さが餘ほど祟るとみえて、きのふから今日にかけて痛みが一入強いやうぢや。(足をなでる。)

おそよ。(悼ましげに。)さぞ御難儀でござりませうな。して、阿兄様は……。奥にお寝つて、ござりますか。

源八郎。いや、いや、わしの古疵に悩むのを見かねて、三條のあたりまで金創の薬を求めに行かれた。

おそよ。もう一足早かつたら、わたしがそのお使にまゐらうものを、残念なことでござりました。

源八郎。そのほかに何か御用はござりませぬかえ。
 差當つては別に頼むやうなこともない。まあ、兄の戻るまで話して行きやれ。
 おそよ。では、爐の火でももう少し焚付けませうか。

(おそよは土間の隅にたばれてある焼木枕をかへ出して爐の火にくべる。表の雪しばらく歌む。
 向ふより黒田源左衛門は蓑笠にて出て、すぐに正面の庭なかへけて入る。)

源左。おそよ女、來てるたか。

おそよ。お歸りなされませ。(源左衛門の蓑をぬがせなどする。)

源八郎。兄上、御苦勞でござりました。

源左。(ふところより薬を出す。三條の藥屋には金創の薬が賣切れたと云ふので、五條の方までまはつて來た。)

源八郎。それはいよく恐れ入りました。(薬をうけ取る。さぞお寒いこととござりましたらう。
 おそよ。お薬はわたしが塗つて進ませせう。

源左。(おそよは源八郎の右の足にむすび付けたる白布を解きて、薬を塗る。)
 どうぢや、まだ痛むか。

源八郎。骨にしみるやうにすきく痛みまする。

源左。困るなう。(眉をよせる。一旦は本復したやうに見えても、疵はまだほんたうに癒えぬのかも知れぬ。よく氣をつけねばなるまいぞ。)

源八郎。はあ。

おそよ。このやうに寒くては誰のからだにも障りませう。ちつとも早く晴れてほしいものでござりますすな。

源左。雪は豊年の貢などといふは太平の世のことで、この都に雪は禁物ぢや。併しよい鹽梅に歌んだらしい。

(源左衛門は起つて、窓より表をみる。下の方より前幕の盲人は小娘に手をひかれて出づ。盲人は雪にすべりて轉ぶを小娘は介抱す。源左衛門はあわて、表へ走り出で、娘に代りて盲人を抱へ起し、身體の雪を拂つて遣りなどして介抱する。)

盲人。はい、はい。どなたかは存じませぬが、ありがたうござりまする。

源左。別に怪我はなかつたか。

盲人。どこも怪我はござりませぬ。

源左。

それは仕合せであつた。(腰にさげたる革巾着より、錢五六枚を出す。)これは少しぢやが、餅

小娘。

でも買うて祖父と二人で食へ。(錢をわたせば、娘は押頂く。)

盲人。

これ、祖父さま。こんなにお錢をくだされた。(盲人の手にわたす。)

小娘。

(おどろきて喜ぶ。)

小娘。

これにはありがたうござりまする。おかけさまで二人が助かりまする。これ、お禮を申せ。

(二人は等に手をつく。)

源左。

ありがたうござりまする。(おはれむやうに。)氣をつけて行きやれ。

盲人。

はい、はい。

源左。

あゝ、これ、待ちやれ。一旦は小歌みになつたが、この空のけしきではまた何時降り出して来ようも知れぬ。(窓の外より呼ぶ。)これ、おそよ。

おそよ。

あい、あい。(起つて来る。)

源左。

わしの糞を取つてくれ。

おそよ。

又どこぞへお出でなされますか。

源左。

いや、さうでない。兎もかくも取つてくりやれ。

おそよ。

あい、あい。

(おそよは掛けたる糞をはづして、表へ持つて出づ。源左衛門はその糞をうけ取りて、盲人に着せてやる。)

源左。

さあ、これを着てゐれば何時降つて来てもかまはぬ。また幾らかの寒さ凌ぎにもなる。

(小娘に。)もし雪が降つて来たらば、祖父の糞の下にかくれてゆけ。

盲人。

かさねくの御深切、お禮の申上様もござりませぬ。では、頂戴してまゐりまする。

おそよ。

滑らぬやうにおいでなされ。

盲人。

はい、はい。どなたも有難うござりまする。

(盲人は小娘に手をひかれて、向ふへあゆみ去る。)

おそよ。

可哀さうでござりまする。あの人の息子は去年の軍のときに、流れ矢にあたつて命を取ら

れ、それから後は宿無しも同様。

源左。

あはれな者の多い世ぢや。

(ふたりは嘆息しながら盲人等のゆくへを見送つて立つ。向ふより山崎番作、廿一二歳の武士、直

垂、籠手脛當にて蓑をつけ、竹笠を持ち出て出づ。

源左衛門どの。

番作。

お、番作か。

源左。

常年の寒さは格別のやうでござるが、御障りはござらぬか。

源左。

幸ひに無事ぢや。喜んでくれ。(おそよに)源八郎に番作が来たと申せ。

おそよ。

かしこまりました。(引返して内に入る。)

源左。

さあ、さあ、来やれ。

源八郎。

(源左衛門は先に立ち、番作も蓑をぬぎすて、内に入る。)

番作。

お、番作、寒いなう。

源八郎。

よく降つた。寒い、寒い。(爐のまへに来る。)源八郎。この寒さで痛み所はどうぢやな。

源八郎。

むかしの朋輩も大勢あるなかで、いつも深切に見舞うてくるはお身ばかりぢや。今も云

うてるたところぢやが、このやうに寒いと矢はり痛い。心ばかりは燥つても、もう人並の働きは出来ぬわ。

(この間に、おそよは奥より盆にのせたる茶碗を持ち来りて、番作に湯をついで出す。)

番作。

(湯を飲みながら)そのやうに弱るな。まだく世のながか治まらうとは思へぬ。近いうち

源八郎。

む、わしもさう思うてる。これで世が鎮まらう筈がないわ。

番作。

(うなづく。)さうぢや、さうぢや。その時にはお身も槍を杖にして真先に馳せ参じて、戰場で死花を咲かせい。わしもその用心にこのごろ新しい刀を買った。刀の銘は來信國、身分不相應の高値の品とは思つたが、武士に取つては大事の寶ぢや。その價は年末までと云ひのばして、兎もかくも我手に引取つた。これ、見ておくりやれ。

(番作は誇るやうに腰にしたる太刀をぬいて見せる。)

源八郎。

焼といひ、匂ひと云ひ、なにさま天晴れの業ものらしい。よう見せてくれ。

(源八郎は番作の太刀をわが手に把りて惚々とながめてゐる。)

番作。

どうぢや。それならば兎の眞向もたまるまいな。

源八郎。

(打笑む)む、眞向から見事に梨割ぢや。(太刀を振つてみる。)

(源左衛門は無言にてこの問答を聴きゐるが、衝と寄りて源八郎の手よりその太刀を奪ひ取る。)

源左。

番作。お主は悪い。このやうなものを弟に見せてくるな。

戦の 後

番作。

悪うござるか。

源左。

悪い、悪い。左なきだに毎日苛々して、とかくに魂のおちつかぬ源八郎、こんなものを見せは毒になる。早う収めてくれ。

(太刀を戻されて、番作は澁々ながら鞘に収める。)

番作。

源八郎、けふも兄貴に叱られた。首尾が悪いからもう歸るぞ。

源左。

腕白者が寄りあつまると碌な相談はせぬものぢや。早う歸れ、歸れ。

源八郎。

(笑ふ。) また追ひ出されるのか。

番作。

(笑ふ。) わしは刀のほかに槍も買った。近いうちに又持つて来て見せるわ。

源左。

そんなものを擔いで來たら、内へは入れぬぞ。

番作。

そんなことしたら、これが承知せぬぞ。(太刀の柄を叩く。) はゝゝゝゝ。

(番作は蓑をきて、下の方に立去る。)

源左。

あれも年が若いだけに、とかくに暴々しい奴ぢや。

おそよ。

見るから勇さうなお侍でござりまするな。

源左。

(苦々しげに。) 勇いも勇いが、氣も暴い。困つたものぢや。

(下の方より覺善は先に立ち、町人與次郎、佐助の二人に雪だらけになりたる公卿行光を昇かせて出づ。)

覺善。

源左衛門殿。雪に凍えたお人がござる。火にあたゝめて御介抱くたされ。

(源左衛門とおそよは起ち上る。覺善等は行光を内にかき入れて、爐のまへに横へる。)

おそよ。

これはこの間からそこらを狂うてあるくお公卿様ぢや。

源左。

いかにも行光の駒ぢや。雪に凍えて倒れてござつたのか。

覺善。

路ばたに正體もなく倒れてござつた。あのまゝに捨て、置いたら凍え死は知れてゐるので、

通りあはせた二人の衆の手をかりて、兎もかくもこゝまで連れてまゐつた。

源左。

(行光をかゝへ起す。) 身の内にはまだ温もりがござれば、蘇生いたすに相違あるまい。おそ

よ、火を強う焚いてくりやれ。

おそよ。

あい、あい。

(おそよは土間の隅より焼木杭を持ち來りて、再び爐にくべる。火は燃えあがる。)

源八郎。

この公卿衆も正月のたゝかひに屋敷を焼かれ、一家一門ちりぐと相成つて、白川のあたり

に逼塞してゐられたが、そこにも安らかに住みかねて、物狂はしき今のありさま。お

源左。もへば悼はしい身の果ぢや。兄上、無事に生くるでござらうか。
生くる、屹と生くる。おそよ、湯を汲んでくれ。

おそよ。あい、あい。

源左。(おそよは茶碗に湯をついで渡せば、源左衛門は行光の口にそよぎ入れて呼び活ける。)
これ、心をたしかに持たれい。行光の卿、行光どの。

覺善。行光どの。
(行光は微に眼をひらく。)

おそよ。(のぞく。)お、お氣が注いたやうでござります。

源左。如何でござる。行光の卿、お心は確でござるか。

行光。(左右を見まはす。)お、こゝは何處ぢや。なんで私をこんなところへ連れて來たのぢや。
お身は雪のなかに倒れてござつたのぢや。

覺善。なんの。嘘ぢや。嘘ぢや。わしは清い美しい眞白な、玉のやうな筵のうへに快く寝てる

行光。るところを、誰やらがこんな狭い穢苦しい、うす暗い、獄屋のやうなところへ連れて來た

のぢや。こんなところには一刻もゐられぬ。わしは歸る。わしは歸る。

(行光はよるめきながら起き上るを、みなしは支へる。)

源左。外へ出てどうなさる。先つお鎮まりなされませ。

行光。忌ぢや、忌ぢや。(身を藻掻く。)

源左。(抱きすくめる。)忌ぢやと仰せられても迂濶には出されませぬ。しばらくあれにてお休みな

されませ。

行光。え、なんでわしを虜にするのぢや。放せ、放しや。

源左。いえ、なりませぬ。

(源左衛門は無理に行光をかへ、覺善とおそよも手傳ひて、忌がる行光を上の方の障子屋體の内へつれ込む。町人等は立つて眺めてゐる。)

源左。(障子の内にて。)狂うては悪い。

覺善。(やはり障子の内にて。)お鎮まりなされ。

おそよ。(障子の内にて。)ぢつとしてお休みなされませ。

(やがて源左衛門を先に、覺善は障子屋體より出づ。)

源左。(上の方を見かへりて。)冷えぬやうに私と弟の紙衾をきせてあけい。

おそよ。

(障子の内にて。) あい、あい。

覺善。

(町人に。) どなたも御苦勞でござつた。先づ焚火にでも温まつて行かれい。

源左。

さあ、遠慮せずこれへ寄られい。

町人二人。

はい、はい。どうもお寒いことでござります。

(與次郎と佐助も爐のまへに来る。)

與次郎。

よい鹽梅に雪もやんだやうでござりますな。

佐助。

年のくれの數へ日になりましたして、二日も三日も降りつゞかれては、わたくし共も大難儀でござります。

源八郎。

難儀と云うても、お身たちは兎もかくも一軒の店を持つて、飢ゑす凍えずに生きて行かるは大きな仕合せといふものぢや。この大雪で飢死もあらう、凍死もあらう。お身達はそ

與次郎。

のふところに持つてゐる金を掃いて、見あたり次第に施してあるいは何うぢやな。とんでもないことを……。わたくしどもも施して貰ひたい方でござります。長い軍もどうやら斯うやら収まつて、やれ安心と思つた甲斐もなく、饑饉はつゞく、疫病は流行る、諸式はます／＼あがるばかりで、逆もこれでは立行かれませぬ。

佐助。

いくさの騒ぎさへ鎮まつたら、屹と昔の世の中になることゝ、誰もかれも楽しみに待つて居りましたが、それもみんな空頼みで、世のなかはますます／＼悪くなるばかり。

與次郎。

弱り目に祟り目とやらで、節季師走にこの大雪。この冬の寒さは取分けて、骨身にしみるやうでござります。

佐助。

こゝらで何うしても徳政の御沙汰を願はねばならぬと、京の町々の者が寄りあつまつて、この間中から評議してをりまするが、それもどうなるやら判りませぬ。

源八郎。

して、その徳政とは何ういふことぢやな。

與次郎。

わたくし共も委しいことは知りませぬが、なんでも一切の貸借を帳消しにするのだとか聞きました。

源八郎。

(乗出す。) 一切の貸借を帳消しにする。それが所謂徳政と申すのか。

覺善。

手前も徳政の名はかねて聞いてゐるが、どう云ふことやら能くは知らぬ。(源左衛門に。) 今この衆が云はるゝ通り、一切の貸借を帳消しにする。それが徳政の御趣意でござるか。

源左。

さうでござる。覺善どのも源八郎もまだ此世に生まれぬ前のことで、委しいことは知られまい。今から三十年ほどの前であつた。わしが丁度元服した年の冬に……。おゝ、やはり

こんな大雪が降つて、寒い寒い年のくれに、その徳政といふものが觸れ出されたことがある。

皆々。(すり寄つて聴く。)

源左。

つまりは諸人の困窮を憫れまれて將軍家よりふれ出さる、御仁政で、その徳政の御沙汰があつたが最後。公卿とはいはず、武家といはず、町人といはず、百姓といはず、一切の貸も借もすべて帳消に相成るのぢや。勿論、その時が初てではない、わしの生れぬ前にも幾たびか、その徳政が行はれたとか聞いてゐる。

與次郎。

源左。

して、その徳政の出るときには、前以て御觸渡しでもあるのでござりますか。いや、前以て知れてゐたら、貸方でもすぐに催促してあるく。そんなことではまことの徳政にならぬと云ふので、いつでも不意に觸れ出される。その合圖には寺々の鐘を撞く。

覺善。

その鐘の鳴るを合圖に、まへにも云ふ通り、一切の貸借はすべて帳消しとなるのが定めぢや。

(源八郎はちつと聴いてゐる。)

覺善。

(考へる。)なにさま御仁政には相違あるまいが。それでは借方のみの仕合せで、貸方に取つては大きな損耗、すこしく片手落の御沙汰でござるな。

源八郎。

(打消すやうに。)いや、片手落とは申されまい。困窮のものどもを救ふといふ御趣意ならば、借方の仕合せを目安に置かるゝが當然ではござるまいか。

覺善。

さうかも知れぬが……。 (やはり考へてゐる。) どうも正しい御政道ではないやうに思はるゝ。いや、それがまことに世を救ふ、正しい御政治といふものぢや。なう、兄上。

源左。

(頭をふる。) なの、それが正しい御政治であらうぞ。御仁政とは申すものゝ、まことはよんどころなしの一時凌ぎで、そんな事ではほんたうに世は治まらぬ。むかしも今も世の中には、あはれな者、貧しいものが澤山ある。それを救ふは勿論よいことに相違ないが、救ふにも恵むにも又それんの法がある。いつの代にも借りた者を返すが人間の道ぢやに、その道を勝手にふみ破つて、借りたものは借徳、貸したものは貸損、そんな無理無法の逆さま事ではいかな、いかな。くどくも云ふ通り、人間には人間の守るべき道がある。その道を土臺にして築きあげた御政治でなければ、まことの仁政とも徳政とも申されまい。手前も左様にかんがへて居ります。この世を治むるには……。

覺善。

戦の後

源八郎。

(聲暴く) え、措かれい、措かれい。兄上がいつもの御講釋、蟲を堪へて聽いてるれば、入れ代つて御坊までがおなじやうに……。どんな有難い御説教でも、今のわれらには馬の耳に念佛ぢや。

覺善。

それを教化するのがまた我等の務ぢや。先づ聞かれい。

源八郎。

いや、聞かぬ、きかぬ。この上にいつまでもくどくどと云うてるたら、兄上がさつきあの番作を追ひ出したやうに、それがしも御坊を追ひ出してくるゝぞ。え、面倒な、出てゆかれい。え、出てゆかれい。

(源八郎は燃えたる杭をとりて起ちあがる。奥次郎佐助はおどろいて止める。源左衛門も起つて源八郎を叱る。この悶着のうちに、向ふより茶道具屋市兵衛は茶壺の箱を抱へてあわたしく走り出で、すぐに内に駈け込む。)

市兵衛。

これは御免ください。人に追はれて逃げ込んでまゐりました。

奥次郎。

お、市兵衛どの。

佐助。

息を切つてどうしたのでござる。

市兵衛。

大晦日も眼のまへに支へてるるので、雪のやんだを幸ひに、二三軒懸取りに出て来ると、

源八郎。

途中でいつもの貧乏人どもに取巻かれ、うるさく絡み付くのを突き退けて、やうくこゝまで逃げて来ました。

(嘲るやうに) いつまでもそんなことをしてるたら、しまひには貧乏人どもに鬨り殺しにされうも知れぬぞ。

市兵衛。

(負けぬ風を粧ひて) それが怖ろしうて、この世智辛い世のなかで渡られうか。いや、御兄弟、丁度こゝへ來合せたついでに、この間も念をおして置いた十五兩と二貫文、今日はとどこほりなく受取りませうか。

源左。

さあ、その金は……。

市兵衛。

あれほど請合うて置きながら、今更四の五の云はれては、わしもまことに迷惑しますぞ。

(下の方より町人五郎藏走り出で、窓より内をのぞきて呼ぶ。)

五郎藏。

これ、これ、奥次郎どの、佐助どの、早う來い、來い。

奥次郎。

(起つ) お、五郎藏。なんぢや。

五郎藏。

町の人たちが集まつて、これから徳政を願ひに出ることにきまつた。

佐助。

お、徳政をねがひに出るのか。

五郎藏。

とても一通りでは行くまいから、みんなが一度に室町の御屋形へ押しかけて、傲訴ぢや、

傲訴ぢや。ひとりでも味方は多いがよい。早う来てくれ。よいか。

(云ひすて、五郎藏は行きかゝるを、源八郎は窓の際まで出てよび戻す。)

源八郎。

五郎藏。

源八郎。

五郎藏。

源八郎。

與次郎。

佐助。

源左。

與次郎。

源左。

とも、このまゝにちつとしては……。
(五郎藏は向ふへ走り去る。内の人は顔を見あはせる。)
さあ、いよく大事の時節になつたぞ。
ほんにうか／＼してはゐられませぬ。
わし等もその徳政を待焦れてゐたのぢや。
(與次郎と佐助はあわて、出て行かうとするのを、源左衛門と覺善は遮る。)
いや、いや、こなた衆は滅多に動いてはならぬ。傲訴などは以ての外ぢや。
でも、このまゝにちつとしては……。

源左。

覺善。

市兵衛。

源左。

市兵衛。

源左。

市兵衛。

源左。

市兵衛。

源左。

市兵衛。

源左。

源左。

市兵衛。

源左。

市兵衛。

源左。

いや、ちつとしてゐたが好い。先づおとなしく、おとなしく……。えゝ、鎖まらぬか。
(無理に押戻されて、二人はよんどころなく戻る。)
こゝばかりを扼ひ止めても、他の大勢が立騒いでは、いよく大事にならうも知れまい。
手前はこれより駈け付けて、力のかぎり取鎖むるでござらう。
(覺善は急ぎて下の方に走り去る。)
は、傲訴などとは飛んでもないこと。その張本人は片端から引縛られて、河原の晒し首
になるのは眼のあたりぢや。ついでには源左衛門どの。こなたはふだんから物の道理のよく
判つたお人ぢや。徳政などといふ筋違ひのことを當てにせずに、借りたものは素直に返し
てくだされ。
(思案して。)承知いたしました。源左衛門、唯今たしかに返済いたす。
むゝ。御返済くださるか。
見らるゝ通りの浪人、金銀でお返し申すことは相成らぬが、十五兩と二貫文の形代に、な
にとぞこれを御受取り下され。
(源左衛門は腰にさしたる小刀をぬき取りて、市兵衛のまへに出す。)

市兵衛。

では、この刀を金の代りに……。

源 左。

家重代の二字國俊、廿兩に足らぬ金の形代に、よも御不足はござるまい。

市兵衛。

(少しぬいて見る。) わし等は商賣ちがひで、槍や刀の目利きは出来ぬが、浪人こそすれ、こなたも武士ぢや。贋物をおしつけて私に損をさせるやうなこともござるまい。では、たしかにうけ取りました。

(源八郎は起ちあがりて市兵衛の腕をつかむ。)

源八郎。

いや、それをむざとは渡すまい。兄上が承知なされても、この源八郎が不承知ぢや。多寡が十兩か廿兩の金の型に、家重代の寶を奪はれてならうか。その刀はこつちへ戻せ。では、十五兩と二貫文、耳をそろへて戻してくださいるか。

源八郎。

え、金などはどうでもよい。兎もかくも刀を戻せ。

市兵衛。

いや、減多には戻されませぬ。

(ふたりは争ふを、源左衛門は制す。)

源 左。

源八郎、又しても喧嘩沙汰、鎮まらぬか。唯今も申した通り、借りたものは返すが天下の法、人間の道ぢや。金の形に道具をわたす、それに何の不思議があらうぞ。市兵衛どの。

市兵衛。

弟がなんと申さうとも仔細はござらぬ。重代の寶とは申しながら、世の太平をねがふ源左衛門に、槍刀は不用の品、たしかにこなたにお渡し申した。

はい、はい。わたしも確に御受取り申しました。さあ、兄御があゝ云はるゝのぢや。お放しなされ。

與次郎。

(振拂はれて、源八郎は忌々しげに手を放して元の座にかへる。)

市兵衛どの。こなたは日ごろから武家屋敷へも出入りして、商賣の茶道具のほかに、刀の目利きも巧者ぢやと聞いてゐる。

佐 助。

源左衛門どのが家重代といふ二字國俊、十五兩と二貫文の形にとれば、定めてよい掘出し物でござらうな。

市兵衛。

えへん、えへん。(眼で制す。) なんの、わし等に刀の善悪などが判るものか。わしに間違ひなく眼利きの出来るは、商賣の茶道具ばかりぢや。これ、見さつしやれ。(持つたる茶道具を取出してみせる。) この茶壺は唐渡りで、これから某御大名の屋敷へ納めにゆくのぢや。

(與次郎と佐助は首を伸ばして見る。)

源 左。

この頃は茶の湯がしきりに流行り出したとか承はつたれば、左様な道具も高價でござら

うな。

市兵衛。

負引なしに金二百兩、それですぐに相談がきまりました。

源八郎。

二百兩……。その土焼の壺一つが……。さりとて言語道断の沙汰ぢや。(罵る。)

市兵衛。

不風流の眼から見たら、土焼の壺一つが二百兩とは、さだめて膽も潰されうが……。(茶壺を透してみる。)

云ふに云はれぬ味のあること、逆もこなた衆には判るまいよ。はゝゝゝゝ

おそよ。

(この時、上の方の障子の内にて、おそよの聲。)

行光。

あゝ、もし、起きては悪い。もう少し休んでおいでなされませ。

市兵衛。

(障子を暴々しく引きあけて行光出づ。あとよりおそよも止めながら出づ。)

行光。

まあ、それはよい。わしは決して叱りはせぬ。今聞いてるれば、そちは立派な茶壺を持つてるさうな。わしも茶道具は大好ぢや。見せてくりやれ。

市兵衛。

いえ、何、それほどの物ではござりませぬ。

(市兵衛は茶壺を隠さうとするを、行光は衝と寄りてうばひ取る。)

市兵衛。

あゝ、もし、そんなことをなされては……。 (寄らうとする。)

行光。

はて、騒ぐことはない。その代りには何ぞ褒美を遣はす。(あたりを見まはす。)

おゝ、よいものがある。(上の方の棚の前にゆき、竹筒より梅の枝を持ち来る。)

わが國の梅の花とは見つけども、大宮人は何と云ふらんと、阿部の宗任が詠んだはこれぢや。さあ、これを遣はす。取つて置きやれ。

市兵衛。

はい、はい。(溢々うけ取る。)

行光。

(茶壺をながめる。)

ほゝ、なるほど唐渡りと云ふだけあつて、見惚るゝやうに美しいものぢや。なう、市兵衛。諸人がこのやうなものを玩ぶやうになつたのは、まことに天下太平のしるしぢや。めでたい、めでたい。

市兵衛。

(よんどころなく。)

はい、おめでたいこととござりまする。

行光。

そのめでたい物を打毀したら何うあらうな。

市兵衛。

え。

(行光は持つたる茶壺を土間にうち付ければ、壺は微塵に碎ける。皆々もおどろく。市兵衛は色を

失ふ。

や、大切の茶壺を粉微塵に……。

はムムムム。

市兵衛。

もしお前様。(梅の枝をふり上げる。)

行光。

(他愛なく笑ひこける。)

おそよ。

(市兵衛を支へる。)

こなたはお公卿様ぢや。

市兵衛。

なんの瘦公卿が……。世に二つとない大切の寶を、むざくこのやうに打碎くとは、呆れ

果てた氣ちがひめ。この年の暮に二百兩の大損をさせられて、こつちが氣ちがひになりさ

うぢや。

(市兵衛は梅の枝にて行光を打たうとするを、おそよは又支へる。)

おそよ。

はて、それもみんなお前が悪い。

市兵衛。

なにが悪い。

おそよ。

寒さに凍え、飢にせまつて、生きるの死ぬのと云ふ人が、そこにもこゝにもあるなかで、

優長らしい茶道具の自慢話。それから降つて湧いた災難は、おまへの自業自得ではあるま

いか。さあ、かう云はれたのが腹が立つなら、このお公卿様の名代に、わたしを打つとも

踏むともしなされ。

市兵衛。

え、つべこべとしゃべる女ぢや。邪魔せずと退け、退け。

源八郎。

やあ、市兵衛。その女に指でもさしたら、源八郎が容赦せぬぞ。(刀に手をかける。)

(源八郎の勢ひ烈しきに、市兵衛はすこしく猶豫ふ。)

源左。

いづれの肩を持つでもなければ、もう斯うなつたら是非がない。なにごともし兵衛殿の不

祥ぢや。おそよの云ふことにも道理はある。今の時節にそのやうな物を玩んでゐるやう

では、世の中はやはり治まらぬ。源左衛門が刀を捨てたと同じやうに、こなたもその道具

を捨てたと諦められい。

與次郎。

なにをいふにも相手は氣のちがうたお人ぢや。

佐助。

殺されても、殺され損と、むかしから相場がきまつてゐる。

與次郎。

茶道具の損ぐらるならば安いものぢや。

市兵衛。

人のことぢやと思つて誰もかれも高見の見物。二百兩の大損がさう安々と諦められうか。

戦の 後

よい、よい。氣ちがひでも阿房でも、これから所司代の屋敷へ召連れ訴へをして、せめてもの腹癒せをせねばならぬ。

(市兵衛は梅の枝をなげ捨て、行光を引立てようとする。)

行光。これ、わしをどこへ連れてゆくのだや。お、わかた。中國か西國へ案内してたもるか。

市兵衛。え、なんでもよいから一緒に來やれ。

おそよ。あ、もし。

(おそよは遮るを、市兵衛は突き倒す。源八郎は刀に手をかけて起ちあがるを、源左衛門おさへる。與次郎と佐助も市兵衛をとめる。行光は落ちたる梅の枝を拾ひて笑つてゐる。この悶着の最中に向ふより覺善、法衣のところへをひき裂かれ、手に切れたる珠數を持ちて走り出づ。)

覺善。源左衛門どの。(内に入る。)残念でござる。

(みなノも思はず鎮まりて覺善を見る。)

源左。お、覺善どの。見れば法衣も引裂かれて、いかゞめされた。

覺善。そこにもこゝにも多人集がよりあつまり、傲訴と犇め騒ぐところへ、手前駆付けて取鎖

めんと存じたれど、相手は燥り立つたる大勢、手前ひとりか聲をからして、説けど諍せど肯かばこそ。これ見られい、法衣も珠數もこの通りぢや。

與次郎。さう聞いては、愈々うかくしてはゐられぬ。

佐助。わし等も一緒にいかすばなるまい。

(與次郎と佐助はかけ出さうとするを、覺善は捨臺詞にて遮る。下の方より以前の町人五郎藏再び走り出づ。)

五郎藏。(窓の外より叫ぶ。)これ、これ、みんな聞かつしやれ。こつちで傲訴するまでもなく、たつた今、徳政の御觸れが出た。

(皆々おどろく。市兵衛はそこに置きたる刀を持ちて、あわて、窓の口へゆく。)

市兵衛。これ、ほんたうに徳政の御觸れが出たか。

五郎藏。ほんたうぢや。ほんたうぢや。源左衛門殿。早う鐘を撞いて知らしてくだされ。

(云ひすて、五郎藏は引返してゆく。)

與次郎。こりやありがたい。節季師走に徳政とは、生き返つたやうな心持がする。

佐助。早う歸つて、噂やおふくろにもよろこばせて遣らぬばならぬ。どなたも御めん下され。

おそよ。

源左。

源八郎。

源左。

源八郎。

おそよ。

おそよ。

市兵衛。

源八郎。

市兵衛。

源八郎。

市兵衛。

源八郎。

(ふたりは早々に挨拶して、下のかたに去る。市兵衛は呆れてぼんやりしてゐる。雪又ふり出す。)

(勇み立つ。) さあ、ありがたい徳政の御觸れが出たからは、ちつとも早う知らせの鐘を……

さあ。撞かねばなるまいか。(起ちながら考へてゐる。)

撞くは知れたこと。なんの猶豫がござらうぞ。む。兄上が撞かずば、それがしが代つて撞く。(起ちあがる。)

おまへが撞くか。

撞きます。おそよ、手をひいてくれ。

あ、あ、あ。

(おそよは源八郎の手をひきて行きかゝれば、市兵衛は氣が注いで、あわて、取越る。)

あゝ、もし、待つてくだされ。わしはまだ二三軒懸取りにゆかねばならぬ所がある。その鐘を撞くのは、もう少し待つてくだされ。この通りぢや。(片手で拜む。)

(源八郎は無言にて、市兵衛の手より刀をうばひ取る。)

あ、これ、どうさつしやる。

(あざ笑ふ。) 徳政の御沙汰を知らぬか。貸も借も一切帳消しぢや。

でも、鐘の鳴らぬうちは……。

え、邪魔するな。

(市兵衛が絆はるを、源八郎とおそよは突きのけて表に出づ。雪ふる。)

おそよ、早うおいでなされませ。

(おそよは源八郎の手をひきて、向ふへ走り去る。)

(うる／＼する。) こりや飛んでもないことになつてしまつたぞ。

(しづかに。) 市兵衛どの。弟めはなんと申さうとも、一旦こなたに渡した刀、かならず取戻して進めるほどに、御心配は無用ぢや。

きつと取戻してくださいさるか。

源左。

源善。

市兵衛。

源左衛門どのが請合はれたからは、よもや間違ひはござるまい。

それは先づそれでよいとしても、まだほかにも氣がかりのことが色々ある。なにしろこゝに斯うしてはゐられぬ。

(市兵衛おちつかぬ體にて表へ行かうとすれば、今まで倒れてゐたる行光は片手に梅の枝を持ちて

行光。
市兵衛。

よろ／＼と起きあがり、片手に市兵衛の袖をつかむ。
これ、約束ぢや。わしを連れてゆかぬか。
え、それどころかい。

行光。

(突き放して表へかけ出せば、行光も追つて出て、再び市兵衛をとらへる。市兵衛はあせつて行光を突き倒し、向ふへ走り去る。鐘の聲きこゆ。)
お、鐘が鳴る。鐘が鳴る。いつも聞くよりも冴えた音色がする。わしにも一つ撞かしてくれ。こゝによい撞木がある。

(行光は梅の枝をかざして、よろめきながら向ふに去る。鐘の聲つゞけてきこゆ。源左衛門と覺善は黙して鐘を聴く。)

源左。
覺善。
源左。

(しばらくして) 鐘が鳴つた。
鐘が鳴つた。(持つたる珠数を落とす。)
あの鐘も一度では済むまい。まだ幾たびか鳴らうも知れぬ。
(表の雪はますます烈しく、鐘の聲つゞけてきこゆ。)

—幕—

遊女物語

大正六年三月作。

大正六年五月。帝國劇場初演。

初演當時の主なる役割——荒島小助（澤村宗十郎）億住源十郎（守田勘彌）十内（中村東藏）露霜尼（河村菊枝）定家（村田嘉久子）夕波（小林延子）濱荻（初瀬浪子）など。

初演當時の名題は『武家義理譚』

登場人物——浪人荒島小助。出羽の武士億住源十郎。奴十内。露霜尼。下の關の遊女定家。夕波、濱荻。ほかに茶店の娘。魚賣の女。仲居。漁師。旅人など。

第一幕

長門の國、下の關海岸。下のかたに葎養張の茶店ありて、床几二脚ほど置く。所々に柳の立木あり。正面には海近くみゆ。

（時は元祿初年の春の末。陰りし日の午後。濱の女お石、おなみは筒袖脚絆にて頭に魚籠をのせて立つ。茶店のむすめお春は床几の上の茶碗などを片附けてゐる。浪の音しづかにきこゆ。）

お春。

お石。

けふは商ひがござんしたかえ。

朝から在所の方までまはつて、いゝ鹽梅に荷が軽くなりました。

遊女物語

お浪。小さい鰈が二匹ばかり賣れ残つてゐるが、やすく買つてくださらぬか。
お春。賣れ残りでは何うで碌なものではござんすまい。(笑ふ)
お浪。どうして、どうして、このやうにびち／＼と生きてゐるのぢや。

(お浪は頭の籠をおろして、生きたる鰈をつかみ出す。鰈はお浪の手より跳れ出すを、お浪とお石はあわて、押へる。)

お石。この通り生きてゐるのぢや。一匹十五文づつに賣りませう。晩のお菜に買つてくだされ。
お春。十二文に負けるならば、一匹買つて置きませうか。

お浪。ついでにもう一匹買つてくだされ。小さい方は十文にまけて置きませう。
お春。わたしはひとり者ぢや。二匹の魚は要りませぬ。

お石。嘘ぢや、嘘ぢや。家にはもう一人待つてゐる人のあることを、わたし等はちやんと知つてゐますぞ。(笑ふ。)

お春。あれ、お前方はわたしを弄りに來たのか。それならば一匹も買ふことぢやござんせぬぞ。
お浪。まあ、堪忍して買つてくだされ。

お春。忌ぢや、忌ぢや。(わきを向く。)

お石。まあ、さう云はずに買つてくだされ。

(ふたりは鰈をつかんでお春に突き付ける。)

お春。あれ、氣味の悪い。止しなさんせ。

(お石の押退けるはづみにお石の持つたる鰈は再び地におちて跳れる。お石はあわて、拾つてゐる。上のかたの柳のあひだを縫つて、露霜尼出づ。尼は廿七八の美しく氣高き女。そぎ髪にて笠を背負ひ、手には珠數と托鉢を持つ。)

露霜尼。あゝ、もし、その魚は賣物でござりますか。

(三人は見かへりて形をあらため、お石とお浪は魚を籠に入れる。)

お春。お、露霜さま。托鉢でござりまするか。

露霜尼。その鰈が賣物ならば、わたしに賣つてくださらぬか。

お石。え、お前様がこの魚を買ふと云はしやりますか。(おどろく。)

露霜尼。(うなづく。)買ひませう。その魚はまだ生きてゐる様子ぢや。念佛をとなへて聞かせて、海へ放して遣ります。

お浪。なるほど、評判の尼様だけあつて、まことに奇特のお心がけぢや。さう云ふことならわた

お石。し等も、ふだんから生物を扱うてる罪ほろほしに、いつそこの魚を尼様に進ぜようか。さうぢや。いつそ無銭で差あけた方がよいかも知れぬ。もし、尼様。この二匹の鱈はおまへ様に進ぜまする。

露霜尼。お前方の商ひ物をたゞ貰うては心苦しい。わたしが心ばかりの値を拂ひます。これで不承してくだされ。(托鉢より小銭を出す。)

お石。いえ、いえ、それには及びませぬ。

お浪。お前様から値を貰うては、わたし等の心がすみませぬ。餘計な口出しをするやうなれど、ふたりの衆もあのやうに云うてますれば、たゞお納めなされたが宜しうござりませう。

露霜尼。では、このまゝに貰うて置きます。

(下の方より遊女定家、廿歳位。仲居おそよを連れて出で、この問答を聴いてゐたりしが、この時つか／＼と進み出づ。)

定家。露霜どの。よい御功德をなされましたな。

お、定家どのか。御挨拶は先づあとにして、些とも早うこの生物の苦患を救うて遣らね

ばなりませぬ。その籠をこれへ。

お石。あい、あい。

(二人は籠をさへげて露霜尼の前にゆく。尼は籠にむかひて念佛を唱へる。)

露霜尼。さあ、早う海へ放してお遣りなされ。

かしこまりました。では、御免くださりませ。

(お石とお浪は籠を持ちて上のかたに去る。露霜尼は床几に腰をかける。定家も腰をかける。)

露霜尼。いつも御繁昌で結構でござりますな。

ほんにお前様はお羨ましい。もとはわたし達とおなじ流れの身が、今ではむかしと打つて變り、かうした清い姿になつて、おこなひ澄ましてゐらるゝとは……。わたしはまだ二年あまりの年季のある身の上、たとひその年が明けたからと云うて、いかに我身を定めてよいか、些ともおちついた考へが浮びませぬ。

露霜尼。いや、それもこれも銘々の心柄とはいふものゝ、所詮は定まる宿世の縁でござります。同じながれの身の上でも、わたしのやうに様をかへて、佛に一生仕へる者もある。あの濱荻どのは心が亂れたとやら。

定家。

露霜尼。

定家。

露霜尼。

定家。

露霜尼。

定家。

露霜尼。

定家。

お春。

露霜尼。

あのお人は魂がぬけたやうに、あけても暮れても笛ばかり吹いてゐます。それ、そのやうに戀に狂うて、たましひを失ふ人もある。またわたしのやうに、よるべ定めぬ浮草の、水のまに／＼漂うて、その日その日を夢と送つてゐる者もある。

それが浮世ぢや。とりわけて傾城遊女の勤めの身は、色々に変つた姿を見するが、むかしも今もおなじ習。おもへば悲しい哀れなことでござります。

あゝ、因果なこととござりますな。(ちつとなる。)

して、けふはこれから何處へ……。

阿彌陀寺へ御参詣にまゐります。お前様もあのお寺へ日参をなさると聞きましたが……。朝参りと夜まゐりを缺したことはござりませぬ。お前もせい／＼御信心をなされたがよい。では、もうこれでお別れ申します。(起上る。)

では、またお目にかゝりませう。

もうお歸りでござりまするか。

これから町の方へ修行にまゐります。

おそよ。

お春。

定家。

おそよ。

定家。

おそよ。

おそよ。

夕波。

おみつ。

定家。

(露霜尼は會釋して下のかたに去る。定家はちつとあとを見送る。)

むかしとは違つてあの尼様も、尊い氣高いお人になりましたな。

以前はやはり勤めの女子ぢやと聞いてゐますが、いまでは生佛か何ぞのやうに、世間からも敬はれてをります。

わたし等のやうな心の浅い者には、所詮あのお人の眞似はできぬ。(嘆息する。)

それにしても、源十郎様は遅いことでござりますな。

もう先へ行かれたのではあるまいか。

そんな筈はござんすまい。(下のかたを見る。)

(下の方より億住源十郎、廿二三歳の武士。定家の妹女郎夕波と仲居おみつを連れて出づ。)

どこで路草を食つてゐさんした。遅かつたではござんせぬか。

海端を一廻りして行かうと云はんすので、わたし等が御案内をして來ました。

(源十郎に。)

お前もまあそこへおかけなさんせ。

(源十郎は床几にかける。お春は茶を汲んで出づ。)

奴どのは何うなさんした。

源十郎。

彼奴また船場へでも行つたのであらう。わしはこゝに待ちあはせてゐるほどに、そち達は構はずに先へゆけ。わしはやがて後から行かうぞ。

定家。

なぜお前、わたしと一緒に來なさんせぬ。

源十郎。

わしは些とあの奴に用がある。まあ、先へ行つて待つてをれ。

定家。

そんならわたし等は一足先へ……。

夕波。

お寺の前で待つてゐますぞ。

定家。

(定家、夕波、おそよ、おみつの四人ゆきかけて、定家はあとへ戻る。)

源十郎。

もし、源十郎どの。あの奴どのは出船を聞き合はせに行つたのではござんせぬか。

定家。

さあ、そんなことかも知れぬよ。

源十郎。

今夜にも明日にも出船があつたら、おまへはもう出立するのでござんすかえ。

源十郎。

なにをいふにもあの十内めが毎日うるさく催促するので、わしもほとく持餘してゐるのぢや。が、まあ、その時は其時のこと。今は今で面白く遊ばうではないか。

定家。

さういふ口の下から一日も早く、こゝを立退かうとしてゐるのではござんせぬか。あの奴どのも憎らしい。なぜそのやうにお前をせき立て、向う地へいそぐのでござんせうな。

夕波。

わたしも十内どのに其譯を聞いたらば、女子の癖に用でもないことを詮議するなど、怖い眼をして睨まれました。

源十郎。

(笑ふ。)
可笑さうに十内めも飛んだ憎まれ者になつたなう。まあ、料簡して早う行け。

おそよ。

そんなら定家さん。

おみつ。

夕波さん。

定家。

みんなも一緒に來ませうぞ。

源十郎。

(定家を先に四人は上のかたに去る。源十郎はあとを見送る。)
うかくしてはゐられぬ身の上と知りながら、やはり未練の羈絆にひかれて、一日のばしに日を送る。おれも思はぬ不孝者になつた。

お春。

旦那様。まことに相済みませぬが、今のうちに水を汲んでまゐります。

源十郎。

よい、よい。わしが店の番をしてゐて遣る。

お春。

すぐに戻つてまゐります。

十内。

(お春は手桶をさげて下の方に去る。これと引き違ひに、奴十内、廿五六歳、足早に出づ。)
旦那様。これにおいでなされましたか。

源十郎。お、十内。どこへまゐつた。

十内。出船を聞き合せにまゐりました。

源十郎。大方さうであらうと思つた。船はまだ當分出まいな。

十内。いえ、幸ひに今夜の出船がござりまする。このごろは風並が直つたので、あしたも明後日もつゞいて出ると聞きました。

源十郎。(うなづく)では、あすも明後日も船は出るな。

十内。あ、もし、もし、そのやうな一寸逃れはなりません。向う地の西國までは、わづかの路程

でも海の上、明日はまたどのやうに風が變らうも知れませぬば……。

源十郎。今夜すぐに立てと云ふか。うるさい奴ぢや。

十内。いくら煩さいと仰しやつても、こればかりは申上げねばなりません。もし、旦那様。

源十郎。(うるさうに)なんぢや。

十内。今あらためて申すまでもないこと。親旦那源太夫さまは出羽の庄内でも人に知られたお身

柄、去年の五月、おなじ家中の若侍荒島小助の手にかゝつて、やみく御最期をお遂げなされました。小助は大阪表にしるべがあるとやら、大方そこを指して落ち延びたものと、

かたき討の願ひもとゞこほりなく濟ませて、すぐにそのあとを追ひかけましたが、京大阪には手がかりもなく、それからそれへと尋ねまはつて、この長門の浦まで下りました。

源十郎。これ、これ、かたきを狙ふ身は仇を持つ身も同じこと、いづこに敵の親類縁者があるまいものでも無し、往來中で滅多なことを云ふまいぞ。その意見は今更聞くにもおよばぬ。望

十内。ある身がいつまでも一つ所に足を止むるなと云ふのであらう。

それほど御存じでござりますなら、十内もくどうは申しますまい。唯今も申す通り、けふ

源十郎。の夕方には筑前通ひの便船が出ると申せば、これからすぐにお支度なされて……。

さりとは餘りの性急ぢや。よい、よい。そちがそれほどに申すならば、明日はかならず出

立いたさう、今夜だけは堪へてくれ。

十内。はあ。

源十郎。不承知か。

いえ、左様ではござりませぬが……。では、旦那様。今夜は先づよんどころないと致して

源十郎。も、明日はきつとお立ちなされまするか。

はて、くどい奴。源十郎、うそは云はぬぞ。

十内。そのお約束をお忘れなされますな。

源十郎。(焦れる)同じことをいつまでも申すな。(床几を起つ)十内、茶代を置いてゆけ。

十内。(云ひすて、源十郎はつかくと上の方に去る。十内はあとを見送る。)

まだお年若ゆる無理もないが、女に心をひかされて、いつまでうかくしておいでなさることやら。これでは國許の御親類方に對しても、お供をして来たこの奴の役目が立たぬ。どんなに御機嫌を損じても、あすはきつとお連れ申さにやならぬ。これ、女子衆。(お簀のぞく)お、誰もぬぬのか。では、茶代はこゝへ置いてゆけ。お、旦那様は足が早い。こりや餘程おくれてしまった。

(十内は茶代を置いて、上のかたに急ぎ去る。下の方にて法螺の聲きこゆ。お春は手桶をさげて出づ。)

お春。お、向う地から船が着いたとみえる。

お春。(下のかたより男女の旅人大勢、思ひくのこしらへにて出で、茶店のまへを歩き過ぎる。)(呼ぶ)お休みなされませ。お寄りなされませ。

(浪人荒島小助、廿五六歳、旅姿にて笠をかぶり、下の方より出づ。)

お春。お休みなされませ。まだお早うござります。

小助。(床几に腰をかける)茶を一杯汲んでくりやれ。

お春。あい、あい。(店の内に入りて、すぐに茶を汲んで来る)お前様はどちらからお越しなされました。

小助。わしは長崎の方から来たが、この浦はいつも繁昌ぢやなう。

お春。出船入船が多いので、おかけさまで繁昌して居ります。

小助。わしがこゝを通つたのは、去年の秋であつたが、この海邊の春の眺めもまた格別ぢや。(笠をのぞく)お、それで思ひ出しました。お前様は去年の秋、こゝに暫らく御逗留なされたお武家様でござりましたな。あの定家さんとお馴染の……。

小助。お前はそれを知つてゐたか。なるほど定家とこゝへ来て休んだこともあつた。して、その定家は近頃どうして暮してゐる。やはり全盛かな。

お春。はい。こゝでは一二をあらそふ全盛でござります。今夜も定めて久しぶりでお尋ねなさるのでござりませうな。

小助。いや、さうはならぬ。今度はこゝを素通りして、次の宿まで急ぐつもりぢや。

お春、
小助。

定家さんがそれを聞いたら、さぞお怒みなさんせうに、なぜ尋ねてはおあけなされませぬ。
(思案する。尋ねたいとは思へども……) いや、いや、其折とは違つて、今では尾羽うち枯らした瘦浪人、おちぶれた姿を女に見せたくもない。いつそ逢はぬがましであらうよ。

お春、
小助。
先づ大阪を目ざす積りぢやが、それも何うなることやら確とはわからぬ。もしも定家に逢ふたらば、去年の秋の侍が、かけながら無事を祈ると云うてゐたと傳へてくりやれ。

お春。
かしこまりました。
(お春は氣の毒さうに小助の姿をながめてゐる。上の方より夕波出で来り、茶店のまへを通りながらお春に聲をかけて行く。)

夕波。
お春さん。さきほどはお邪魔をしました。

夕波。
お、ほんにさうぢや。おまへは小助殿……。いつ戻らんした。
(餘儀なく笠を取る。お、夕波か。久しう逢はなんだなう。今もこの娘から聞いたが、定家も變ることがなうて重疊ぢや。)

小助。
おまへも御無事で嬉しうござんす。丁度幸ひ、姉様はお客に連れられて、あすこの茶屋に來てござんす。今すぐに呼んで來ますほどに、しばらくこゝに待つてゐて下さんせ。(上の方へ引返さうとする。)

夕波。
いや、いや、わざ／＼呼ぶには及ばぬ。なまじひに逢うては未練の種ぢや。

小助。
でも、わたしが叱られます。ちよつと待つてゐてください。お春さん、お前もこのお人を逃がさぬやうに番をしてゐてください。よいかえ。
(夕波は上のかたへ走りゆく。)

小助。
いや、これは迷惑。わしはすぐに立つといたさう。(茶代を置く。)

お春。
まあ、お待ち下さりませ。夕波さんがあれほど頼んで行つたものを、お遣り申すこととはなりません。(袖を捉へる。)

小助。
くどいやうぢやが、逢うては迷惑。おとなしく放してくれ。

お春。
いえ、いえ、さうはなりません。
(小助は振切つて行かうとするを、お春はひきとめてゐる。上のかたより定家は急ぎ出づ。)

で逢はれまいと諦めてゐたに、やつぱり縁が盡きなんだ。

小助。

おもへば月日は早いものぢや。去年そなたに別れた時には、こゝらの柳も散つてゐたが、その柳が又あのやうに青くなつた。

定家。

その半年のあひだの積る話、聞きたくもあり、聞かせたくもあり、今夜はどうでも遣るこ
とぢやござんせぬぞ。

(上の方より夕波出づ。)

夕波。

もし、姉様、あちらのお客がもうお立ちぢやと云ひまする。

定家。

はて、忙しない。そんならお前はこなたを案内して……。かならず逃がしてはならぬぞえ。

夕波。

あい、あい。しつかりと押へてゐまする。

(上の方よりおそよ出づ。)

おそよ。

定家さん、早う、早う。

定家。

あい、あい。今すぐに行きまする。

夕波。

(定家は又引返して去る。小助はそのうしろ姿を見送りて床几を起つ。)

夕波。

もし、お前、逃げてはなりませんぞ。

小助。

目にも見えぬ縁につながれて……。

夕波。

え。

(小助は無言にてふら〜と床几に腰をおろす。夕波とお春は顔を見あはせる。ゆふ暮の鐘。浪の音。)

幕

第二幕

(一)

下の關の揚屋の座敷。縁付の二重屋體にて、正面の上のかたに床の間あり。つゞいて出入りの襖。縁は下の方へ折りまはして、こゝにも開き戸の出入口あり。庭には敷石、石燈籠などありて、上のかたには散り残りたる遅櫻あり。ほかにも葉櫻の立木あり。

(前幕とおなじ日の夜。座敷には燭臺を點し、杯盤をならべ、億住源十郎と遊女定家とが酒宴の最

申。仲居おそよ、おみつが酌をしてゐる。定家の妹女郎夕波が琴をひき、遊女濱萩は宴れたる姿にて縁に腰をかけて笛を吹く。

夕波。

(やがて琴を弾き終る。さぞ御退屈でござんしたらう。)

源十郎。

いや、けふは一段の聽事であつた。それ、杯を……。

おそよ。

あい、あい。

(おそよは夕波に酌をする。夕波は會釋して飲む。)

源十郎。

そちらの濱萩とやらにも杯を遣つたらどうぢや。

おみつ。

(濱萩のそばへ行く。おまへも飲むかえ。)

(濱萩は無言にて頭を掉る。)

源十郎。

先刻から見てゐると、その女は啞かつんほうか、一向に口をきかぬやうぢやな。

定家。

(氣の毒らしく。)いえ、啞でも無し、つんほうでも無し、どこと云つて常の人に變つたところはおごさんせぬが、あんまり思ふことが胸にあまつて、物が云へぬやうになつたのでござんせう。

夕波。

ほんにお氣の毒な……とでござんすな。

源十郎。

それはまたどうした譯な。

夕波。

末の末までもと云ひ交はした、大事の男が親御の勘當うけ、先月の初めから行方が知れぬので、この頃は明けても暮れても、うつとりと、まるで夢でも見てゐる人のやうな。

定家。

それでも男から貰うたあの笛は、よるも晝も身を放さずに、しつかり抱へてゐるいぢらしさ。あゝして笛を吹いてゐるあひだは、そのあはれな笛の音と一緒に自分のたましひが溶けて流れて、むかしの夢が胸に通ふのでござんせう。戀はあはれと云ふなかにも、よるべ定めぬ遊女の戀ほど、世にも哀れに慘らしいものはござんすまい。

源十郎。

なるほど聞けば哀れな話ぢや。これ、濱萩とやら。男のかたみといふ其笛を心ゆくまで吹いてをれ。その笛の音にひかされて、男はやがて戻つて來ようぞ。

(濱萩は無言にて再び笛を吹きはじめる。)

おそよ。

はて、さういつまでも吹いてゐては、却つてさうくしい。

おみつ。

もうよい程にしなさんせ。

(濱萩は矢はり笛を吹いてゐる。)

おそよ。

情の強い人ぢや。もう止めなさんせと云ふに……。

おみつ。さうして、もうあつちへおとなしく行きなさんせ。

(ふたりは縁先へ出で、濱萩を引立てようとする。)

定家。はて、そのやうに酔うしなさんすな。これ、夕波さん。おまへは濱萩さんと仲好しぢや、おとなしく宥めて連れて行きなさんせ。

夕波。あい、あい。(濱萩のそばへゆく。) さあ、わたしと一緒に來なさんせ。

(夕波も縁より降りて先に立てば、濱萩はおとなしく起ち上りて、やはり笛を吹きながら、夕波と一緒に上の方へあゆみ去る。仲居等は夕波の琴を片附けて、床の間に立てる。鐘の聲きこゆ、定家は縁先に出で濱萩のあとをぢつと見送る。)

定家。ほんに思へばいぢらしい。けふは人の身、あすが誰が身の上にならうやら。

おそよ。ひよんなお話でお座敷がさびしくなりました。

おみつ。さあ、氣をかへてわつさりとお飲みなされませ。

おそよ。(銚子を把つて。) およ、いつの間にかお銚子が軽うなりました。

おみつ。わたくしもお肴を見繕うてまゐりませう。しばらくお待ちくださりませ。

(おそよとおみつは會釋して奥に入る。)

源十郎。これ、定家。なにをうつかり。そなたもあの遊女と同じやうに昔の戀人の夢でも見てゐる

のか。(笑ふ。)

定家。(もとの座に戻る。) ほゝ、なにを云はんすやら。お前といふものゝ傍にゐて、むかしの夢よりも今の現、それに魂のあるたけを打込んで、ほかには何をおもふ暇もござんせぬ。

源十郎。したが、もういつまでも斯うしてゐられまい。そなたも薄々知つてゐる通り、奴の十内めがやかましう催促して、けふは立て、あすは立てと口癖にいふ。思へばそれにも道理はある。

定家。そんならどうでもお前は、もうお立ちなさんすのかえ。

源十郎。(名残惜げに。) 立たねばなるまい。少し尋ぬる人があつて、これから長崎へゆかねばならぬ。すぐ向ふ地へ渡る筈を、つうかくと引き止められて、けふで丁度十日になる。われを忘れて暮してゐると、月日のたつのは早いものぢや。(さびしく笑ふ。)

定家。きのふのやうに思つてゐるに、もう今日で十日とは、ほんに月日は早いもの。して、いつ頃またお上りでござんすえ。

源十郎。さあ、それは判らぬ。二月やら三月やら、半年やら一年やら、ひよつとすると再び戻れぬ

かも知れぬ。(や、愁はしげに云ひて、また氣を替へる。) いや、戻る。きつと戻つて来る。よろこび勇んで戻つてくる。その時にはまた逢はうよ。

定家。

それにしても本意ないお別れ、お名残惜しうござりまする。出船入船いとまなき、港に巢を組む遊女の習、逢ふが別れのはじめとは豫ね覺悟はしてるながら……。

源十郎。

いや、源十郎は望のある身ぢや。立ち際に涙を見せてくれるな。

(縁側の下のかたより奴十内出づ。)

十内。

旦那様。

源十郎。

おゝ、十内か。まあ、坐れ。今も定家にわけを話して、いよくあすは出立と決めたぞ。

十内。

いや、その儀につきまして、ちとお耳に入りたい儀がござりまする。これ、定家どの。氣の毒ながらこなたは些との間こゝを退いてください。

定家。

なんぞ内證の御用でござんすかえ。

十内。

(急いで。) はて、何でもよいから、あつちへ、あつちへ……。

定家。

あい。あい。(心残して奥に入る。)

源十郎。

(少しく不興らしく。) なんぢや、十内。女を遠ざけて何の用ぢや。早くいへ。

十内。

(いざり寄る。) もし、旦那様。親御様のかたきが知れましたぞ。

源十郎。

(屹となる。) なに、仇が知れたと……。して、それはいづこに居る。

十内。

今夜こゝへ泊りあはせました。

源十郎。

たづぬる仇の荒島小助が恰もこゝへ泊りあはせしは、父上尊靈の導き、かれに取つては運の盡きぢや。十内、たしかに見とゞけたな。

十内。

決して見損じはござりませぬ。

源十郎。

むゝ。取逃がしては一大事。すぐに踏ん込んで勝負を遂げん。案内いたせ。

十内。

はつ。

(二人は勢ひ込んで下の方へゆかんとする時、縁側傳ひに定家出づ。)

定家。

あ、もし、お前方は押取刀でどこへ……。

源十郎。

仔細は云うてるるひまがない。退け、退け。

(突き退けて行かんとするを定家は遮る。)

定家。

仔細は大方聞きました、お前はかたき討でござんせうがな。

源十郎。

むゝ。

定家。そのかたきの名は荒島小助と云はんしたな。その小助どのはわたしの客人。

二人。え。

定家。なんほ親御の仇でも、こゝで討つてはお前のお爲になるまい。場所もあらうに遊女屋で、武士がかたきを討つたとあつては、世間の聞えもござんせうぞ。

十内。なるほどこゝは場所が悪い。

源十郎。

とあつて、見逃すことはならぬ。なんとかして仇を表へおびき出し、立派に名乗つて討つ工夫が……。 (かんがへる。) さりとて我々が迂闊に立ち騒いで、取逃がしては悔んで返らぬ。この上は定家、そなたの智慧を借りるよりほかに工夫はない。荒島小助はこの源十郎が父のかたきぢや。手引きして討たしてくれ。頼む、たのむ。

十内。このあひだから旦那様に心中立して、勤めの女にも誠はあると立派さうに云つたこなたではないか。その誠を見するは今ぢや。

源十郎。

その手引はならぬと云ふか。

(二人は詰め寄る。)

定家。

(思案して。) いかにも御手引いたしませう。

二人。

む。

定家。

が、今すぐと云ふ譯にはまゐりませぬ。どうで一泊りの客。あすは明六つを合圖に立たせますほどに、お前方は先へまはつて……。

十内。

店の者の話を聞けば、さつき船場からあがつた客とやら。中國筋へ上るに相違ござりますまい。

源十郎。

町はづれの松原に待受けて、名乗りかけると致さう。これ、定家。あけ六つの合圖を忘るるなよ。

定家。

心得て居ります。それにしても時刻が早い。急くところではござんせぬ。

源十郎。

さつき聞いたはまだ四つぢや。今宵ひと夜が待侘びしい。

十内。

かたきの小助を取逃さぬやうに、わたくしが屹と見張つて居ります。

定家。

いえ、いえ、お前方がそこらをうろ／＼して、かたきに覺られては事の破れ、何事もわたしに任せてお置き下さりませ。

源十郎。

あすの朝まで取逃がさぬやうに、よく氣をつけてくりやれ。

定家。

御念には及びませぬ。そんならわたしはあつちの座敷へ行つて、酒をすゝめて盛潰し、夜

のあけるまで竊と寐かして置きませう。

源十郎。

それもよからう。夜のあけるまでは生洲の魚ぢや。かへすくも覺らるゝな。

定家。

それも心得て居ります。

(定家は縁傳ひに立去る。)

十内。

あゝして請合うて行つたものゝ、いつはりの多いは遊女の習。一夜泊りの客の名を荒島小助と知つてゐるも不思議。ひよつとすると前々からの深い馴染かも知れませぬ。こりや滅多に油断はなりませんぞ。

源十郎。

併しあのやうに立派に請合うたからは、よもや裏切をいたすやうな。

十内。

いや、そこが御油断。勤めの女の云ふことを一から十まで真に請けては……。

源十郎。

(むつとして。)よい、よい。判つた、判つた。いつまでもくどく申すな。

(奥よりおそよとおみつは銚子と肴を運び出づ。)

おそよ。

どうも遅くなりました。

おみつ。

して、定家さんは……。

源十郎。

定家はほかの座敷へ行つた。十内、幸先を祝うてそちも飲め。

十内。

はあ。

(源十郎はさかづきを取りて、おそよに酌をさせる。おみつは十内にも杯をさして酌をする。)

(11)

同じく揚屋の座敷。平舞臺にて、上のかたに床の間。つゞいて遊ひ棚。上の方に障子屋敷あり。下のかたに出入りの障子あり。障子の外は廊下のこゝろにて、手すりの付きたる縁側の外には庭の泉木、木立などみゆ。

(座敷のまん中には燭臺を點し、下のかたの壁には屏風を立てまはし、燭臺のそばには火桶を置き、遊女夕波が坐つてゐる。笛の聲きこゆ。)

夕波。

また濱荻さんが笛を吹いてゐるやうぢやが、座敷のお客を投つて置いて、いつもながら夢のやうに迷ひあるいてゐる。親方さんに叱られねばよいがなう。

(下の方より廊下づたひにて定家出づ。)

定家。

(障子をあける。)夕波さん。眠かつたであらうな。

夕波。大層早うござんした。

定家。やうく寐かし付けて來ました。して、小助どのは……。

夕波。(障子屋體を指さす。)あれによく寐入つてござんす。起しませうか。(起ちかゝる。)

定家。いえ、いえ、それには及びませぬ。今夜もやがて四つであらう。おまへも座敷へ歸つて寐

たがよい。十内殿が待つてゐようぞ。

夕波。あれ、あのやうなことを……。

定家。あの奴殿の無骨なところが、男らしうてよいと云うたではないか。(微笑む。)

夕波。そのやうに弄つて下さりますな。なにしろわたしがこゝにゐてはお邪魔、もうあつちへ行

きまする。

定家。早う行きやれ。行きたいであらう。さあ、さあ、早う。(笑ひながら夕波を無理に障子の外へ押

遣る。)姉さま、覚えてゐなさんせ。

夕波。(夕波も笑ひながら下のかたへ去る。定家は再び障子をあけて廊下をうかゞひ、そつと座敷に戻る。)

定家。冗談まじりにあゝして追ひ遣つてしまつたが、なか／＼笑つてゐるところでない。苦勞と

いふ苦勞が一度に降つて湧いて、こつちの胸は引つくり返るやうな。

(定家は屹と思案して上の方へゆき、障子の外より聲をかける。)

定家。小助どの、小助どの。おゝ、なんにも知らずに寐入つてゐるさうな。

(定家は障子をあけて内に入り、屏風のなかに寐てゐる小助を起して、座敷のまん中に連れて出る。)

小助は寢巻のまゝにて火桶の前に坐る。)

小助。もう夜が明けたか。

定家。まだ四つ頃でござんせう。

小助。明六つになつたら起してくれと頼んで置いたに、なぜ夜なかから早う起した。ちつとも早

く追ひ出したいか。(笑ふ。)

定家。それには色々の譯のあること。もし、小助どの。(すり寄る。)おまへは億住源十郎といふ人

を知つてゐるさんすかえ。

小助。おゝ、知つてゐる。その源十郎がなんとした。(少しく形をあらためる。)

定家。その源十郎といふ人は、お前をかたきと狙つてゐるのでござんすかえ。

小助。たしかに仇と狙つてゐる筈。なにを隠さうこの荒島小助は、一年以前に出羽の庄内に於て、

かれが父の源太夫を討ち果し、それより故郷を立退いて、長崎の知己をたづねて下る途中、こゝに一夜の宿りを求めしが、そなたと馴染む初めであつた。

定家。

さつきは詳しく聞きませなんだが、その長崎からなぜまた引返して上られました。

小助。

さあ、そなたの情にひかされて、半月あまりもこゝに逗留。いつまで遊んでゐらるゝ身でもなければ、惜しき名残を振切つて、そなたと別れたは去年の秋ぢや。

定家。

お前の出船を見送りに行つた朝は、わたしの涙と同じやうな、秋の雨がほろ／＼と降つてゐました。

小助。

それから向う地へ打渡つて、長崎の果まで下つてゆけば、尋ねる人はゆくへ知れず。こゝに二月、かしこに三月と、さまよひ暮すうちに路銀も盡き、春は来れども花さかぬ我身の

定家。

秋のわびしさに、再びす／＼取つて返し、浪華は繁華の地と聞くまゝに、そこにたつきを求めんと、かへり着いたる長門の浦、春のゆふ風身にしみて昔の戀が忍ばしく、又もやこゝに一夜の假寝。しかし今度こそは長居はならぬ。ゆくてを急ぐ身の上なれば、あすは何うでも立たねばなるまい。離れては逢ひ、逢うては離れ、定めないのが浮世であらうよ。もう逢はれまいと諦めてゐた、おまへに再びめぐり逢うて、お名残惜しい一夜のわかれ、

引止めたいは山々なれど、無理にもお前を立たせたい。と云ふはほかでもござんせぬ。お前をかたきと狙うてゐる億住源十郎といふお人が、今夜こゝに泊りあはせて……。

小助。

(おどろく) なに、億住源十郎がこの揚屋に今夜泊りあはせてゐるとか。

定家。

あい。十内といふ強さうな奴どのと二人で……。

小助。

その十内も見識つた奴。して、その源十郎が小助をかたきと狙ふことを、そなたはどうして知つてゐるのぢや。

(笛の聲きこゆ。定家は起つて入口の障子をあけて外をうかがひ、再びもとの座にかへる。笛の聲つゞけてきこゆ。)

定家。

お前がそれと心づかぬ間に、奴殿は廊下でちらりと見つけ、旦那の源十郎殿にすぐに注進、

小助。

わたしがお前の座敷を勤めてゐるのを知つて、さあ手引きして仇をうたせと、退引ならぬ手づめの掛合に、わたしも途方にくれました。

それで判つた。もうそのあとは聞くまでない。やみがたき武士の意地によつて億住源太夫を討ち果したる荒島小助、今更逃げも隠れもしまい。尋常にかたきと名乗つて、時を擇ばず、場所をきらはず、相手の望むまゝに勝負せう。源十郎の座敷はいづこぢや。案内せい。

(小助は床の間の刀掛にかけたる大小を取つて、すぐに外へ立ち出でんとするを、定家はあわて、曳き戻す。)

定家。

これ、待つてくだされ。男らしいお前の覺悟、武士は斯うありたいと思ふにつけて、どうもお前は殺されぬ。

小助。

死ぬか生きるかは勝負の上ぢや。仇はかならず討たるゝものと定まつた道理もあるまい。小助が負くるか、源十郎が討たるゝか、それを今から誰が知らうぞ。

(又ゆきかゝるを定家は支へる。)

定家。

いや、お前ばかりでない、源十郎どのが討たれても、やつぱりわたしの心が濟まぬ。どつちにも過失のないやうにと、双方へ義理を立つるわたしの心を、お前もどうぞ推量して、ちつとも早うこゝを立退いてくださんせ。

小助。

いや、そりやならぬ。今更敵にうしろを見せ、小助の武士が立たうと思ふか。

定家。

もう斯うなれば何も彼も云ひまする。まあ、聞いてくださりませ。(無理に小助をもとの座へひき戻す。)一夜ながれの勤めの身にも、その時々戀はある。おまへも一度は戀しいと思つた人、今でも憎いとは思はれぬ。そのお前をかたきと狙ふ源十郎殿も、今ではやつぱり

床しい人。

小助。

む。では、源十郎もそなたの馴染か。

定家。

深い馴染といふではなけれど、十日ばかりも逢ふうちに、どうやら愛しうなりました。とあつて、お前も捨てられず。なんの因果でひとりの女に、かたき同士が馴染染めて、あやにく一夜に落合ふことか。どつちに怪我があつてもならぬと、わたしが氣を痛めるはこゝのこと。くだいやうなれど小助どの、因果な女を不憫と思つて、かたき討の返り討のと、さうした命勝負のないやうに分別して下さんせ。(泣く。)

小助。

一夜流れの身ながらも、あなたこなたに義理を立て、どちらにも怪我のないやうと祈るそなたの志、思へばあはれに慘らしい。(嘆息する。)併しそなたには遊女の義理がある、小助には武士の意地がある。そなたばかりの義理を立て、小助に意地をすてよと云ふか。

定家。

さあ、それゆゑに先刻から割ツつ口説いつ、これほど頼むがきこえぬか。明六つにはおまへを立てせる約束、それを三响ほど繰上げて、九つ前にこゝを出てゆけば、源十郎どのはもう遅れて、なかく追ひ付かれう筈はない。わづか三响の遺縁りで、誰にも怪我はごさんすまい。これ、小助どの。わたしが一生の願ひでござんす。これからすぐに支度して、

夜のあけぬ間に立つてください。

(定家は涙ながらに頼む。このうちに下の方の縁傳ひに十内出て来りて、座敷の様子をうかがひぬる。)

小助。

よい、よい。そなたがそれほどに頼むとあれば、源十郎と小助の勝負は今夜に限つたことでもあるまい。命はたがひに預け合ひ、また逢ふ時節を待つといたさう。わしが卑怯でないことは弓矢八幡も御存じであらうよ。

定家。

八幡様よりも観音様よりも、わたしがよう知つてゐます。そんならわたしの願ひをきいて……。

小助。

一旦は卑怯者と相成らうか。(餘儀なく云ふ。)

定家。

あゝ、嬉しや。これでやうく落ちつきました。兎かう云ふうちにもう九つに間もあるまい。すぐに旅立の支度を急いで……。

小助。

とは云へ、このまゝ逃げ隠れては……。どうも心が済まぬやうな。はて、また泣かして下さんな。

定家。

(定家は無理に小助を誘ひて、上のかたの障子屋敷に入る。十内は竊と入口の障子をあけて内を窺ふ。縁つたひに夕波出づ。)

夕波。

おゝ、お前はこゝにゐさんしたか。さつきから探してゐましたぞえ。

十内。

はて、やかましい。静にしる。

夕波。

さあ、こんな所にうろくしてゐると、もう九つに間もあるまい。わたしの座敷へ早うござんせ。もし……。 (袖をひく。)

十内。

えゝ、それどころかい。

(十内は夕波をつき放して、足早に下のかたに去る。夕波はあきれて見送る。上の方の障子をあけて、定家つかくと出て来り、不安らしく入口の障子をあけて夕波と顔を見あはせる。)

定家。

おゝ、夕波さんか。

夕波。

あい。(定家はほつとして障子を閉める。唄の聲きこゆ。)

鳴水鳥に、思ひの征矢をいにしへの茅葺と笹田が物語。

(夕波は唄を聴いて立つ。)

定家。

(再び障子をあける。夕波さん。まだそこにゐさんすかえ。)

夕波。 あい。

定家。 どこも寐しづまつてゐる今頃に、誰の座敷で唄ふのやら。

夕波。 藻汐さんのお客は夜明しでござんす。

定家。 夜あかして酒の相手は、さぞ辛いことであらうな。いや、藻汐さんばかりでない。勤めの

辛いは誰しも同じこと（ちつとなる。）おまへも早う座敷へ行きなさんせ。

夕波。 あい、あい。

唄。心は二つ身ひとつに、渡り苦しき生田川、いくたび思ひ返しても、うなる乙女の遺瀬なや。

（夕波は下のかたに去る。定家はあとを見送りながら唄を聴いてゐる。上の方の障子屋體より小助は旅姿に着かへて出で、おなじく唄を聴いて立つ。）

小助。

今朝は事なく別れても、わしはかたきを持つた身の上、何時いづこで討たれうも知れぬ。今度こそは一生のわかれぢや。

定家。 あれ、そのやうな不吉なことを……。なにも忘れ物はござんせぬかえ。

唄。ながれの身には取分けて、あだし仇浪よるべの岸も、定めかねたる憂きふしを、誰かあはれと夕風に、焼くや藻汐の身をこがす。

唄。胸の烟の消ゆる間ぞなき。

(11)

もとの座敷。屏風を立て廻してあり。

（下の方より庭づたひに十内走り出づ。）

十内。

旦那様、旦那様、（忙しく呼ぶ。）

源十郎。

（屏風のうちにて。）なんぢや。十内。

十内。

何ぢやどころではござりませぬ。なんほ此頃の夜が短かうても、べんくと寐そべつてる時節ではござりますまい。

（源十郎は屏風をあげると、行燈の下にて矢立の筆を取り、届書をかいてゐる。）

源十郎。

はて、さうくしい。かたき討の届書を書いてゐるところぢや。源十郎が首尾よう本意を

十内。 送けたら、そちらはこの届書を持参して、すぐに代官所へ届け出でよ。よいか。

いや、その届書などはあとにして、すぐにお立ちなされませ。かたきは我々を出しぬいてもう出立いたしましたぞ。

源十郎。 (筆をすてる) なに、小助がもう出立いたしたか。まだやうく九つぢや。明六つには間があらうに……。

十内。 さあ、それがやつぱり此方の油断でござりました。女郎めが安請合、どうやら不安に思はれましたゆゑ、竊と忍んで様子をうかがへば、女郎めは何も彼も打ちあけて……。

源十郎。 (縁先にすゝみ出る) 約束の刻限よりもずんど早めて、九つ前に小助を立てせました。

十内。 (おどろく) え、小助はもう出立したか。

十内。 たつた今、こゝを出て行きました。もし、旦那様。女に心をゆるすなと豫て申したはこゝのこと。いや、そんなことを云つてゐる場合ではござりませぬ。ちつとも早うお越しなされませ。

源十郎。 かれに限つて左様な二心はあるまいと、女に心をゆるしたは我が不覺ぢや。これ、十内。

そちはすぐに駆け付けて、かたきを途中に扼ひ止めよ。源十郎も支度してつゝいて行かうぞ。

十内。 はつ。(引返して走りゆく)

源十郎。 かへすくも憎い女め。さるにても、持つべきは家来ぢや。十内の知らせがなくなれば、あやふく仇を取逃がすところであつた。(急ぎて刀をさし、身ごしらへする)

(下の方より縁づたひに定家出づ。この體を見てはつとしたるが、わざと何げなく寄添ふ)

定家。 お前もまあ氣の短い。まだ六つまでには三响あまりの間があらうに……。まあ落着いて下るなさんせ。

源十郎。 (定家を突き倒す) え、狐め、狸め。おのれのやうな賣女にあざむかれて、大事を仕損ずる源十郎と思ふか。もうなにも彼も知つてゐるぞ。

定家。 知つてゐるならば隠しはせぬ。實は約束の時刻を早めて……。

源十郎。 え、おのれ……。

(源十郎は定家をまた蹴倒して踏みじめる)

定家。 さあ、その腹立はもつともなれど、お前をだます心は微塵もない。それには切ない譯のあ

ることでござんす。

源十郎。

それを聴いてゐる間があらうか。

(定家を蹴放して庭に飛び降りるを、定家はまた追ひすがる。)

定家。

もし、たつた一言云ひたいことが……。

源十郎。

え、邪魔するな。

(再び定家を突き放して、源十郎は一散に走りゆく。定家は脾腹をうたれて倒れしが、また起き上りてあとを追はんとし、脾腹の痛みにより、となりて縁にべつたり、腰を落とし、氣づかほしげにあつたを見送る。九つの鐘の聲きこゆ。)

—幕—

第三幕

下の關、町はづれの松原。上のかたに辻堂あり。その前後左右に松の立木多く、立木のおひだより下の關の海近くみゆ。暗き夜なり。

(上の方より夜網の漁師平次、五郎藏の二人は櫂と魚籠とを持ち、松明を照して出づ。下のかたより露霜尼は笠を背負ひ、燈籠と油壺を持ちて徐かにあゆみ來る。)

平次。

(透しみる。)お、尼御前。相變らず御參詣かな。

露霜尼。

いつもの通り、御陵の御燈籠へ油をさしにまゐります。

五郎藏。

ほんにいつもながら御奇特のことぢや。

平次。

わし等は商賣なりやこそ斯うして夜網にも出てゐるものゝ、大抵のものは高軒で夢でも見てゐる頃ぢや。

五郎藏。

時をたがへずに早起きして、御陵の御燈籠へ油をさしにまゐらるゝとは、よくくの御信心でなければならぬことゝ、わし等もふだんから感心してゐますぞ。

露霜尼。

眞夜中の九つを合圖に起きまして、先づ阿彌陀寺の御陵にまゐり、それから念佛を唱へながら、この海端を一まはりするが、わたしの夜ごとの勤めでござります。

平次。

さあ、それを奇特とも感心とも申すのぢや。

五郎藏。

暗い路には馴れてもるようが、まあ、氣をつけて行かつしやれ。

露霜尼。

ありがたうござります。

露霜尼。

(漁師ふたりは下の方に去る。時鳥の聲きこゆ。)
(空を仰ぐ。) おゝ、ほととぎすが鳴いて通る。春もいつか過ぎたと見ゆる。
(露霜尼は上の方へあゆみ去る。浪の音しづかにきこゆ。上の方より荒島小助、旅姿にて笠を深くして出づ。)

小助。

卯月はじめの空の習、けふの出先に降らねばよいが……。 (行きかけて又立止まる。) いかにか女の頼みとはいへ、卑怯に逃げかくれたと沙汰されては、荒島小助の武士が廢る。こりやもう寧ろ引返して……。 (あとへ戻りかけて又立止まる。) いや、いや、女の心づくしを無にするも不憚。やつぱり卑怯者となつて立退かうか。

(小助は思ひ返して又行きかゝる。上のかたより奴十内は息を切つて走り出で、潮明りに小助のうしろ姿を透しみて、走りかゝつて引き戻し、その行手に立塞がる。)

小助。

えゝ、狼藉いたすな。何者ぢや。

十内。

暗がりでも聲におほえがあらう。億住殿の奴十内ぢや。

小助。

おゝ、十内か。(笠をぬぐ。) もう此上は逃げも隠れもしまし。身どもは荒島小助。久振りでめぐり逢うたな。

十内。

明六つに立つと見せかけて、われ／＼を出しぬいた卑怯者。若旦那の来るまではこゝ一寸も動くまいぞ。

小助。

(あざ笑ふ。) 小助の逃げたは卑怯でない。義理と情にからまれて、恥をすてたる身どもの志、奴のおのれ等に判らうか。唯今も申す通り、小助は決して逃げもせぬ、隠れもせぬ。こゝにおとなしく待つてゐれば、早く主人を呼んでまゐれ。

十内。

わざ／＼呼びにゆかずとも、御主人はやがて追着く筈。それまでは奴が張番、おのれ屹と動くなよ。

小助。

おのれの浅い心にくらべて、いつまで人を疑ふか。押黙つて控へてをれ。
(小助は悠々と笠や荷物などを松の根におろす。)

十内。

それにしても旦那様はなぜ遅い。もうこゝへ見えさうなものぢやが……。暗くても一筋道、迷ふ筈もあるまいに、えゝ、焦つたことぢや。(うる／＼として上の方をみる。) おうい。旦那様……源十郎様……。 おゝ、おゝ、あの聲音がたしかにそれぢや。(小助に。) やい、おのれ逃ぐるなよ。

小助。

逃ぐる程ならばおのれを切つて疾うに逃ぐる。まあ、騒ぐな。さわぐな。

十内。 (小助はおちついて松の根に腰をかけてゐる。上のかたより源十郎走り出づ。)

源十郎。 お、旦那様、かたきの小助はそこに居りまする。
(透し視る。)

お、おのれは確かに荒島小助。億住源太夫のせがれ源十郎を見忘れは致すまい。さあ、尋常に勝負せい。(詰める。)

小助。 お身の父源太夫はこの小助がたしかに討つた。かたきのゆくへを追ひかけて、出羽奥州より中国筋まで、はるくたづね下りしは、流石に武士の子ほどある。尋常の勝負は望むところ、仇討か返り討か、たがひの運を試さうぞ。

源十郎。 さすがは小助、よく申した。すぐに勝負の支度いたせ。

小助。 あらためて支度におよばぬ。(たち上る。)

源十郎。 こりや十内。

十内。 はつ。

源十郎。 かねて申聞かせてある通り、武士と武士とが尋常の勝負に、かならず助太刀相成らぬぞ。

それに控へて見物いたせ。

十内。 はつ。

源十郎。 しからば小助。

小助。 源十郎、まるれ。

(ふたりは身繕ひして刀をぬき、二太刀三太刀切りむすぶ處へ、上のかたより定家が轉ぶやうに走り出づ。)

定家。 (息を切つて。)お二人とも、まあ待つて下さりませ。(二人のなかへ割つて入る。)

小助。 お、定家。そなたの心づくしも仇となつた。もう此上は運次第、討つか討たるゝか、二つに一つぢや。

定家。 斯ういふことのないやうにと、胸を痛めた甲斐もなく、悲しいことになりました。今更未練のやうなれど、もし小助どの、源十郎どの。どうぞ料簡し直して、この場は無事に納まるやうに分別なされて下さりませぬか。

源十郎。 これが一分の意趣ともあらば、料簡もあらう、分別もあらう。親の仇にめぐり逢うて、見逃すことがならうと思ふか。邪魔せず退いてをれ。

小助。 女が止むるを幸ひに、今更おめくと立別れては、源十郎の武士が立つまい。この小助もおなじこと。大小をたばさむ身に生れたが互ひの因果ぢや。どつちの男の運が強いか、あ

れへ退つて見物せい。

定家。

では、どのやうに申しても……。これ、源十郎どの。この勝負はお前が仕手ぢや。おまへの方から刃を引いたら、勝負つかずに済まうもの。おまへに取つては親御の仇、一生討つなどは云ふまいけれど、せめて今夜だけは……。この場だけは……。これ、このやうに拜みまする。

源十郎。

え、くどい、面倒な。十内、この女を引退けい。

十内。

おれも先刻からじり／＼してゐた。さあ、退け、退け。

定家。

いゝえ、退かれぬ、退かれませぬ。これ、小助どの。この間に早う逃けてください。

小助。

馬鹿なことを……。いざ、源十郎。潮明りと星あかりを便りにして。

源十郎。

む。太刀筋を見損するな。

(ふたりは再び切結ぶ。)

定家。

あれ、待つて……。あれ、あれ。

十内。

え、動くな。

(定家は猶も支へんと身をあせるを、十内は無理におさへて辻堂のなかへ押込む。小助と源十郎は

激しく闘ひて、たがひに傷を負ふ。定家も十内もはら／＼しながら見物し、定家は木連格子をあけて駆け出でんとするを、十内はしつかり押へてゐる。そのうちに二人は闘ひ疲れて相討のやうになつて倒れる。十内はあわて、駆け寄つて源十郎を抱き起す。定家も走り寄つてうろ／＼しながら先づ小助を介抱する。)

十内。

旦那様。お心をたしかにお持ちなされませ。かたきの小助は眼のまへに倒れて居りまする

定家。

ぞ。もし、旦那様、源十郎様……。これ、小助どの。(うろ／＼しながら更に源十郎の傍

十内。

もし、旦那様……。旦那様……。え、もう御返事はないか。折角かたきを仕留めながら、

このまゝやみ／＼御最期とは……。お、さうぢや。若旦那様は印籠を持つてござる筈、かなはぬまでも薬を飲ませて……。源十郎の腰につけたる印籠を取る。いや、水が無うては衛ませられぬ。これ、定家どの。おれがあそこへ行つて水をくんで来る間、こゝにいつかりと番してゐてください。

(十内は早々に下のかたの奥へ走り入る。)

定家。

これ、源十郎殿……。心をたしかに持つてくだされ。これ……。え、もう何うしても牛きられぬか。(泣く)小助のそばへ戻る。これ、小助どの。お前もやつぱり返事はないか。小助殿……小助どの。

(小助は微かに眼をひらく。)

定家。

お、お前はまだ生きてゐて下されたか。これ、わたしの聲がきこえまするか、わたしの顔が見えまするか。(顔を差寄せて呼ぶ。)

小助。

お、定家か。源十郎は……。

定家。

あれ、あの通りでござりまする。

小助。

(伸びあがる。お、もう息が絶えたか。たとひ死んでも仇と相討、かれも定めて満足であらうよ。)

定家。

せめて一人は助けたい。奴殿の戻らぬうちに、お前は早くこゝを立退いて……。 (小助の手を取つて引起さうとする。)

小助。

いや、いや、とても助からぬこの深手ぢや。われも源十郎のあとを追うて……。 (かたなを

取直す。)

定家。

そんならどうでもお前までが……。 (刀を持つ手にすがり泣く。うき川竹の瀬に立つ身は、ふたつの戀にひとつの心、いつれをいづれとも定めかねて、迷ひ憫んだ其果に、二つの戀が一度に消えた。おもへば悲しさ淺ましさ。恥かしいやら果敢ないやら……。 (泣き沈む。)

小助。

それも因果ぢや、約束ぢや。討つ討たるはこの世の義理、來世までも仇ではあるまい。源十郎もこの小助も、未來はおなじ世界に住んで、共にそなたの回向を受けうぞ。定家、さらばぢや。

(小助は定家をつき退けて、わが腹に刀を突き立て、引きまはして倒る。定家はわつと泣き顔れる。)

定家。

さらでも女は罪深いと聞いてゐるに、まして勤めする女の淺ましさ、今といふ今つくづく悟つた。いつそわたしも二人と一緒に……。 (小助の脇指を取つて心づく。いや、いや、こなたの刀で死んでは源十郎どのに義理が立たぬ。(脇指を捨て、源十郎の方へゆく。)) いや、いや、こなたの刀で死んではあちらに立たぬ。さうぢや、わたしの死場所は……。

(定家は身縊ひして上の方へゆかんとする時、夕波走り出す。)

夕波。

お、姉さま。

遊女物語

定家。

わたしのあとを追うて来たのか。(ちつと夕波の顔を見る。)おまへにも世話になりましたな。(そのまゝ夕波をつき退けて上の方へ走りゆく。)

夕波。

もし、お前。どこへ行かしたんす。これ、姉さま……。 (あとを追うて去る。)

平次。

(薄く雨の音。下のかたより十内は先に立ち、平次、五郎藏、ほかに数人の漁師等どやく出づ。)

十内。

もし、手負はどこにゐますのぢや。

五郎藏。

それ、そこに二人倒れてゐる。おゝ、二人とも血だらけになつて死んでゐる。(氣味わるさうに覗く。)

十内。

こゝは往來ぢや。兎も角もあの松のかけへ運び込んでくれまいか。おゝ、雨が降つて来た。少しも早う、頼む、たのむ。

大勢。

あい、あい。

(漁師どもは捨臺詞にて小助と源十郎との死骸を昇きあげ、下のかたの奥へ運びゆく。十内もつゞいてゆく。雨の音。上のかたより露霜尼は笠をかぶりて出づ。)

露霜尼。

(そこに落ちたる源十郎の刀を見る。)はて、こゝには刀が落ちてゐる。おゝ、おびた。しい血汐のあとは……。

十内。

(尼は燈籠にて照し視る。上の方にて水の音きこゆ。尼はあとを見返る。下の方より十内出づ。)

露霜尼。

もしやそこに刀が落ちてはゐませぬか。(ふり向く。刀とはそれでござるか。(燈籠をさし付ける。))それにしても今の水音は……。

十内。

ほんにあの水音は……。 (不思議さうに上のかたを見やる。)

夕波。

(上の方より夕波は泣きながら走り出づ。)

十内。

もし、誰か早う来てくだされ。おゝ、十内どの。姉さまが海に沈んで……。

露霜尼。

定家どのが入水されたか。

夕波。

止めようとするわたしを突き退けて、あれ、あの海端から……。

十内。

そんなら覺悟で身をなけたか。

露霜尼。

(口の中に)南無阿彌陀佛、なむ阿彌陀佛。(海にむかつて念佛を唱へる。)

(十内も思はず海の方にむかつて手をあはせる。夕波は泣き伏す。雨の音。ほととぎすの聲。)

——幕——

この悲劇三幕は西鶴翁の作「武家義理物語」の一節による。(作者)

京の友禪

大正六年一月作

大正六年三月。明治座初演。

初演當時の主なる役割——職人友七（市川左團次）源兵衛（市川左升）彌助（市川十郎）百右衛門（市川八百蔵）お京（市川松蔭）おいよ（片岡我童）など。

登場人物——西陣の職人友七、源兵衛、彌助。問屋の主人百右衛門。百右衛門のむすめお京。小間仕おきぬ。番頭安吉。西陣の織子おいよ、おかね、おはる、おそめ、おたけ。

(一)

京の西陣、織物問屋の店さき。二重屋體にて、上のかたに帳場格子を置き、うしろの壁に帳面などを澤山かけてあり。まんなかに暖簾の出入口あり。下のかたは棚の書割にて、織物類をつみ込んである心。棚の前にもおなじく織物を積みみてあり。店の上のかたには土蔵あり。下の方に町家あり。元祿の初年。三月のゆふぐれ。

（西陣の織子おかね、おはる、おそめ、おたけの四人は店に腰をかけ、おるひは店さきに立つてゐる。番頭安吉は帳場格子のなかに坐つてゐる。）

先づこれで大抵は片附いた。少しこゝで休まうではござんせぬか。

おかね。

京の友禪

おはる。

ほんに今朝から立詰め、膝も腰も痛くなりました。

(四人はほつとした體にて店に腰をかけてゐる。)

安吉。

いや、みんな御苦勞であつた。なにをいふにも降つて湧いたやうな今夜の縁談で、家中が引つくりかへるやうな大騒ぎぢや。

おそめ。

わたし達もけふは朝から仕事を休んで、奥のお手傳ひをしてゐるが、日が暮れたら又忙しいことでござんせう。

おたけ。

けふの骨折には芝居をみせて遣ると、旦那さまが仰しやつた。それを樂みに働きますせうか。

安吉。

日頃から物のわかつた旦那様ぢや。働けば働いただけのこととして下さるに相違ない。皆なもそのつもりで働いたがよい。お、かういふにも日が暮れる。春の日は長いやうでも、

いそがしく暮すと短かいものぢや。店へもそろくと灯を點したがよからう。

あい、あい。(奥に入る。)

おかね。

(筆を措く。)え、もうおちついて帳面なども付けてゐられぬ。あとは明日のこと、しよるか。(帳面をかたづけける。)

(おかれは行燈をさげて出づ。)

おかね。

もし、番頭さん。旦那様が奥で呼んでござりますぞ。

安吉。

それ、それ、その通りぢや。(あわて、奥に入る。)

おはる。

いつもながら番頭さんのそ、くさとしたことぢや。

(四人は笑つてゐる。織物職人友七、廿二歳。風呂敷づつみを抱へて物思はしげに出づ。あとより同じ職人源兵衛、五十餘歳、呼びながら出づ。)

源兵衛。

おい、おい、友七、この忙しいのに何處をほつ付き歩いてゐるのだ。お前がゐらないお蔭で、俺はさつきから二三ヶ所も使ひに遣られた。

友七。

(うつかりして。)それは御苦勞でござりました。實は忙しい間をぬすんで、家までちよいと行つて來ました。

源兵衛。

まあ、まあ、可いや。早く行かうではないか。

源兵衛。

(ふたりは店先に來る。)

おかね。

どうだい。奥の御用はもう大抵片附いたかね。

お、友七さん。さつきから旦那様がお前をさがしてゐられましたぞ。

(友七は黙つて店に腰をかける。)

おはる。これ、友七さん。旦那が呼んでみましたぞ。(傍へ寄つて大きく云ふ。)

源兵衛。よし、よし、判つた、わかつた。

(奥より同じく織子おいよ、十八歳。暖簾をあけて出づ。)

おいよ。もし、皆さん。お臺所の方がいそがしいので、手傳ひに来てくれとのごさんすぞ。

四人。あい、あい。(起つて奥にゆく。)

(おいは友七の方を見かへりながら、これも奥へ引返して去る。暮の鐘きこゆ。)

源兵衛。おい、友七。何をそんなにほんやりしてゐるのだ。いや、それも大抵判つてゐる。店の娘

御が今夜急に婚を取るといふので、お前は面白くないのだらうが、これも浮世とあきらめて我慢しろ。俺もこの年になるまでには、腹の立つことも、口惜しいことも、悲しい思ひも、辛い思ひも色々して来たが、つまりは我慢が肝心だ。決して短氣を起してくれな。え、いゝか。

(奥より若い職人彌助出づ。)

彌助。おい、友七。しつかりして呉れ。おまへも子飼の職人で、家の婚にすると三年前から約束

がきまつてゐるのは、誰でも知らぬものはない。そのお前を出しぬいて、今夜急にほかから婚を取るとは、あんまり人を踏付けにした仕方だ。おまへも男なら黙つてはゐられまいぜ。

源兵衛。これ、これ、つまらぬことを云つてくれまい。さうでなくても氣の昂つてゐるところへ、薬を灸べてどうするのだ。

彌助。それでもあんまり口惜いから、友達の好みに云つて遣るのだ。

源兵衛。人を焚き付けるのが友達のよしみか。若い人の理窟は不思議なものだ。(笑ふ。)

彌助。お前のやうな胡麻摺りとは人間が違ふのだ。

源兵衛。まあ、なんでも可いから、友七をおだて、くくれるな。

彌助。煽てようと煽てまいとおれの勝手だ。おい、友七。どうするんだよ。(友七の腕をつかむ。)

源兵衛。まあ、よせと云ふのに……。 (引分けようとする。)

彌助。えゝ、うるさい。引込んでゐる。(源兵衛を突き倒す。)

源兵衛。それほど喧嘩をしたいのか。困つた奴だな。(笑ひながら着物の裾をばたく。)

(奥よりおいは出づ。)

おいよ。

彌助どん。奥で呼んでるますぞ。

彌助。

え、奥で呼んでる。おい、友七。ほんたうに何とか考へてみるよ。

(彌助は奥に入る。)

源兵衛。

はて、若い者はみんな気が暴くて困る。浮世の鹽の嘗めやうがまだ足りないな。おい、友七。いくら誰がなんと云つて煽つても、決してつまらぬ料簡を起すなよ。辛いことや口惜いことを辛抱するのも、つまりは人間の修業のひとつだ。

(源兵衛も起つて奥に入る。おいよは左右を見まはして友七の傍による。)

おいよ。

今も源兵衛さんが云ふ通り、たとひ誰がなんと云はうとも、決して短氣を起して下さるな。廣い都にお京さんのほかには女はないか。死ぬほどお前にこがれてゐる、女がこゝらにゐることは、お前もかねて知つてゐる筈。これ、友七どの。うつむいてばかりゐると、こつちを向いて下さらぬか。

友七。

おいよどの。お前が日頃の深切は、友七もよく知つてゐるが、なにをいふにも行く／＼は、こゝのお京さんと女夫になる約束。それもいたづらの内証事では無し、旦那様から表向に相談のあつた仲。おまへに情なくしてゐるのも、その約束を守ればこそ。かならず恨んで

おいよ。

くださるな。

そのお京さんが約束を反故にして、ほかのお婿を貰ふからは、お前ばかりが義理を立てるは無駄なこと。もう誰にも遠慮はあるまい。口廣いことを云ふやうなれど、この西陣に勤めるものは、女でこそあれ男ひとりを養ふほどの腕は持つてゐる。お前とわたしとが一致して、腕かぎりに働いたら、一軒の家を持つも瞬く中ちや。よく分別してください。許嫁のお京さんがあると知りながら、今まで兎やかう云ふたはわたしが無理。その無理のなふ時節が来たのも、日ごろ信心する愛宕様や六角様の皆お庇。わたしやあんまり嬉しうて、ゆうべも碌々に寝られなんだ。

友七。

はて、人に聞かれると悪い。(左右をみかへる。)その婿取りは旦那様がお決めなされたこと。で、お京さんはなんと思つてござるやら。それも確とは判らぬものを、なんでお前に返事がならうぞ。

おいよ。

顔ばかり美しくても、あの不眞實な嘘つきのお京さんに、お前はまったく未練があるのか。恨めしいよりは悲しいのが先に立つて、わたしや此の上にはよう云はれぬ。友七どの、察してください。(泣く。)

京の友禪

百右衛門。お、おいよはそこにゐたのか。
(おいよは驚きて泣顔をかくす。)

百右衛門。ちと折入つて友七に話したいことがある。そなたは奥が忙しからう。あつちへ行つて何かの手傳ひをしてくりやれ。

おいよ。はい。(心をこして奥に入る。)

百右衛門。さて友七。近う來やれ。奥には双方の親類などが來てゐるので却つて面倒、こゝで些と話したいことがある。と云うたら、大抵察しも付かうが、實は今夜の祝言ぢや。むすめのお京をお前にめあはせて、この家の婿にしようとして三年前に約束した。

友七。(形を正して。)はい。たしかに御約束なされました。

百右衛門。(云ひそ、くれて。)さあ、さう云はれると猶更云ひにくいが、お前も知つての通り、去年の春の火事で丸焼け、それからつゞく商賣の手違ひで、身上は次第に左前。かうして立派に店を張つてゐるものゝ、その内證は火の車ぢや。この晦日までに千兩の金がなければ、十代つゝいたこの店を人手に渡さねばならぬ仕儀で、この間から胸を痛めてゐるところへ、

降つて湧いた今度の縁談。むすめの器量を望んで、千兩の持參金で婿に來ようといふ男がある。その婿といふのは……。

友七。(遮る。)
いえ、うかゞふには及びませぬ。そのお婿が誰であらうとも、つまるところはこの友七をよそにして、お京様をほかの男にお遣りなさる思召でござりませう。その噂も薄薄聞かぬではござりませぬが、あゝして立派にお約束なされたからは、よもやと思つて居りました。

百右衛門。もう此上は、お前になんと云はれても、たゞあやまるよりほかは無い。けふは云はうか、あすは打明けようかと、一日のばしに日を送るうちに、向うからは頻りに急いで來て、兎もかくも今夜内祝言。

(友七は百右衛門の顔を吃とみる。)

百右衛門。さあ、腹も立たう、口惜しくもあらうが、手をついて頼む、堪忍してくれ。今更のことではないが、金がかたきの世の中ぢや。(ほろりとする。)
千兩といふ金がほしさに、娘には氣に染まぬ婿をとらせ。おまへには詐り者と怨まれる。めでたい今夜の祝言も、わしは心で泣いてゐるのぢや。

友七。

この身代を取直したさに、持参金のお婿を取るといふ、お前さまの御料簡はよく判りましたが、して、それはお京様も御得心でござりまするか。

百右衛門。

はじめは忌ぢやと云ひ張つたが、わしの涙に気が折れて、たうとうおとなしく承知した。

友七。

(思はず乗出す。)では、お京様も得心なされて、お婿を取るとおつしやりましたか。

(百右衛門は眼をふきながら首肯く。)

友七。

(乾と思案して。)よろしうござりまする。お京様も御得心とござりますれば、もうなんとも申上げやうもござりませぬ。

百右衛門。

そんなら承知してくれるか。職人にはめづらしい正直者、孝行者、お前のやうな婿を取れば娘も仕合せ、わしも仕合せとたのしんでるた甲斐もなく……。いや、いや、もう云ふまい。友七、あきらめてくれ、堪へてくれよ。今夜は氣ぜはしいのでおちくと相談もならぬ。(起ち上る。)いづれ又あらためてゆつくりと話ませう。たとひ娘との縁は切れても、わしはやつぱりいつまでもお前を婿ぢやと思つてゐますぞ。

(百右衛門は力なげに奥に入る。友七はそのうしろ影をちつと見送る。)

友七。

ふだんからお情深い旦那様が、涙をこぼしてお頼みなさるには、よくく切ない譯があら

う。こりやいつそあきらめるより外はあるまいか。(腕をくんで考へてゐる。)

(奥よりおいよ出づ。)

おいよ。

旦那様の今のお話で、おまへも得心しなされたか。

友七。

忌とも云はれぬ義理となつた。(嘆息する。)

おいよ。

(いそぐして。)それがほんの男といふもの。お婿様のお奥入れにもう間もないとて、お嬢

様はお風呂に這入るやら。

友七。

お、お風呂に這入るやら。

おいよ。

白粉をつけるやら。

友七。

おしろいをつけるやら。

おいよ。

髪も綺麗にかきあけて。

友七。

髪も綺麗にかきあけて。

おいよ。

おきぬ殿と一緒に居間へ這入つて、これからお召換へをなさる筈。

友七。

む。

(友七はもう堪へ兼ねて風呂敷をつみを引つかへ、衝と起ちあがりて上のかたへ行かんとするを、

おいよはあわて、遮る。

これ、急に血相をかへて、お前はどこへ。

(友七はあせりておいよを突退け、無言にて走りゆかんとするをおいよは支へる。友七は焦れておいよをつき倒し、狂へるやうに上のかたへ走り去る。)

(11)

奥庭、娘の居間。あまり廣からざる二重屋體、風雅なる作りにて、すこしく上の方に寄りたる軒まきに櫻の大樹、花は白く咲きみだれたり。ほかにも立木あり、石燈籠などもあり。

(娘お京、十八歳、鏡臺にむかひ、小間仕おきぬが髪をあげてゐる。その傍には行燈あり。衣桁には美しき嫁入衣裳をかけたなり。)

おきぬ。お京様、今宵はおめでたい御祝言と申すのに、なぜ浮々とはなされませぬ。どうやらお顔の色が悪いやうな。

お京。あの友七はどうしたであらうな。

おきぬ。さつきからお店にも見えぬやうでござりました。お髪が濟みましたれば、もうそろくとお召換へをなされまするか。

(お京は黙つて思ひ悩んでゐる。)

おきぬ。もし、お京様。

お京。もう着換へねばならぬかなう。

おきぬ。もうすつかりと日が暮れてしまひました。

(おきぬは鏡臺を片寄せてゐる。上のかたより友七は風呂敷つつみをかゝへて出づ。)

おきぬ。おゝ、噂をすれば影とやら。おまへは友七どの。

お京。え。(のび上る。)

友七。お京様にお目にかゝりたいと存じて出ました。それへまるつても宜しうござりまするか。

(縁に腰をかける。)

おきぬ。あつちへ行けとは……。

友七。はて、行つてくだされと云ふに……。 (叱るやうに云ふ。)

京の友禪

おきぬ。 あい、あい。

(おきぬは不安らしく起つてゆく。お京はうつむいてゐる。)

友七。(憤怒を無理にしづめて。) もし、お京様。今夜の御縁談をお前はどう思つておいでなされま
する。(わざと落着いて云ふ。)

お京。 友七、そなたには合はず顔がない。免してたもれ、堪忍してくりやれ。

友七。(まだしづかに。) いや、なりませぬ。堪忍はなりません。免すの、堪忍するのと云ふは、つい
一通りの粗相か過失。三年以來、男をだまして、唯そのやうな詫言で済むものと思召しま
すか。

お京。 すまぬは萬々知つてはるれど、今となつては一言の詫言よりほかに詞はない。これ、もう一
度云ひます。免してたもれ、堪忍してくりやれ。(泣き伏す。)

友七。 何度お云ひなされても、その詫言で承知する友七ではござりませぬ。忘れませぬ。一昨年
の春、お前が十六、わたくしが廿歳の時でござりました、親旦那様がわたくしをお居間へお
呼びなされて、おそかれ速かれ婿を取らねばならぬ娘のお京。おまへの正直を見込んで頼
む、どうぞ婿になつてはくれぬかと膝詰めでの御相談。お前も覚えておいで、ござりませ

うな。

お京。 あ、もう、それを云うてたもるな。

友七。(聲あらく。) 云ひます。わたくしの氣の済むまで、百度でも千度でも云ひます。しかも
お京が十八になつた曉には、祝言させうと仰しやつた。そのお前は十八の今年になつて、
誰と祝言なさるのでござりまする。この友七が忌ならば、何故その時にあからさまに仰し
やつては下さりませぬ。

お京。 なんでお前を忌なぞと……。自分の夫は友七と心に決めてゐたなれど、よんどころない今
度の仕儀。わたしや死んだ氣で婿を取るのぢや。

友七。 お京様。そのお詞に嘘はござりませぬか。

お京。 嘘はない。嘘はない。鴨川の水が逆にながれても、わたしの詞に嘘はあるまい。

友七。 それを承はつて落ちつきました。(打笑む)では、お京様。これからわたくしと一緒に
でなされませ。(お京の袂を取る。)

お京。 して、どこへ行くのぢや。

友七。(忙しく)どこでも構ひませぬ。ふたりが行かれる所まで行きませう。さあ、些とも早うお

出でなされませ。

お京。ぢやと云うて……。

友七。こちらの御身代に眼がくれて、婿にならうと約束した友七ではござりませぬ。お前といふ

者さへあれば、それで宜しいのでござりまする。さあ、さあ、早く。(無理にお京の袂をひく。)

お京。(縁より片足をばづしなから)これ、待つて……。まあ、待つてたもれ。たとひ何と云やつて

も、そなたと一緒にこゝを出て行くのは……。

友七。え、やつぱり忌ぢやとおつしやりまするか。

お京。くどいやうぢやが、堪忍して……。

友七。なりませぬ。

お京。(手を引かれて、お京は庭によるめいて降りる。)

これ、友七。どうしてもそなたとは一緒にゆかれぬ。免してたもれ、堪忍して……。

友七。(怒る)又しても堪忍か。堪忍のならぬは初めから断つてある筈。どうしてもこゝを動かれ

ませぬか。(詰め寄る。)

お京。どうしても行かれぬといふわけは……。

友七。

(急いで)え、それはもう旦那様から聞きました。お前からあらためて聞くにはおよばぬ。忌か應かは一言ですむ。さあはつきりと御返事を……。もし、お京様、お京様……。返事

のないはいよく不得心か。む、もうこれまでぢや。

お京。あれ。

(お京は縁に逃げあがるを、友七はつゞいて追ひあがりて引戻す。お京は衣桁にかけたる衣裳を取

つて友七になげ掛け、再び庭に逃げおひる。友七は追ひまはす。おぼろ月は櫻の梢を照して庭の上

は明るくなる。この以前よりおいはそつと忍び出で、櫻の蔭にかくれて窺ひるたりしが、この時

駈け出でて友七に鈍る。)

お京。お京様を殺せばおまへも科人……。

友七。科人は覺悟の上、ひとを殺せば我も死ぬのぢや。

お京。お前を殺してなんとならう。まあ、まあ、短氣は止めてください。

友七。え、しつこい。退け、退け。

(友七はおいよを突退けて、又お京を追ひまはすを、おいは二人の間からみて、駈倒されなが

ら友七の足に纏りつく。お京は櫻の木を楯にして喘ぎながら叫ぶ。

お京。

これ、友七、たつた一言云ひたいことがある。約束にそむいたはわたしの罪、殺して胸が濟むならば、わたしはいつそ殺されたい。それを卑怯に逃げまはるは、父さんがいとしいばかり。潰れか、つた身代を取返すために、そなたとの約束を反故にして、こゝろにも染まぬ婚を取る。わたしが今こゝで死んだらば千兩の持参金も手に入らず、家は潰れる、父さんは路頭に迷ふ、それがかなしさに命が惜い。(泣く) 三歳の年に母さんに死にわかれ、繼母のむごい手にはかけまいと、勿體なや父さんは男やもめを立て通し、わたしを育て、くだされた。そのありがたい御恩を思へば、どんな悲しい辛抱も、辛い我慢もせねばならぬ。命が惜いといふはこゝのこと。一緒に逃げられぬといふは斯うした譯。それを察して、推量して……。これ、この通り手をあはせる。

(お京はなみだながらに掻き口説く。友七はちつと聴いてゐる。)

おいよ。

友七どの、今おつしやつた入譯が、おまへの胸にはまだ落ちぬか。

友七。

む、。(思案する)でも、このまゝでは胸が晴れまい。(そこに落ちたるお京の衣裳に眼をつける。)

かいふ人は、かたきの衣を裂いて恨を晴らしたとやら。わしも約束を破つた女の身代りに、この着物をかうするのぢや。(短刀にて衣裳をすたくくに切裂く。)

(奥より百右衛門出づ。)

百右衛門。

詳しいことは奥で聴いてゐるが、友七、よく聞き分けて料簡してくれた。あらためて禮を云ひまするぞ。

お京。

わたしも改めて禮をいふ。これ、この通りぢや。(再び手をあはせる。)

百右衛門。

それにつけてもその嫁入衣裳、そのやうにすたくくに切裂いてしまつては、とても今夜の用には立つまい。今にも婚殿が來るといふに、こりや困つたものぢやなう。

友七。

御祝言の衣裳には相應しうないかも知れませぬが、どうぞこれをお召しくだされませぬか。(友七は風呂敷づつみを解いて、白絹に美しき襦袢をかいたる女小袖をとり出して見せる。)

おいよ。

(覗く。) お、夜目にも美しい女小袖。

百右衛門。

織物で無し、染模様でなし、こりや書繪ぢやな。(小袖を取つてちつと見る。)

お京。

どうしてそなたは其のやうな美しいものを……。

友七。

どなたの眼にも美しいとみえまするか。

京の友七

百右衛門。百右衛門も渡世柄で、綾錦の織物や染模様、美しいもの、数々見盡したが、これはまた何と云はうか。よし野龍田の花紅葉を一つに寄せても斯うはあるまい。いや、美しい、見事なものぢや。(小袖を透して惚々とながめてゐる。)

友七。それはわたくしの母の形見でござりまする。

百右衛門。では、これはお前の死んだおふくろが形見に残して置いたのか。

(思はず小袖を友七に返す。友七はうけ取つて膝の上に置く。)

友七。

まあ、お聴きくださりませ。お京様は小さい時におふくろ様にお別れなされましたが、わたくしは丁度うらはらに、幼いときに父親に別れて、母の手一つで育て上げられました。母は後家を立て通して、すゝぎ洗濯や針仕事、貧しい暮しのあひだにも、それは、それは、わたくしを可愛がつて育て、くれました。(涙をふく)男の子の一生には、おそかれ速かれ嫁を貰はねばならぬもの。どのやうな嫁女が来るかは知らぬが、その祝言のときに着せたいと、自分の髪油や履物の代までも切りつめて、長年の丹精でやうく拵へあけたこの一枚の白小袖。その嫁の顔も見と、けすに、母はこれを形見にのこして、五年まへに世を去りました。(又泣く。)

百右衛門。

お、お前のおふくろがお前を可愛がつてゐたことも、お前が親孝行であつたと云ふことも、わしはよく知つてゐる。お前を婿にと思ひ立つたも、一つはその親孝行の心に惚れたのぢや。

友七。

こちらのお婿にといふお話のあつた時に、わたくしはすぐに母の墓詣りを致しまして、石塔の前で詳しい話をして、死んだ母を喜ばせてまゐりました。大家の娘御と祝言するからは、白小袖も嫁入衣裳も要らぬものと思ひながらも、これほどに丹精してくれた母のなさは捨てられず、せめては常の曠着にもと、このごろ都で流行り出した書繪をふつと思ひついで、子供るときから繪心のあるのを幸ひに、暇を見ては少しづつ書くほどに塗るほどに、自分ながら美しいと思ふやうな、こんな模様が出来あがりました。

お京。

友七。

そんならその繪はそなたが書いたか。仕立てた小袖は母の形見、その白い上に繪をかいたは、素人ながらわたくしが一心をこめた筆の綾。それもみんな仇事になるからは、いつそお京様を連出して、どこへなりとも立退かうと、ほかの家財諸道具は捨て置いて、唯これだけをかへてまゐりましたが、それも亦無駄になりました。(小袖を見つめて嘆息する。)

京の友禪

お京。

親ほど有難いものはござりませぬ。(また涙を拭く。) さつきもお京様に父の恩と云はれたとき、その一言が肝にこたへて、ふり上げた刃も思はず鈍りました。もし、お京様。せめて母のこゝろざしを無にせぬやうに、お氣には入らずとも今夜の御祝言には、この小袖を召してくださりませ。これには母のなみだも宿り、わたくしの誠も籠つて居ります。(共になみだを拭ふ。) 悲しい話で泣かされました。併しそれはおまへに大事な品、約束に背いた女にはくれられまい。いつまでも大切にしまつて置いて、未来の妻に贈るのが、死んだ母御への孝行ではあるまいか。

百右衛門。

さうぢや、さうぢや。おふくろの形見ばかりでない。お前が永のあひだ丹精して、これほどの書繪を仕上げたのを、むざと人に遣つてはなるまい。

友七。

はて、おつしやりますな。これから五年十年はおろか、一生抱へてゐませうとも、ほかに遣手はござりませぬ。

お京。

え。
友七はもう女房を持ちますまい。一生獨身で送る男に、女の小袖は不用でござりまする。

(お京と百右衛門は顔を見あはせて、なみだを催す。おいよは泣きながら聴いてゐる。奥よりおきぬ出づ。)

おきぬ。

もし、旦那様、お京様。お婚様のお駕籠がもう見えました。

百右衛門。

おゝ、婚どのがもう見えたか。(行きかけて友七を見かへる。) これ、友七。くどいやうぢやが死してくれよ。

(百右衛門は眼をふきながら奥に入る。おきぬは庭におりる。)

おきぬ。

さあ、お京様も早うお越しなされませ。おゝ、お履物も無しに庭へ降りて、どうなされたのでござりまする。

おきぬ。

あゝ、もし。(お京の手を取る。) 早うおいでなされませ。
(お京は無言にて起ち上り、友七の傍へゆく。友七も無言にて小袖を出すを、お京は受取らうとして互ひに顔を見あはせ、お京は小袖をかへて泣き伏す。)

おいよ。

へ連れられてゆく。友七は起ち上りてお京のうしろ姿を見送りながら、櫻の木に寄りかゝる。これ、友七どの。さつきもあれほど云うたが判らぬか。約束にそむいた女に、あれほど丹精した美しいものを、むざく遣るとは何事ぢや。あの小袖の貰ひ手はこゝにあるのを忘

京の友七

友七。

れてか。むごい情ないお人ぢやなう。(泣く。)
なんほ酷いと云はれても、あれはどうもお前に遣られぬ。お前に遣るものはほかにある。
まあ、待つてくだされ。

おいよ。

(友七は短刀を取りて、わが髪を頭髻より切り切りておいよに渡す。)
え、これは……。

友七。

お前がこれまでの深切は、一生決して忘れぬが、この友七は今夜かぎり、戀も捨てた、世も捨てた。かならず恨んで下さるな。

おいよ。

降つて湧いたお京さんの縁談は、わたしに取つては神佛のお助けと、喜んでゐたもほんの束の間。所詮わたしは世のなかの女の數には入らぬ身で、思ふ人にも添はれぬか。嬉しいやうで悲しい形見、一生泣けとてくだされたか。(切髪をかへて泣く。)

(上の方より職人源兵衛出づ。)

源兵衛。

さつきからの話を聴いて、おれも思はず涙がこぼれた。それでもよくまあ我慢してくれた。お前の料簡一つで、この店も先づ立ち直るといふものだ。して、そのやうに髪を切つて、もう職人をやめる氣か。

友七。

わしはこの通り浮世を捨てた。誰のお弟子といふでもないが、わしは代々の禪宗なれば、友七の一字を取つてすぐに友禪。あたまを丸めて世を終らう。

(奥よりお京は友七の小袖に着かへて出づ。)

お京。

もう祝言の時刻も迫つた。この小袖に着かへた姿をおまへに一度見せに來ました。

友七。

お、着てくだされましたか。

(思はず立寄つて、お京の立姿をつくりく眺める。源兵衛もおいよも眼をあつめて、その美しさに見惚れてゐる。)

おいよ。

あの小袖にお着かへなされたら、また一段と御器量が上つたやうな。

お京。

褒められて嬉しいやら悲しいやら。一生に一度の祝言に、こんな思ひをしようとは、この年になるまで知らなんだ。そんなら友七。

友七。

おめでたうござりまする。(頭を下げる。)

(お京は悄れながら奥に入る。)

源兵衛。

(見惚れる。お京さんの美しいは今更のことではないが、あの小袖の模様の美しさ、おれも生れてから初めて見た。織物や染物にも飽が來た都の女は、みんなあれを見習ふであらう)